
21世紀も少年

市川寛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

21世紀も少年

【Nコード】

N4935F

【作者名】

市川寛

【あらすじ】

行くだけで百万円貰えるパーティーの招待状が極貧の隆に来た。過去の御礼という名目なのだが、思い当たる節は無い。差出人名義が死んだ同級生で、招待客の多くが自分と無関係な元暴走族の帝のメンバーのため、恐怖を抱きつつ、参加する。ショーの後、白い覆面を被った主催者は現れる。この男の目的は本当に御礼なのか、それとも。隆はこの出来事を転機に今までと違う人生を歩みだそうとした時、国家に対するテロが起きる。犯人が帝のリーダーに違いな思い、警察に通報したのがきっかけで、その事件に大きく巻き

込まれていく。

ただで百万プレゼント（前書き）

漫画の二十世紀少年やモンスターの小説版だと思って下さい。ただ、主人公は国家転覆を狙う犯罪者と戦うのではなく、利害関係者として関わっていきます。漫画と同じで、伏線の多さや大風呂敷が一番の特徴ですが、先にラストを作ってから書いたので、それらは綺麗な振りになっていると思います。

八話でただで百万貰える話は一応完結しますので、たいして面白くないと思われた方は、もしよろしければ五話位からお読み下さい。そこからは簡単で短い文章です。

勿論、全てフィクションです。

ただで百万プレゼント

「あほくさ、ただで百万。そんなことあるわけないだろ」

「本当なんだって。結構、多くの奴のところにもきてないかと思って電だよ。だから、お前の所にもきてないかと思って電」

「そんなの小学生でも嘘ってわかるよ。馬鹿馬鹿しい」

「本当なんだって。確認が取れた奴だけでも十数人いるんだよ」

「今仕事から帰ったばかりで、くたくたなんだ。冗談でなく、真面目な話があるなら早くしてくれ」

「だから、冗談じゃないんだよ。誰が」

「じゃあな」

隆は電話を切った。何が百万だ、くそ。自分の劣悪な環境ではとても妄想などみる余裕などない。少年レベルの与太話で掛けてきた幼馴染の健太に腹が立った。

シャワーを浴び、スーパーで買った菓子パンを食べて、ベットに寝転んだ。

ああ、くそ、ああ。

隆はスーパーの流通で派遣社員として働いていた。卸や製造元から運ばれてくる商品を、神奈川県東部にある各店舗に仕分けするのが主な仕事である。そのため、もう直ぐ来るゴールデンウィークが鬱なのだ。最近、急に同僚が辞めたため、更に長時間重労働になった。その疲れから、高三時代に遭った交通事故の後遺症である股関節の痛みが、仕事中度々現れた。

今でさえほぼ限界なのに、ゴールデンウィークが来たら。十連か、会社辞めようか。一瞬そんな思いを抱くが、無理なのは明白なので、すぐに頭から消え去る。寝よ、働き続けるしかないんだ、そうそれしか。

電気を消し、しばらくすると、さっきの電話が気になり出した。話の内容でなく、三年半ぶりに話をした健太のことである。

隆にはほとんど友達がいない。地元には健太をはじめ沢山いたが、事情があつて電話番号を変え、そこを離れた。それから少しでも多く稼ぐ必要があつたため、働くために生きているという状況が三年半続いている。この期間、隆にとって楽しかった思い出などないに等しい。そのため懐かしいという僅かな快感に引かれていく。健太との思い出に始まり、少年の頃の楽しかった頃の記憶がたくさん蘇ってくる。だが、そこに母親の顔が出てくると一瞬にして現実に戻る。

駄目なんだ、そう、駄目なんだ。そのために地元を離れたんじゃないか。そう、それが正しい判断だ。

しかし、さっきの回想のため、全くの意味不明な内容とはいえ、自分に電話を掛けてきてくれたのをじゃけに扱ったことが気になり出す。

謝るべき、心理的にはそうしたいが人間関係が復活した時のことを意識する。自分は働き続けることだけを考えなくてはいけない。そのためには少しとはいえ、快感は駄目だろう。そう、旨い物を食べればそれに金を使いたくなるし、面白い遊びを覚えれば……。地元に帰りたくなったりもしたら。いや、でも。

しばらく、葛藤状態が続く。その時に携帯が震える。隆はすかさず取る。

「もしもし、さっきはごめん」

「もしもし、すみません。中村隆さんでないですか」

「あつ、父さん」

「ああ、お前宛に書留で手紙が来ているけど、どうする」

「適当に処分しておいて」

「それはないだろう。書留で送られて来たんだから、大事なことだろう」

「誰から」

「大平康平さんから」

「えっ、ちょっと待って。一回切るね。悪いけど、すぐに掛け直

すから待っていて」

「ああ、分かった」

「あつ、そうそう健太に電話番号教えたのは父さん」

「ああ、そうだけど。不味かったか」

「いや、全然」

今度は何のためらいもなく、電話を健太に掛ける。

「もしもし、さっきは御免」

「別にいいけど、やっぱりお前のところにも来たのか」

「実家にそれらしきものが送られてきたんだけど、差し出し人は大平康平で合っている」

「おお、そうそう、それ。なっ、本当だろう」

「信じなくて御免」

「いや、気にするな。信じられないのが普通だ」

「それで悪いけど、もう一回内容を言ってくれる」

「ああ、こどもの日に黒崎市のホテルに行けば、百万円くれるって」

「本当にそれだけでくれるっていうの、何か条件があるだろう」

「いや、それだけ。今の自分があるのは君たちのお陰だから、そのお礼だって」

「やっぱり悪戯だろう」

「いや、送られてきた全員に十万円の為替が入っていたんだから、単純な悪戯ではないだろう」

「誰が送ってきたか、全く分からないの」

「ああ、康平の親に聞いたけど、そんなことはしてないって。それでみんなに聞いたけど、誰も心当たりないっていうんだよ。お前誰か思いつかないか」

「全く。それで電話してきたの」

「ああ、そうだよ。それと行くべきか、それとも行かないべきか、相談しようと思って」

「近いんだから行けばいいだろう。貰えなかったら、帰ればいい

わけだし」

「でも俺たちを恨んでいる人間はいても、百万円渡すほど感謝する人間なんていないだろう。だから俺たちを集めて殺すのが目的じゃないかと思って」

「そう言われてみるとそうだよな。十万掛ける数十なら何とかなるかもしれないけど、数千万も金を出せる人間なんて周りにいたと思えないからな」

「だろう。だから頭のいい、お前に相談しようと思ったんだよ」

「分かった。手紙が来てからまた掛け直すよ。さっきは御免な」

「気にするな。じゃあな」

隆は電話を切った。その時、掛けていたのが携帯であることに気付き、しまったと思う。今度は携帯でなく、固定電話を掛ける。

「もしもし、父さん」

「ああ」

「悪いけど、さっきの手紙とっても大事なものだから、書留で送ってくれる」

「ああ、分かった。住所と何時にするんだ」

「神奈川県……………」

「分かった。それと大事な話がある」

「何」

「いつもお金を送ってきてくれてありがとう。恥ずかしい話だが、これからお金を送って欲しい。ただ、十数万も貰ってはいかに言っても申し訳ない。五万も送ってくれば十分だ」

「十分わけないだろう。そもそも俺が作った借金だし。それに香澄たちの大学費用もある。俺がバイクに乗ってなかったら、事故は起きなかった。父さんも母さんも反対したのに乗っていたからあの事故は起きたんだ」

「いや、若いときは誰だってバイクみたいなものに憧れるものだよ。それにあの事故は向こうの完全な過失なんだから、お前が気にすることはない」

「いや、でも実質母さんを殺したのも」

「違う。お前のせいでない。母さんはあの時はもう病気だったんだよ」

父隆二は強い口調でそう言った。

「いいよ、慰めは。絶対にお金は送り続けるから。じゃあ、手紙お願いね」

「本当にすまない」

「ああ、じゃあ」

電話を切り、ベットに寝転ぶ。あの事故のことを意識したため、「兄ちゃんが母さんを殺したんだ」「そうだ兄ちゃんが……」、久しぶりに妹の香澄と舞の声が、隆の頭の中で数度繰り返される。だが、すぐに止んだ。

これを初めて聞いた時から数ヶ月間は、頭の中で何度も何度も妹の声のまま再生された。そのたび、「俺のせいでない、あの事故のせいなんだ、あの事故自体も俺に過失はない」、そう抵抗を試みるが、その場を凌ぐのがやっとで、止むことはなかった。隆自身が自分のせいで死んだという意識があるためだ。いつまで経っても、母親を失った悲しみと頭のパニック状態が続いた。疲れ果て、自分のせいでないという自己防御の方が屈した。それからの隆の中に存在するのは悲しみと家族への強烈な罪悪感だけだった。これでも前者よりは遥かに楽になったのだ。

母親の死の主因は前から抱えていた内臓疾患の悪化である。しかし、隆の交通事故が母親の死を急激に早めたのは間違いない。数ヶ月間、意識不明の重体とだったため、極度の心労と疲労を要したのだ。さらに警察の出鱈目な事故処理のため、当分の間、隆が二人を殺したことになっていたことも加わる。

事故の過失は隆と衝突した葉山にあるのだが、その男は身寄りのない中年一人を巻き添えに死んだ。自賠責にすら入っておらず、二十歳を過ぎているため、親に損害賠償責任もない。そのため隆の家には自分と母親の莫大な治療費が残った。この半年後、父親は勤め

ていた会社を解雇され、今でもアルバイト並みの給料で働いている。

ただで百万プレゼント（後書き）

最後まで読んで頂き、有難うございました。読後、全くの時間の無駄だと思われた方には深くお詫びします。すみませんでした。

初めて投稿した作品のため、失礼な点が多々あると思います。もし、よろしければその箇所をお教え下さい。お願いします。

天才と狂人（前書き）

話の途中で裁判の話が出てきます。現実にとこったある事件と似ていると思われるかもしれませんが、一切関係ありません。完全なフィクションです。

天才と狂人

二日後に手紙が届き、軽い緊張状態で裏側を見る。大平康平、確かにそう書かれていた。その男は隆の同級生で、高二の時にバイク事故でなくなった。僅かな不安を抱くが、期待の方が遥かに大きい。封を開けて手紙を取り出す。ラッキー、健太の言う通り十万円分の為替が同封されていた。隆の年齢二十一歳付近で百万掛ける数十人、つまり数千万を持っている可能性がある人間はどう考えても二人しか思いつかない。一人は天才、もう一人は狂人だ。そのことを意識した後、手紙を広げる。

皆様へ

私は今大変豊かな暮らしをしております。これは皆様のお陰によるところが大きい。そのことに対する感謝として、子供の日の七時より仲倉ホテルにて盛大なパーティを開きたいと思います。

私達が子供の頃、活躍された芸能人の方々も多数出演されます。来て頂いた方全員に、感謝料として百万円差し上げます。

同封した十万円分の為替は信用して頂くためのものです。来て頂かなくても返す必要などありません、私からの感謝料として受け取って下さい。

皆様のご来場、心よりお待ちしております。

大友康平

本当か、悪戯か、それとも殺す気か。ホテル代を含めれば、最低三千万以上掛かるだろう。別に感謝されるようなことをした覚えもないし、殺されるほど恨まれることをした覚えもない、悪戯か。悪戯で数百万使う人間がいるのか。健太と俺の共通の知人は……………。

まあ、とりあえず電話か。健太に掛ける。

「なっ、本当だっただろう」

「ああ、信じなくて御免。誰が送ってきたか分かった」

「いや、全く。誰一人心当たりないって」

「大体、どんな奴に送ってきたの」

「帝や黒高のメンバーが多いかな」

黒高とは黒崎南陽高校の略で、帝とは健太の属していた暴走族の名前だ。

「だったら悪戯だろう、ひょっとして江口か、織田」

江口は帝のトップ、織田とは隆の属していた山奥の公道でレースをするg g gのリーダー格だ。さまざまな暴走族も参加しており、帝のメンバーも多々いる。レースが目的なので、特別な仲間意識はない。

「江口さんや織田のわけがないだろう」

「何でだよ。他は奇跡が起きたとしても無理だろう」

「あのなあ、二人ともまだ檻の中なんだよ。もうすぐ二人とも出てくるらしいけど」

「檻の中、二人とも捕まっているの。それにまだって、どういうこと」

「本気で言っているのか」

「ああ」

「あっ、そっか。お前が事故って意識不明だっただろう。あの時

に捕まってから刑務所の中だよ」

「何して捕まったんだよ」

「強姦未遂、めん罪だけど。北殿の強姦未遂ってテレビでよくやっていただろう、あれだよ、あれ」

「テレビ、あんまり見てないから知らない。それとめん罪でなく冤罪だよ。で織田は何で捕まったの」

「二人とも同じ強姦未遂だよ」

「まさか、二人が仲良く強姦未遂したっていうの」

「だから本当に冤罪なんだよ。二人でなく十五人でブスの中学生を仲良く強姦未遂だよ」

「織田は強姦したって認めて、江口は否認したんだろ。どうして刑期が大体一緒なんだよ」

「いや。本当に冤罪なんだって」

「ああ、判っているよ。織田が江口と一緒に強姦するわけがないだろう。しかも十五人で」

「だったら織田は認めなくて当然だろ」

「検察が黒って言ったら、この国では白でも黒なんだよ。少年審判は知らないが、普通の裁判では嘘でも認めたほうが遥かに得なんだよ。反省してないと見なされ刑が重くなるのが常識だから。織田がそんなこと知らないわけないと思ったんだよ」

「そんな次元じゃないんだよ……………」

ここから健太の長い説明が始まる。

事件は北殿市に住む被害者の母親が、中学生の娘の十時帰宅に激怒し理由を聞いた。その娘は十数人に強姦未遂をされたと答え、加害者として隣の市で一番有名な江口だけを挙げた。そこから警察は推測で十六名を検挙し、江口と織田以外は供述調書に印を押した。しかし、少年達が本当はやってないと言い出したので、親達は必死にアリバイを探した。地裁判決後、四人には有力なアリバイが見つかる。だが、高裁判決は全員地裁逆送、または少年院送致だった。当然、親たちは新たに無罪になり得るものを必死に探す。そして完

壁なものが見つける。強姦されたとする日に少女は出会い系で知り合った男と一緒にいたのだった。幸いにもその男が裁判で証言してくれ、少女も認めたために全員釈放された。これで終わったかと思われたが奇跡が起こった。検察が事件の起きたのは、その二週間前だと訴因変更請求書を裁判所に出したのであった。強姦された次の日に告発したのに関わらず、それが認められ、また裁判が始まった。しかし、ここでも決定的な無罪の証拠が見つかった。証言者の誰一人雨が降っていたとは証言していない。だが、すぐ近くにある観測所は大雨を計測していたのであった。だが、裁判所は局所的に降らないことはよくあることだとし、懲役四年の実刑を最長とした判決を言い渡した。

この他にも無罪だという要素をいくつも必死に話す。だが、隆は途中から興味はなかった、どう足掻こうと検察や警察には勝てるわけがないからだ。だが健太が興奮して話しているから遮らないでいた。

「なあ、絶対に無罪だろ」

「ああ、そうだな。江口様が出てきたらみんなで宥めてやれよ。

そうしないとあいつなら殺しにいくんじゃないか」

「ああ、そうする」

「本当にそうしろよ。あんな危ない奴はいないんだから」

天才と狂人（後書き）

最後まで読んで頂き、有難うございました。

目的は復讐か（前書き）

全てフィクションです。

目的は復讐か

「百万の方だけど、本当に誰か本当に思いつかないのか」

「冷たいなあ。お前、織田たちの心配しないのか」

「俺の友達で捕まったのは笠原と織田だけなんだろう。笠原は家業を継げばいいわけだし、織田は俺が知る限り断トツで優秀な人間、心配することは何もない。お前のたちのボスなら殺しに行くかもとか思うけど、織田はその点も大丈夫だ。でさっきの答えは」

「本当に思いつかない。数千万円ただでくれる人がいるか、やっぱ悪戯か殺人目的じゃないか」

「殺人だとしたら、呼ばれたメンバーから誰も思いつかないか。わずかな恨みもふくめて」

「僅かな恨みでなら、いっぱい思いつく。ただ分かったメンバー全員の共通点というと、お前みたいに黒高でなければ、帝でない奴も結構いるんだよ」

「それがダミーってことはないか。例えば呼ばれたのが全員帝のメンバーだったらお前いくか」

「行かない、いや、行けないだろう。死んだ人間の名で送ってきただから」

「だろう。殺人なら単純に考えれば、康平の親が本命なんだけど。その線は」

「調べてない。でも、康平の親、俺たちに感謝していたぞ」

「それが嘘ってことないか。バイクで事故って死んだんだぞ。つまり帝に入ってさえいなければ、死ぬことなかった」

「でも、その理屈からいくと、一番殺したいのは江口さんだろう。出所してからするんじゃないか」

「その通りだな。そうだな、殺人目的なら江口を外すわけがないな、それに野辺山も板倉も檻にいるんだろ」

「ああ」

「単純に帝に恨みがあるなら、こいつらが殺したいベスト3だろう。ないことはないけど、康平の親の殺人の線は薄いな」

「悪戯の可能性はどう思う」

「ホテルに電話したら、いいだろう」

「なんて」

「招待客なのですが、噂で中止になったと聞いたんですけど、本当ですか。これなら別に守秘義務に反しないから教えてくれるだろう」

「それはいい考えだな」

「それと仲倉か同等のホテルに同等の部屋を借りるといくら掛かるか調べればいいだろう。常連でもない限り先払いだろうから、それだけの金を出したことになる」

「あつ、そうか。悪戯で百万円単位を捨てる人間なんていないな」

「でも、数千万を只でくれる人間は、もつといないと思うけど」

「そうだな。やっぱ、俺たちをまとめて殺すのが目的かな」

「さあ。送られてきたメンバー分かっているだけでも教えてくれる。考えてみるから」

正直、隆は健太を疑っていた。もしそうなら、費用は自分だけの十万円だけで済む。だが、今回の会話から、絶対に違うなと思った。

次の日、電話が掛かってくる。予定されている部屋は最高クラスでステージも完備しており、食事等を含めれば最低五百万円かかるらしい。

催しがある事自体は間違いないだろう。行ったら本当に貰えるのか。別に百万払わなくても実刑は食らわないし、裁判を起こしても損害賠償が発生する位でせいぜい数万だろう。仮に百万と判決が出たとしても、支払う能力がなければ全く意味がないし。でも悪戯の可能性が一番低いよなあ。

やっぱり、殺人目的か。でも過去に昔の人間関係から、大量に殺そうとした事件はないだろう。

いや、ある。この時、小学生の時の記憶がはつきり蘇る。

自分を苛めた元クラスメート達を同窓会で爆弾を使い大量に殺そうとした事件があったのだ。犯人の父親の通報で身柄を拘束し、事件は未然に防げた。だが、その会が開かれている時間帯に自家製爆弾が爆発し、アパートが火災となった。そのニュースが報道された次の日から、隆の学校で虐めがパタリとなくなった。

まさか、でもこれ一件だけだろう。確かに隆の記憶の中では、これ一件だけだった。昨日教えてもらった会に呼ばれたメンバーを書いた紙を見る。知らない人間も多々いるが、知っている人間から判断すると明らかに苛めている側の人間だった。逆に感謝されそうな人間はほとんどいない。

帝のような暴走族の奴らは仲間意識が強い、つまり身内に親切、その中の一人が仲間感謝では。でもそういう奴がいたら、江口が出所してからやるだろう。それに俺は帝と関係ないし。

でも一日で百万っておいしすぎるよな。約四ヶ月分だ。殺されないなら、絶対に行くべきなんだ。

仮に殺すのが目的なら、どうやるのだから。凶器は毒か、爆弾だろう。食事はホテルが出すだろうから、それ関係からは無理だろう。食事付きなんだから、テーブルや椅子とかはホテルの用意したものだろう。ってことは主催者が用意したと思われるものさえ注意しておけば、逃げられるだろう。出口付近に不審なものがあれば、すぐ帰ればいいわけだし。そう、行って怪しければ、すぐ帰ればいいんだ。行かない手はない。

行くと決めたのだが、子供の日は出勤日だ。スーパ一の流通にとってゴールデンウィークは特別に忙しい。そのためシフトを変え、二度確認を取っている。その期間はアルバイトを大量に雇うので、人手的には休むことは余裕かもしれない。しかし、隆の職場のシステム等を知っている人間は正社員でも少ないので、いまさら休みが取りにくいのだ。

どう理由を付けて、休みを取ろうか。大抵の理由は一週間前に再

確認をされたのだから無理がある。架空の葬式なら言うのは直前になる、そんな時に言われても会社は対応出来ないだろう。ただ、漠然と休みを要求するしかないか。

次の日、隆は職場の時計を見る、午後十一時を指していた。痛つ、腰に激痛が走り、座り込む。今日は人が異常に少なく、明後日の特売のため、異常に飲料の積みおろしが多かったが原因だ。いままじようにと願いながら、隆はある事務室に向かった。ドアを開けると、禿げ始めた四十代と思われる時田が、パソコンのキーを打っていた。

「大変申し訳ないんですが、五月五日に休みを頂きたいのですが」
「悪いけど、絶対に無理。あつ、一応理由を言ってみて」

「ちよつと申し上げ」

ここで隆の背の方の扉が開く。いないことを望んでいた時田の部下の大原だった。

「ちよつと申し上げられない事情なのですが」

「体力が持つか、心配なんだろう。確かに岡本が止めて、君に負担を掛けすぎている。だけどゴールデンウィーク明けには人を入れる予定だから、それまで辛抱して。そうそう、連休前なら休みをあげられるかも」

そう言って、パソコンのキーを押し始めた。

「いえ、五月五日でなければ全く意味がないのです。すみませんが、よろしくお願い致します」

「何言っただ、おまえは。一週間前に確認を取っただろう」

大原が大声で言った。

「はい。そうですが、急用が出来まして。大変申し訳ないので」

「お前は何様のつもりだ。確かに今お前が抜ければ困るが、少しの間だ。二週間もあれば、お前の代わりなどすぐに出来る。ところがお前はどうか。ここを止めてやっていけるのか。人材難といっても、所詮お前は中卒だ。雇ってくれるところないぞ。時給も下がるぞ。ちよつとは考えろ」

「大原さん、言いすぎですよ。中村さん、すいませんが頑張つて

ください。ちょっと前に言ったように正社員の件もありますから」
隆は大原が面倒くさいので、とりあえず了承した。

退室後、心は揺れ動く。数週間前に時田から会社が正社員として雇う可能性があると言われたのを、さっき強く意識したからだ。ただ、先輩の話によるとはじめは時給換算では明らかに下がる。会社の平均年収から考えると、手取りだけでは五年間後位までは派遣の方が遥かにいい。五日に無理やり休んでも、会社は多分首にならないが、正社員の話は流れだろう。どうする。

帰宅後、すぐにネットでアルバイト関連を見る。自分の時給とたいてい変らない数字がずらっと並ぶ。高校退学ということを考えても、何とかなるだろう。要は正社員の可能性をとるか百万に賭けるかな。

でも、何故なんだ。退院してすぐでまだ体がぼろぼろだったのに、こんなきつい仕事に就いたんだ、いくらでも仕事はあっただろ。意識した時点で解決するほど、答えは簡単だった。急いで洗面所の前に行く。だが、ここからなかなか体が動かない。家族のために金を稼ぐ必要があることを強く意識する。そして、恐る恐る一年数ヶ月ぶりにまともに顔を見る。ラッキー、ほぼ直っているな。事故をした時、ノーヘルだった。その時に顔をアスファルトで擦り付けたらしく、顔の右半分があざのように黒くなっていた。特に目の周りは皮膚が薄いために左も黒くなっていた。高校退学で車の免許はなく、顔も見せられない、就職先は極限られていたのだ。鏡でもう一度よく見る。確かに他と比べれば微かに黒いが、言われなければ気付かない程度だ。黒くなってから一年経って右全体は大体落ちたが、目の方は皮膚が薄く血管が微細なためかほとんど変化はなかった。あの事故後、絶望は新たに傷つかなかったための最良の手段だと知った。だから完全に諦めていたのだ。

大丈夫だ、何とかなる。翌日、首になっても五日は休むことを時田に告げた。その夜、隆は一緒に行くよう健太に頼んだ。

数日後、子どもの日がやってきた。この日の出来事が隆の人生を

大きく変える起点となる。

目的は復讐か（後書き）

最後まで読んで頂き、有難うございました。

天国への階段か

隆はホテルの玄関前で立っている健太を見つける。

「ありがとう、待った」

「いや、全然。そんなことよりこのホテル凄いな。コーヒー一杯千二百円だって」

「一応全国区の一流らしいからな。で普通のこの手のホテルって、コーヒーいくらなの」

「さあ、知らないけど」

二人で中に入ると、隆は装飾の豪華さに圧倒される。

「凄いな。絶対に金もっているな」

「ああ、間違いない。問題は金をくれる理由が全く見つからないってことだな」

エレベーターに向かって歩いていると側方から男が声を掛けてきた。

「おっ、タカ、タカだろう。久しぶりだな」

隆には誰だか分からない。

「俺だよ。ケンジだよ、ケンジ」

「ああ」

「お前、みんな心配したんだぞ。急にいなくなるし、連絡も取れないから。もう体は大丈夫なのか」

「ありがとう、御免。もう大丈夫、どこも悪くないよ」

「ならいいけど。今どこに住んでいるの」

「広本市、工場で働いている」

「もったいないな、お前なら一流大学位楽勝だったのに」

「ありがとう」

「まだ話したいけど」

そう言って指をさす。その先には同じ年位に女が立っていた。

「分かった。ありがとう、じゃあ」

「あれ、美紀だろう」

健太が小声で隆に聞く。中学時代に隆が初めて付き合った女だった。

「多分、そんなことより俺たちと同じ年ぐらい位が結構いないか」
動揺し、早口で話題を切り替えた。周りには何故か元不良だけではなく、普通の若者が多数いるのだ。会場に向かう。その間、数人が隆に声を掛けてきた。

「えらい人気だな」

「三年ぶりだからな。でも、全然黒高や帝の奴いないな。それとは逆の奴はよく見かけるけど」

「あいつらガキだから、お祭りが好きなんだよ。だからもうとっくに入っているよ」

受付を済ませ、従業員に導かれて席に着く。幸いにも健太の苗字が中林のため、席は隣同士だ。健太の言う通り、帝の人間は既に沢山来ており、盛り上がっている。

「凄いな。こんなところで何するつもりかな」

「感謝してくれるんだろ。そんなことより、あいつらに声かけないでいいの」

「いや、行く。じゃあ」

健太は帝のメンバーのところに行く。

隆は出入り口を見るが、不審なものは全くない。受付の人間もホテルの人みたいだ。周りも見渡す。豪華絢爛な飾りがたくさんあるのだが、隆にはそれが怪しいとは思えない。次に客を見る。おおざっぱにテーブルが元不良グループと否に分かれて、前者がステージ前の好ポジションを占めているように思える。さらに客を個別に見ようと思った瞬間、江口達也を見つける。刑務所から出てきているのか、いや、それなら帝の奴らが回りにいるはず。和也だ、間違いない和也だ。達也の双子の弟で、隆は高校時代にクラスが一緒だった。また、客席を見始める。何となく見た事があるようなないような感じだが、何者か分からない。しばらくして健太が帰ってくる。

「あっちの方、何かみた事があるような気がする奴が多いんだけど、知っている」

「黒三中の奴らだろ。お前ラーサ中に行ったから、街ですれ違う時しか顔を見る機会がなかったんだろう。ほら、さっき美紀と一緒にだった吉富がそこにいるだろう、黒三小の時一緒だっただろ」

隆と吉富とミキは同じ小学校だった。

「あつ、そうだな。だったら、黒小だった誰かが、この会を開いたってことだよな」

「そうだろう。あつ、さっき聞いたんだけど、あいつらは大平康平の名前で来てないみたいだよ」

「何て名で来たの」

「北野の名で来た」

「何それ」

「黒三中で一番人気のあった教師だよ」

「なら黒三中の誰かで確定だろ」

「皆様、お知らせがございます。座席のことですが、どの席にお座り頂いてもいいことになりました。ただ北野からのご招待のお客様は白のテーブルの席に、大平から招待されたお客さまは水色のテーブルの席にお座りください。もしお守り頂かなければ、大変勝手ながらお客様とみなしませんでしたので、よろしく願います」

「どうする」

「動かない、水色の中ではここが一番出口に近い」

水色がステージ前にあり、白が周りを囲むようになっていて。水色の中では隆たちの座っている席はステージからもっとも遠く端にあるということだ。だから人気もなく定員五人中、隆達二人しか座っていない。

「すみません」

隆は声の主を見てびっくりする、江口弟だったからである。

「覚えてらっしゃいますかですか。江口和也です」

隆は親の顔を忘れても、江口達也の顔を忘れない確信がある。そ

れとほぼ同一のため、忘れようがない。

「勿論です。お元氣ですか」

「はい。失礼かも知れませんが、もうお体の方は大丈夫ですか」

「はい、おかげさまで完治しました」

「よかった。お見舞いに行っても全然意識すら目覚めないの、意識が戻っても後遺症がひどいのではと心配していました。本当によかったです」

「ありがとうございます。お礼も申し上げず、突然消え失礼しました」

「いえ、気になさらないで下さい。それと失礼になるかもしれませんが御報告があるのですが」

「全然気にしないで下さい。何でしょう」

「中村さんが勉強を教えて下さったおかげで、早田大の政経学部合格できました。本当にありがとうございます」

「いえ、とんでもない。江口さんの実力と努力の賜物です。合格おめでとうございます」

「ありがとうございます。多分、こちらに私の友人はいないと思いますので、このテーブルの角に座ってもよろしいでしょうか」

「勿論です。どうぞ」

隆は高校時代抜群の成績だった。そのため、人から聞かれることが多かった。達也が異常者のため、隆は和也とは関わりたくなかった。しかし、同じ遺伝子を持っているのが恐ろしいのと、性格が大人数しく真面目だったため、結局和也に一番勉強を教える結果となった。

隆は隣に座られず、助かったと思った。しばらくして吉富が来た。「ここいいかな」

「勿論いいけど、前の方がいいじゃないの。スターがいっぱい来るって書いてあっただろ」

「でも黒高の奴らばかりだろ、こっちで友達っていったら中村ぐらいし」

「彼女は白なの」

「ああ、そうだよ。どういふことなんだろう。水色にいる人って、昔やんちゃしていた人ばかりだろ。中村はまだバイク乗っていたから、こっちにいる理由があるけど。俺がこっちにいる理由が全く分らない」

「そうだね。な」

「よっ、タカ。お前連絡ぐらいしろよ。みんなどれだけ心配したか」

その声の主は隆と昔バイク仲間で高校も同じ福永だった。自然と隆も軽く微笑む。

「御免、悪かった。……………」

暫くして、ホテルの従業員が食事を運んでくる。隆は自分の生活と全く縁のない美味を味わう。

「今から感謝祭を開催します」

いきなり薄暗くなり、ステージの幕が開いていく。それと同時にイントロが流れ出す。軽く静まり、顔が見え中塚舞だと確認されると大歓声に変わる。隆が高一の頃のヒット曲、チェリーパイを歌う。大歓声の内に二曲が終わり、軽いMCをして、もう二曲。隆は殺されるかという意識がなくなり、他の客と同様大興奮だ。

「最後にもう一曲、リクエストを下さい。何がいいですか」

答えは圧倒的にチェリーパイだ。今度は客席にもっと参加させるようなパフォーマンスで歌い、大盛り上がり終わる。

「すげーな、中塚舞だよ、舞だよ」

「ああ、びっくりだよ、びっくり」

当時、見た目も可愛いらしかったので、隆も好きだった。

次、またイントロが流れる。今度は中学生時代の曲だった。さっきより微かに劣るが、大盛り上がりであるには違いない。次々に歌手が出てくる。勿論、全員がファンということは無いが、その人の大ヒット曲しか歌わないで最高潮が続く。

「前半、最後になりました。皆さん信じられない方が着て下さい

ました。大喜びして頂けると思います」

誰、誰、誰だよ。どこもざわめいている。隆も同様に健太と話している。

幕が開き、顔が見える。中学時代の最大のヒット曲歌手、蔵本麻衣子だった。昔ほどではないが、今でもトップクラスの歌手だ。一瞬、静まりかえり、有り得ない大歓声になる。テレビに一度しか出てないこともそうなる要因のひとつだ。二曲を歌い短いMCをする。そして、蔵本最大のヒット曲day afterを歌う。有り得ない熱狂で終わった。

休憩に入る。隆は健太とトイレに向かう。

「凄かったな」

「おう、すげー」

「馬鹿みたいだったよな、殺されるって心配して」

「ああ」

そう言ったものの、その一言で一気に気持ちが醒める。油断させて殺すのかも、そんな思いが頭をよぎる。でも憎んでいる相手なら、そいつが楽しい時殺したら馬鹿みたいだろう、そうとも思った。

席に帰るとテーブルにはデザートや軽食らしきものが置かれていた。ホテルの人間と思えない衣装をまとったきれいな女性が

「どれになさいますか……」

これは先程の食事時のワインと違い、主催者が用意したものだろうだ。原産地等の説明を健太にし、グラスに注がれる。隆は飲む気がないので適当に選ぶ。健太はそれを何のためらいもなく飲み始めた。

「おい、大丈夫なのか」

健太に耳元で囁く。

「大丈夫だよ」

「びびり過ぎなんだよ、この方法だったら狙っている人物が殺せないだろう。それにこれに毒が入っていてもゆっくり効く毒なんだから、病院に行けば助かるだろそれより、これがキャビアってやつ

じゃないか」

「ああ」

「びびり過ぎ」に軽く動揺する。少年心理のひとつである、「仲間に弱さを見せたくない」を発動し、ワインを飲む。初めて飲む高級ワインはうま過ぎると感じた。ちなみに隆にとつて高校時代の酒は仲間と盛り上がるためのものだった。だが、交通事故後の酒は酔って高揚感に浸るためのものでなく、単なる鎮痛剤に過ぎなかった。

「お飲み頂いたワインで、お気に入りものがございましたら、お土産として好きなものを二本程お持ち帰り下さい。それでは第二部の始まりです」

次のステージはお笑いから始まる。大晦日の前日行われる漫才大会の優勝経験者が二組も出てくる。その後も次々とエンターティナーが途切れない。隆もまわり同様に興奮している。

「いよいよ、最後になりました。それに相応しい方々です。どうぞ」

幕が上がる。白も盛り上がるが、水色はこれ以上有らない盛り上がりを見せ、全員総立ちになる。当然だ、隆の中学高校時代の不良達のカリスマ、ドラゴンラッシュだったからだ。一曲目から水色デビューは全力で盛り上がりだ。それにやや引いたのか、白はやや盛り上がり欠ける、隆も白側だ。最後に最大のヒット曲を歌って締めくくった。

しばらくすると客も少しずつ座り始める。隆が健太に「凄すぎるな」といった瞬間、すべてのライトが完全に消える。一瞬にして興奮が冷め、不安が芽生える。逃げるべきか、そう思った瞬間、ステージにスポットライトが当たる。

そこには、穴のない白地に黒で大きな目を書いてあるマスクを被った人間が立っていた。

天国への階段か（後書き）

有難うございました。

クイズ、これが判れば1千万円

「皆さん、楽しんで頂きましたでしょうか」

白マスクはマイクを使い言った。客はほぼ全員が起立し拍手で応える。最高、最高の声が繰り返される。

「わたしがあなた方から頂いた恩恵からすると微々たるものです。ありがとうございますました」

最大の拍手になる。

「あんた誰だよ」

ひとりが大声で聞く。

「それは絶対に秘密です」

多大な恩恵をもたらしてくれた人間にそれ以上詰め寄る人間はいなかった。

「白色テーブルの方は一番テーブルから順にあそこにお並び下さい。そして、百万円を受け取り、お気に入りのワインがあればお持ち帰り下さい。水色テーブルの方は更にプレゼントがありますので、その場で少々お待ちください」

隆は軽く酔っているが、出入り口、つまり逃げ場があるか確認する。白側の人間が百万円を受け取り出て行くのだから、当然戸は開いている。水色テーブルは主催者を信じきっているので、更なるものを期待し予想し合っている。白側の人間が全員出て行くと

「私が誰だか分かりますか」

お互い話し合い、こそこそ話を始める。

隆はあることを思い出し、白マスクが誰か分かる。体が軽く震え始める。

「どうしたんだよ、分かったのか」

隆はすり足で健太のほうに近づいて行き、耳元で

「ああ、どうする。逃げるか」

「誰か聞いてからだよ」

「絶対に感謝などしてないって」

「だから、誰なんだよ」

「もし、私が誰か分かったら百万円差し上げましょう。一番テーブルの方から氏名を言っていって下さい。チャンスは一度だけ、もし当たれば百万円上乘せです」

「正解を見せてくれる、つまり覆面を取ってくれるんですか」

「正解は言いません。もし知りたければ、皆さんが受け取る金額から推測してください」

「それなら当たっていても、外れて言えば、いいだろう」

「数百万円ごときのはした金で嘘をつくような真似はしません。

最終的にはここに居られる半数以上が二百万円を持って帰られることだと思いますよ。さあ、どうぞ」

誰、誰なんだよ、各所でざわついている。

白マスクの手下である大男が一番テーブルの人間にマイクを渡す。

順々に答えていく。「鈴木健二さん」「真木洋司」、……………。

「早く教えろ、早く、早く」

健太は小声で隆に聞く。

「言ったら殺されるかもしれないだろう」

「そんなことはない、早く早く」

隆はためらう。何故、聞くかと言えば、普通に考えれば誰かにばれてないか確かめるためだ。あいつならここにいる奴を殺したいという感覚は正常だが、感謝はあり得ない。自分が正解を知っていることを白マスクに知られるのは恐怖だ。

「真木、多分真木だ」

「サンキュー」

健太にマイクが渡される。

「真木洋司さん」

隆も同じ答えをする。全員が答える。

「正解者が複数いらっしゃいます」

うおー、大歓声上がり、その後、結果予想の話があらこちら

で始まる。

「静かにして下さい。多少の私語はかまいませんが、場を乱すような場合は百万円で帰って頂きます」

一瞬にして静まりかえる。

「今度の問題は一千万円です」

あり得ないような奇声があがる。だが、さっきの白マスクの言葉を誰もが意識し、一瞬で静まりかえる。

「今回は正解を発表します。言われてみれば納得できる答えであり、それが真実です。今回は考慮時間を三分与えます。まず、くじ引きで回答順を決めます。それがお金を受け取る順番でもあります」
さっきの大男がくじを持って来て、招待客が次々に引く。隆は出来るだけ早い順番を願ひ引くが、十五番だった。健太の番号には全く興味はないが、大げさに見せる。そして目的である横二人にも同様に。吉富が十一番、福永が十六番、緊張がさらに高まる。

隆は確信を持っている。白マスクは滝野慎平だと。

滝野は小五の時、秋田から引越してきた。今さっきのしゃべりから東北の人間だと分かる人間はここにはいない。だが、両親とも秋田出身の隆にはかすかにそれを意識させる。それは正体を見破るのに十分だった。

隆が小六の時、中学時代の同窓生を爆弾で殺そうとした会社員が捕まった。その次の日から強烈な虐めがびたと止まる。その恩恵を受けたのが滝野だった。その時の虐めの中心人物が水色の中で特別違和感のあるふたり、吉富と福永だ。ここに残っている人間は攻撃的性向の強い人間、つまり虐めが好きな人間たちだ。小六の時、滝野と違うクラスだった人間の方が多いが、ほぼ全員が滝野の進学先である黒中、黒高なので、そこで苛めたと推測できる。

全員がステージの前にくじの順番通りに並ぶ。

「答えが何人同じになっても構わないのですが、あなた方には難問中の難問のため、ひとりが正解らしき答えを出すと重ねてくると思います。私としては何人かに一千万円を持って帰って欲しい。そ

のため三人が正解を出したところで終了とする、つまり三回出た答えは間違いだと分かる方式の方がよいと思います。どちらがよいか、全員で話し合って下さい。勿論、今の列を崩して結構です。それと数人で獲得した一千万円を分けるという協定を結んでも構いませんではどうぞ」

全員が集まる。隆は目立たないために、その集団の端に行く。しかし、間もなく福永と吉富というもつとも避けたい人間が来た。その時、隆はここに爆弾を投げ込まれることを連想する。

「どうする、俺は三問の方がいいと思う、隆は」

「俺もそう思う」

「俺も」

隆は爆弾や毒ガスがどこから飛んでこないか、それ以外関心がない。

「三人が別々の答えを言って三等分しよう」

「俺もそれに賛成、タカもそれでいいだろ」

「ああ、いい」

「俺もいれてくれ」

健太がやって来る。

「駄目だ。言っちゃ悪いがおまえ馬鹿だろう」

「うるせえ、俺は隆以外当てにしてないんだよ。おまえらだってそうだろうが」

「まあ、そうだけど。仕方ない四等分にしよう、いいな、タカ」

「ああ」

「皆さん、どちらがいいですか。前者、答えが何人同じでもいい方がよい人は手を挙げてください」

全く上がらない。

「ではこのまま複数で考えてもよいことにします。考慮時間は三分間です。その後、さっきの順に並んで一番から答えて頂きます。では問題です」

白マスクは五秒ぐらい間をおく。隆の心臓は高鳴る。

「この会は私が皆様に受けた恩恵のお礼です。さて、この恩恵とは一体なんでしょう」

クイズ、これが判れば1千万円（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

「あなた方は大変貧しい、何故でしょう」

「この会は、私が皆様から受けた恩恵のお礼です。さて、この恩恵とは一体なんでしょう」

「タカ、分かるか」

「全く、思いつかない。でも、基本的に出来るだけ曖昧で大きく取れる答えにしよう。多分、あいつには三千万なんて大した金ではない。だから、ある程度答えが合っていたら、正解にしてくれるか、もっと詳しくと言ってくれるだろう」

死への恐怖を感じるが、二百五十万円は夢のような話である。自分が滝野と気付いていることがばれない答えなら、絶対に欲しい金だ。

「そうだな、そうしよう。それで答えはどうする」

「友情、勇気、愛、生きるための指針や意味、夢、やさしさ、感謝するってこんなところだろう。これ以外何か思いつくか、ちょっと考えよう」

「遊ぶたのしさってどう」

「いいと思う、他なんかある」

「いや、思いつかない」

「俺も」

「俺も」

「複数で考えさせてくれて、三分も時間をくれるってことは本当に難問なんだと思う。黒高の奴らだから友情、遊ぶ楽しさ、勇気は必ず出てくるし、普通の人なら必ずでる、勇気、愛、優しさも必ず黒高でも出てくるだろう。だから正解は多分生きるための指針か意味だと思う。だから十一番の吉富がそう言う。多分、具体的に聞いてくる、ここからだ。思いつくのは、前向きに生きること、とりあえずチャレンジすること、人を許すこと、勝つことだけを考えること、他人の迷惑を考えないこと、自分だけが大切、こんなところだけ

ど、みんな何か思いつく」

しばらくの沈黙の後、否の三連が来る。隆は持ち逃げされるのを恐れ、出来れば自分自身が一千万円を取りたい。だから自分の本命だと思う「人を許すこと」と言いたい。禅問答みたいでおかしい気もするが、許すイコール自分を苛めた人間に富をやるというような漫画や小説の落ちを期待しているのだ。

「とりあえず吉富は「生きるための指針または意味を得た」と答えて、多分もっと詳しくと言うから、その中で一番意味の広い「前向きに生きることが大切だということ」を教わった」と答えて。俺はそれに対する白マスクの反応を見て答える。ふたりも他の奴の答えと白マスクの反応をよくみて、さっきの例を参考に、出来るだけ広く解釈できるような答えにして」

「ああ、分かった。さすがタカ」

「覚えておけるな。中林」

「ああ」

時間が来て、元の位置に並ぶ。

「まずは一番の方からどうぞ」

「友情の大切さを知った」、これと似たような答えが三連で来る。白マスクが「友情とは全く関係ありません」。「いい女と付き合える方法を知った」「おんなの良さを知った」「いい女の見抜き方を教わった」これまた三連だ。「女も全く関係ありません」。

次からも暴走族らしき答えが並ぶ。世間的には隆も元暴走族なのだが、本人にそんな意識は全くない。なぜ、この中にいるんだ、多分苛めていないのは江口と俺だけ、何故ここにいる。吉富の番が来て、指示通り答える。読み通り白マスクはもっと詳しくと言い、これまた指示通り「前向きに生きることが大切」と答える。ひよっとして、事故で記憶が飛んでいるだけで自分も滝野を無茶苦茶苛めていたのかも、そう思った瞬間に正答らしきものを見つける。

答えるべきか。

金だけ見れば絶対にそうすべきだが、この異常な答えは自分の死

を招くことを意識させる。そのため、この短い時間では冷静に判断など出来ず迷う。

「人を許すことの大切さを学んだ」

最後の人まで答える。つまり、三人正解者がいないのは確定だ。

「残念なことに正解者は全くだいせん。これではこの会を開いた意味が軽くなります。よってもう一問、これは今さっきの問いより遥かに簡単です。正解者は三人までの方がいいですよね」

多くのものが、賛成の意を示す。

「今回の金額は二百万円です。移動はなし、考慮時間はこの場で二分です。ヒントは「今回の正解を聞けば、前回の正解が簡単に分かる」です。さて問題です」

少し間を空ける。隆の緊張はさらに高まる。

「あなた方は大変貧しい、何故でしょう」

「あなた方は大変貧しい、何故でしょう」 (後書き)

読んで頂き有難うございました。

正解は

「さて問題です、あなた方は大変貧しい、何故でしょう」

「俺、年収七百万円あるんだけど、貧しいって方に入るんですか」

「ええ、勿論です」

隆は答えを確信する。さっき答えるか迷ったものと繋がるからだ。これは正解してくれと言わんばかりに思える。つまり、自分の死を恐れる必要はないと思う。隣の福永の靴に靴を当てる。こっちをみるが無視し、もう一度当てる。すこし、間をおきもう一度。福永が悟られぬ程度に首を縦に振った。

隆は祈るような気持ちで、自分のところまで正解者が出ないことを願う。

「馬鹿だから」これが三連続く。「低学歴だから」よし、これも三連、期待通りになる。「努力が足りないから」、ここから答えがばらけてくる。ラッキー、これなら健太もひよっとして。隆の番がくる。健太と隣以外の人間が気付かないように変ったイントネーションで

「ぬすまないから」

白マスクは聞き返さない、多分正解だ、そうでなければ瞬間に正解かどうか分からないため、聞き返してくるに違いない。

次の福永も「盗まないから」、隆程でないが、正常なイントネーションでない。次の人間が「コネがないから」、ラッキー、最もらしい、頼む、三連続してくれ。願い通り、ふたり続けて同じ答えを言う。これならひよっとして健太まで回るかも。イントネーションを変えたのは、他の奴に同じことを言われずに健太まで回すためだった。願いが叶い、健太が答える番が来る。隆に緊張が走る。

「盗まないから」

「正解者が三人出たのでこれで終了です」

ざわつきはじめる。一人が馬鹿でかい声で

「なんだよ、その答え。馬鹿じゃないのか」

その男に向かって白マスクが壇上から何か投げつけた。当たらずに、かなり手前に落ちた。

「帰ってもらえ」

その百万円を白マスク側の男が拾うと、さっきの発言の主に渡し、「退場だ」と告げた。「半数以上が二百万円を持って帰られると思います」を覚えているためであろう、必死に許しを請う。

「その男がルール違反をしたと思われる方、手を挙げてください」全員が手を挙げる。「このまま、ごねれば百万円を受け取る資格もないと思われる方、手を挙げてください」、これまた全員。男は急いで会場外に走って行く。隆はそれを目で追うと、男は何の障害もなく外に出ていった。殺される可能性はないに等しい、そう思った瞬間から、頭の中で異常に大量の快感物質が作られた。

「あなた方がなぜ貧しいか、答えは簡単すぎるほど、簡単。盗まないからです。昔、私はあなた方にいやと言うほど教えて頂きました。盗めば一瞬にして富が得られるということ。昔はさんざん盗んでおいて、今は真面目に働いてたった年収三百万」

ひとりでゲラゲラ笑い出す。

「この会を開いた本当の目的は盗むことのすばらしさを教えてくれたあなた方に対するお礼です」

静まりかえった会場で白マスクの笑い声だけがしばらく続いた。

正解は（後書き）

有難うございました

100万円編の完結1（前書き）

この回で読むのを止められるつもりの方は是非次の一話を飛ばして十部から読んで下さい。小説の山場のひとつで、この事件の真相が書かれています。次の止め時は作品のタイトルの意味が分かる十部です。

100万円編の完結1

「ひとりずつ、壇上にお上がりください」

大量の札束が運ばれてくる。一瞬、声上がるがすぐに静まる。勿論、その側には二人の屈強な男がいた。

「私は犬が大好きなんですよ」、白マスクが一人目に言う。「そうなんですか。どんな犬が好きなんですか」、百万円を渡し、「二人目の方、お上がりください」、

「どうしたらいいんだよ」、一人目が聞く。「この方に百万円受ける資格があると」、一人目はさっと壇上から飛び降り急いで出て行く。

二人目上がる。さっきと同じ「私は犬が大好きなんですよ」と言う。男は土下座し、どうしたらいいのかと聞く。白マスクは百万円をその男の頭に落とし、三人目を呼ぶ。そしてこれまた同じお題だ。これに対し、男は四つんばいになりワンワンと吼える。二百万円が落とされる。四五六と同じパターンなので簡単にクリアする。七人目に「ポチ、とって来い」といい、百万円をステージ下に投げる。男はワンワンと言い続けながら、百万円を取りに行く。八人目が呼ばれる。白マスクの「私の靴汚いなあ」、この発言に対し八人目は四つんばいになり、頭を靴に近づける。白マスクは「かえって汚いだろう」、隆は笑いをこらえる。七人目が帰って来るが、白マスクは無視をする。七人目が「もう百万円くれよ」と言う。その返答は「犬は二本足では歩かない」だった、馬鹿馬鹿しさに思わずクッスとしてしまった。

10人目「馬を英語で」、「ホース」、二百万円を得る。11人目吉富「シマウマを英語で」、「ボーダーホース」、馬鹿丸出し、そう思った。12人目「白熊は」、迷いながら「白熊」、二百万円を得る、13、4と同様の問題が続き二百万円を得る。次も同じような問題を下さい、隆はそう願った。白マスクの前に立つ。

「あなたがこの会に招待された理由は」

隆は今までと全く違う問題に戸惑う。だが、これしか思いつかないし、「私は犬が大好きなんですよ」「馬を英語で」などと同じで、新しいタイプの問題の導入だとすれば整合性がつく。

「この会の趣旨と同じで、あなたに盗むことがおいしいと教えた人々の中のひとりだから」

隆は三百万渡された。

「どうということ」

「そういうこと、今のは間違い、さっきの正解で二百万円プラスで三百万円です」

納得がいけないが、三百万円という夢の大金を手にとると、これを守ることだけに意識が集中する。出口付近には土産のワインが置いてあり、当然白マスク側の人間が立っている。三百万円貰えることは全く想定してなかったため、ポケットや財布に入り切らない。そのため金を入れるための袋が欲しいので、ワインを二本貰った。

会場を出ると思った通り吉富がいた。緊張したのでトイレに行きたいと嘘をつき、さっさとホテルから出る。山分けすべきだと言いつくすのを恐れたのだ。それともっと大きな理由がある。自分たちが他の人間より金を持っていることをみんな知っている。その三人が集まって揉めるということは、早速白マスクの教えを実践する絶好の機会を作ることになるからだ。

玄関を出るとタクシーがいたので、すかさず乗る。すぐに車内は一人でないことに気が付き、運転手を馬鹿みたいに警戒し続けた。到着しアパートに入ると、百万を三箇所隠した。シャワーを浴びて、ベットに入ると徐々に警戒が解けていった。そして眠りにつくまで、死の恐怖からの開放と夢の三百万円、この二つがもたらした人生最高の高揚感に包まれていた。

100万円編の完結1（後書き）

有難うございました。

休息（前書き）

タイトルと似て平凡な回です。今回で読むのを止めようと思われる方は、次回が百万の話の真相なので、出来ればそこまでお読み下さい。

休息

朝、目覚めると会社に行くべきかと迷う。勤務中に泥棒が入ったら、そんなないに等しい可能性を恐れているのだ。結局、会社に行くことを選ぶ。持ち場に行くと大原が待っていた。

「お前のせいでせつかくの家族旅行が台無しだ。くそ、馬鹿が」
隆の頭の中には三百万円しかないので、返答がいい加減になり、文句が長々と続いた。落ち着かない心理状態で仕事をし、やがて飯休憩になる。立場上は社内にいなければ不味いのだが、原付で家に帰った。制服のまま銀行に行き、三百万円を預ける。すかさず百万円を実家に振り込もうと思いATMに並ぶが、あることに気が付く。もしものために百万円を貯金し、それ以上の金全部を実家に振り込んでいるのだが、最高で十万後半しか振り込んだことがない。百万円どころか三十万円振り込んだだけでも心配するだろうと思った。迷った末に二十万円を振り込んだ。急いで会社に戻ると、また大原が待っていた。

午後からもゴールデンウィークため異常に忙しいから、何も考える余裕もなかった。だが、帰宅中は自然と昨日のことを思い出していた。中塚舞に異常に興奮していたこと、今まで食べたことのない美味の数々、死の恐怖から開放された快感、そして三百万円。帰宅してシャワーを浴び浴室を出ると、二本のワインを思い出す。昨日の強烈な快感を思いだし、それを手に取る。今すぐ飲む気になっていたが、毒が入っているかという発想が浮かぶ。それがよい結論を導く。ゴールデンウィークで後二日はきついが、それが終われば三連休である。その時、ゆっくりと楽しめばいいのである。ワインの保存という概念を思い出し、ネットで調べる。当然、値段も気になります。二十万円、とっさにパソコンの隣に置いてあるワインを見た。

翌朝、出勤し持ち場に行くとまた大原がいた。昨日、配送先を問

違えるという大きいミスがあったのだが、隆の持ち場とは関係ない。それを知っている立場に関わらず、その逆のような前提で文句を垂れる。最後に「だから中卒は」と言った。隆は全く気にしていない、元から学歴の順位制という概念を持っていないし、今現在その他の意味でもプライドの欠片もないからだ。それより仕事量の方が気になる。スケジュールの紙を見ると、十二時を過ぎるかもと思われる。深いため息をついた。

二日後、目覚めると二十一時だった。途中で何度か起きたが、合計十六時間寝ていたことになる。まあ、仕方ないか、実質十連チャンだもんな。

携帯が震える。当然、あいつだと思った。

「もしもし、何」

「何で三日もあって一回も出ないんだよ」

「ずっと働いていた」

「嘘付け」

「ほんと、十五時間連続三日、流通センターだから今とお盆と正月は特別忙しいんだよ」

「よく働けるな。あんなおいしい思いをした後に」

「そうだな。自分でも凄いなあと思う」

「他にいい仕事あるだろ。それに大学受ければ、お前なら一年あれば国立でも楽勝だろう」

「事故のせいの借金があるし、多分大学出ても新卒でなきゃ意味がない。そんなことより吉富と揉めた」

「ああ、少しは金よこせって言うから、隙をみつけて速攻で逃げてきた。あっ、だからお前先に帰ったのか」

「そうだよ。俺のお陰で正解出来たんだろ。少しはやれよ」

「お前にとって吉富は友達でも、俺はただの知り合いなんだから関係ないよ」

「吉富と福永は揉めてたの」

「ああ、俺が出口に出た時から大揉めだったよ」

やっぱり正解だったな。

「で何の用」

「白マスク誰か分かったか」

「いや、真木だと思っていたけど、違うみたいだし」

「だろ。分かったんだよ。俺の友達にクイズに正解して四百万、外して二百万もらった奴がいたんだよ」

「だったら、そいつで決まりだな。で誰って言ったの、そいつら」
「大下浩二、黒小、黒中、港東、帝のぼしり、来た奴全員に関係あるだろ」

「おっ、そうだな。間違いないな。ありがとう」

「ただ、港東から呼ばれた奴が少なすぎると思うけど」

「進学校だから真面目な奴が多いし、ほとんど大学に行っているから、少ない可能性に賭けて帰ってこないよ」

隆は自分の方が正しいという確信があった。白マスク自身が示したように、まず間違いなくあの財産は盗むことによって築いたものだ。誰かの口から警察に情報が届けば、捜査対象になる。海外での犯罪等の簡単に立件できない犯罪で得たものだろうが、犯罪である以上税金を納めていないと思われる。これらの理由から、わざわざ自分の正体をばらすという選択肢はない。ただ、そのことを健太に教えるつもりは全くなかった。そうして広まって滝野の耳に入ると、誰が発信源かとなる可能性がある。完全に滝野は頭の中も別世界に行った人間と思うので、間違っても攻撃対象になりたくはない。それに只で三百万円もくれた恩人の意に背こうとは思わない。

「それでさあ」

「悪いけど、また今度にしてくれる。まだ、体がだるくて眠たいんだよ。基本的には明日から十時以降なら電話に出られるから」

「ああ、じゃあ」

その寂しげな返答にすぐに反応する。

「基本的には水曜が休みだから、その時でもいいよ」

「分かった。ありがとう、じゃあ」

隆は水を一杯飲んだ後、また眠りについた。

チーズを一口食べてみる。旨い、過去によく食べたチーズとは別物だ。次は生ハム、これまた旨い。朝、夜飲むつもりのワインのつまみとして奮発して買ってきたものだ。下の妹が大学を卒業するのは八年後、つまりその間は奇跡が起きなければ、贅沢できない日々が続く。ただ、それが過ぎても二十万円のワインを飲むことなどあり得るとは思えなかった。

その後、いつも通り静かな時間を過ごそうと思うが、朝から高くなったテンションと合わない。

今日だけは特別、一日中贅沢しよう。そう思い出かけることにした。シャワーを浴びて服を着替える。財布の中を見ると三千円しかなかった。一万円足すか二万円足すか迷うが、今日だけは特別ということで思い切って三万円入れた。

電車に揺られ大きな駅ビルにつく。軽く衣服をウインドショッピングする。自分の生活とは無縁の値段の服が大半を占めているが、それでも楽しかった。昼が来て、食堂街に行く。三年ぶりなので、いろいろ見て回るだけでも楽しい。どれにしようか迷うが、今回だけの贅沢なので挑戦する気にはなれない。結局、カレー屋にした。店に入りメニューを見る。今日だけが特別という意味も込め、この店で値段の一番高い高級ビーフカレーにした。この三年間の食欲を満たすだけの食事ではなく、一口一口が喜びを与えてくれた。満足して店を出る。贅沢をしようという漠然とした目的で来たため、これといっていく場所がない。その時、高校時代DVDで見た映画のシリーズものの映画を宣伝を思い出す。二千五百円のカレーを食べた後なので、贅沢にしては安いと思ったが、今一番したいことなのは事実だ。隆は映画館で映画を見るのは四年ぶりだった。すべて彼女とだったため、アクション映画を見たことはなかった。大画面で見

るスパイ作戦4は異常な興奮をもたらした。その後、ぶらぶら歩くとちよつと喉が渴く。いつもならスーパーで買うのだが、そんな発想はない。贅沢に見合う店を探す。複数の店舗の中に有名なコーヒーショップを見つける。初体験を試みたいが、手前にあったケーキショップがその気をなくさせる。隆の最も好きな菓子レアチーズケーキが四百円である。値段は気にならないが、一人で店に入ることに抵抗を感じる。だが、店内に男性ひとり客を見つけると迷わず入った。ケーキ自体数百円するものなので三年以上食べてない。そのため、おそらくその辺のスーパーのケーキで十分満たされるはずだ。そんな男が五百円のを食べれば、結果は当然。エレベーターで数回降りるとドラゴンファンタジー9の発売を宣伝している。隆はこれだと思う、近所でハードと安い中古ソフトを買うつもりになったのだ。帰りに晩飯を買って帰ろうかと思ったが、近くに人気のすし屋があることを思い出した。

特上の寿司とチーズと生ハム、組み合わせはおかしいが最高だった。それにあのワインがあるのだ。眠りにつくまで、少しだけあの会の時のような感覚にいた。

休息（後書き）

ありがとうございました。

100万円編の完結2（前書き）

この回で出てくる事件から、類似した実際にあった事件を連想される方がおられると思いますが、一切関係ありません。完全な作り事です。

100万円編の完結2

次の朝、電話の音で目覚める。そう不快ではないが、朝からはないだろうと思う。

「何」

「あの白マスク、盗んであの財産を築いたって言っていただろ。本当にそんなこと可能なのかよ。俺たちで話し合ったんだけど、不可能だろうって結論になったんだけど。それに正体がばれているんだから、あんな事言ったら不味いだろう」

「お前が誰にも言わないっていうなら、答えるけど。どうする」

「何で言ったら不味いんだよ」

「あそこにいた大方は真面目に働いているんだろ」

「真面目かどうか知らないけど、ほとんどがアルバイトも含めて働いているよ」

「だったら犯罪を奨励するのは不味いだろ。少数はどっちみちするかもしれないが」

「やっぱり盗むっておいしいのか」

「絶対に言わないか」

「ああ、約束する。お前との約束は一度も破ったことないだろ」

「ああ、分かった。簡単に言うとお前らの盗むのイメージが狭いんだよ。始めにあの時の説明をしておく。白マスクが何故俺たちが貧しいかって聞いただろ。正解は正確には違法行為をしないからなんだけど、俺がこう言うとお前のところまで回らないと思って「盗まないから」って答えたんだよ。それともう一つ、白マスクが正解を言う時、「違法行為をしないから貧しい」というより「盗まないから貧しい」って言った方がカッコいいだろ、だから白マスクもこう答えると思った。はっきり言うとお前ら犯罪集団だった、だが盗みというとせいぜい万引きぐらい。それが巨大な富に結びとくかと言えばつかない。だから、「違法行為をしないから」でなく「盗ま

ないから」と答えたんだよ。ここまでは納得か」

「ああ」

「簡単に言うとは社会というのは交換だろ、現代では金と物、金と労働が主かな。片方が出した条件を片方が受けるというのが社会の基本なんだけど、これを無視することが白マスクの盗むの定義なんだろう。奴は小さい頃、真面目でそれを破れなかった、いや、破るという発想がなかった。だが、多くのやつらはそれを破り富を得ていく。とくに帝のメンバーは守るという発想さえないようにみえ、それによって莫大な利益を一瞬で手に入れる。「盗むって行為はおいしすぎる」、簡単に莫大な利益を得られる方法を教えてくれた帝のメンバーに感謝っていうのが、あの会の趣旨なんだよ」

「莫大な利益って、何。俺たちそんなもの手に入れてないけど」

「利益イコール金だと思うから実感がないんだよ。それと万引きする中学生にとって商品一万円分など大したことないが、しない子にとっては凄すぎる額だという認識がないからだよ。ここまでは受け入れられる」

「ああ。でも、莫大ってほどではないだろ」

「いじめやけんかやリンチ、それを問われた時、訳の分からない言い訳をするけど、それをやる奴の本当の理由は楽しいからだろ。子供だからばれても何の責任も取られないけど、大人なら一回につき数万数十万の慰謝料が取られる。そんなことを毎日気軽にやっていただろ。公道を集団で独占すること、それが数十分なら被害金額に直せば数百数千円になる。要はさっきの盗むの定義を使えば、帝のメンバーなら、その行為によって億単位の利得を得た奴が普通にいるんだよ」

「ああ、分かった。ありがとう」

「大下だったけ、あいつは白テーブルの奴らに子供の頃に苛められた。人間の大多数は状況によって盗むってことに抵抗がないということを教えてくれた。そのことに関する感謝が百万円。水色は盗むってことが簡単に莫大な利益を生むってことを教えてくれた。だ

から百万プラスなんぼかってこと」

「だったら、俺たちの貰える分は少くないか」

「それは知らない。ただ、頭に乗らない方がいい。あいつは多分数十億は持っている。今はそれが俺たちのおかげだと本当に感謝してる可能性があるのは事実だろうが、いつ反転するか分からない。人間は自分が強者だと判断したとき、強烈な攻撃的性向が表に出てくる。今の白マスクならそう判断して当然だろう。あいつの人生の人間関係のほとんどが苛めたお前ら、復讐、消したい辛い過去、それらの要素から、攻撃欲求がお前らに向かうのは自然なことだと思うよ。過去に強烈に苛めているなら、お前らは殺されてもおかしくない。殺人なんて一捻りすれば、捕まらないのだから、たった三年で数十億稼ぐ天才なら完全犯罪なんて簡単だと思うよ」

「なんでだよ。殺人犯の検挙率95%もあるんだぞ」

「それは犯人の大半が近くに住むちよつと頭のおかしい奴か近親者で計画性がないからだろ。白マスクは警察に捜査されても逮捕されない確信があるから、会を開いたんだろ。三年誰も顔を見てないうえ、整形していたら見つけようがないだろう」

「でも95%もあるんだぞ、その手の犯人はその中にもたくさん含まれているだろ」

「ほとんどいないと思うよ。それに95%は警察が殺人だと認定したうちのだろ。殺人者は死体が隠せるなら隠しにいく。捜索願が出て一年以上見つからないのが一万人以上、捜索願が出てないのが推定で同数とされているから、毎年二万人以上いる。毎年数百人位殺されて海の底か土の中にいると考える方が普通だと思うけど」

「でも」

「お前は警察が正義感で殺人犯を見つけて逮捕しようと思っているみたいだけど、その前提が間違っていると思うよ。大阪で力士が傷害致死で死んだだろ。あの遺体写真見たことある」

「いや」

「あれを見て傷害致死だと思わないのは不可能って感じだよ。は

じめの検死の結果、ショック死で事件性はないことになっていた。島根で自衛隊員が事故で内臓破裂してから3km歩き、つり橋から超人ジャンプをしたのは有名だから知っているだろ」

「ああ、でもあれは特別酷い例だろ」

「問題は程度ではなく、警察の基本姿勢だよ。山形で我が子とその友達を殺した母親がいただろ。一人目の子供が殺された時、早々に事故死と判断したのは知っている」

「ああ、知っているよ」

「そういうこと、こういう例は俺の記憶の中に多々ある。信じられないならネットで調べてみて。多分、事件性がなかったことになるから、ソースは消されていると思うけど、世の中警察嫌いや正義感が強い人がたくさんいるし、有名どころは残っているだろうから結構見つかると思うよ。俺の結論を言うと、警察は殺人事件が起きれば真面目に捜査するんだろうが、事件自体は起きてないことにしたいんだよ。年間の変死体が十五万體、その内検死官が調べるのが10%で解剖するのが5%、ちなみに毒薬などによる死は解剖しないと専門家でも分からない。……。……。その内の数百人は殺されたと思うけど」

この統計数値は警察の公表とほぼ同じだ。

「分かったけど、なんでそんなに詳しいんだよ」

「いい質問。高校の頃、裁判で茅ヶ崎国立大学教授の複数の検死結果が問題となって、テレビで大きく取り上げたんだよ。証拠として提出した検体が全くの別人のものであったり、解剖したはずなのにその傷後がなかったりして。神奈川の検死の半数以上をこの教授ひとりがやっていて、時間的に不可能とされる数の確か三倍以上検死している。つまり、今は知らないが当時は検死をしてなかったし、警察もそれを知っていた、というより知っていて利用したってことだろう。お前が思っているように警察が正義感で殺人犯を逮捕しないなら、長年こんな状態を放置しておくわけないだろ」

「本当に、ここ神奈川が」

「ネットで調べてみて。多分、残っていると思うよ。真面目に考えるなら、日本の大事件のひとつなんだから。もう、面倒くさくなつたから、俺の結論をいうよ」

「ああ」

「白マスクに殺す動機は十分あるんだし、頭も精神も違う世界に行っているんだから、殺人という行為を行う可能性はくはない。殺して死体を隠してもまずばれないし、多分高知能なんだから事故死や自殺に見せかけ捜査対象にならないのも簡単だろう。江口の手下ということで警察は他殺と判断しないだろうし、したとしても捜査はいい加減だろう。白マスクの顔は誰も知らないし、日本にいる時は住所不定で別名で生きているだろうから、逮捕される可能性はないに等しいだろう。以上終わり」

「そうだな。俺大丈夫かな」

「お前自身、人を率先して苛めた」

滝野が白マスクだと思うので、大下と限定して聞かない。

「大下はほとんど苛めてないと思うけど」

「いや、人間性を聞いているんだよ。本人がたいしたことないと思っても、相手がどう受け取るかわからないだろ。お前らの中で何番目ぐらいに苛めが好きなの」

「たまにからかう位で、むしろ止めていたほうだと思うけど」

「だったら集まりに行かなきゃ、大丈夫だろ。絶対に一番殺したのは大下を率先して苛めた奴か、江口達也なんだから。殺す対象を下位の方から一人ずつ殺したら、頂上には絶対に辿り着けないだろ」

隆にはこの理屈で滝野に殺されない確信があった。関係があったのは小五と六、苛めが始まったのは六年の時、滝野はクラス中から苛められていたが、隆は訳があつて関係してない。つまり殺されるとしても、百数十番目の標的だからだ。

「ああ、そうだな。でも、ひょっとして警察に通報したほうが」
この時、あることに気付き衝撃が隆に走る。それは隆にとって大

問題で、法律を知っている人間ならいずれ気付くことだった。

100万円編の完結2（後書き）

この回で出てくる事件から、類似した実際にあった事件を連想される方がおられると思いますが、一切関係ありません。尚、本文から横浜国大を連想され検索されても、医学部はないため何も出てきません。

有難うございました。

善意の第三者方式詐欺（前書き）

今回、読んで不快になられる方がおられると思いますが、たかがど素人の小説ということでご容赦下さい。私自身何の思想信条もなく、問題の箇所はただ単に盛り上げるために書いたので、苦情がたくさんくれば書き直します。すべて完全なフィクションです。

善意の第三者方式詐欺

理屈っぽいのが嫌いな方は二話飛ばして「日本は大人の国」、また一話飛ばして「21世紀も少年」の途中からお読み下さい。その後は普通の小説です。

「どうしたんだよ」

「白マスクは盗むことで財産を築いたって言ってただろ」

「そうだけど、それがどうかしたのか」

「犯罪で得た財産だと知っていて、それを貰った場合、それは基本的に公に回収されるんだよ。こういう場合は初のケースで最終的には裁判所が判断するんだろうけど、多分没収されると思う。社会的に俺たちのものと処理することは、意味がないし正義に反するから」

「でも、大下が捕まらなければ、大丈夫なんだろ。それに使い切ってしまうば、返さなくても大丈夫じゃないのか」

「ああ、大下の犯罪が証明されなければ、あの夜のことが明るみになっても没収されない。使い切ったの方は多分駄目だと思うけど」

「大下は捕まると思うか」

「八割以上の率で捕まらないと思うけど。それとはじめは詐欺の様な犯罪で稼いだと思うけど、そこからは株価操作やインサイダーなどで稼いだ金だと思う。株のような犯罪は立証しにくいし、つい最近まで法律が甘かったので億単位で正当な貯蓄があると思う。もし、そうなら返す必要はないだろう」

「どういうこと」

「詐欺で五億、株犯罪で二十億儲けたとする。詐欺は完全にアウトで没収だが、株の犯罪は儲け全部が不当な利得と見なされないし、異常に証明しにくい。二十億の利益の内、十億が犯罪によるものだ

と判断されても、十億は奴の正当な資産。まず、回収されるのはまず犯罪者が持っている財産だから、不当利得以上の金を持っていれば、そのうちいくらか俺らにくれたということになり没収対象にならないだろう」

「なら、大丈夫って事」

隆は少し考えた。

「多分、大丈夫だと思う。元金は詐欺系で稼いだと思うけど、大人数の前でそれが言えるということは、善意の第三者方式系で稼いだものだと思うから」

「これまた全く分からない。説明しろよ」

「前、ライブゲートの粉飾決算ってあっただろう。社長が粉飾している」とされる決算期発表後に売りぬけ、検察が入って株が暴落したやつ」

「あのデブ髭だろ」

「ああ、そう。善意と言うのは法律では知らないってことなんだ。だから一部で言われているように、嘘の決算報告書を作ったのが専務で社長が不正を知らないなら、社長は善意の第三者で、株の売却益数百億は社長のものなんだ。損害賠償を請求されるだろうが、それは取締役としての損害賠償。社長が粉飾を知っていたなら、利益は基本的には無効で詐欺に当たるだろう。社長が役員でもなく粉飾も知らなければ、完全な善意の第三者。善意の第三者の意味分かったか」

「分かった」

「社長と専務がふたりグルになる。専務が単独で自分担当の部署で粉飾を行い、好決算に見せかける。株価が上がったところで売り抜け数十億を手に入れる。専務は粉飾がばれてもあの程度なら、過去の判例から必ず執行猶予が付く。その後、富を分配すればいい。こうすれば安全に不当な利得が得られる。他人に犯罪者になってもいい、善良な第三者として不当な利得を得る。これが善意の第三者式詐欺」

「でも善意のなんとかと言っても、そんなので儲けられる方法って稀なんじゃないの」

「いや、日本中これだらけなんだけど。自分が四十歳位で他人がある程度信用してくれるなら、いくらでも思いつくと思うよ」

「日本中なのか。例えば」

「いつか、大友や檜などのスーパーゼネコンが談合決別宣言ってしただろう」

「スーパーゼネコンってなんだよ」

「日本の建設会社トップ4か5のこと。宣言したのは知っているわけないな」

「ああ、知らない」

「したんだよ。談合はいつからあったと思う」

「俺が生まれる数十年前からあったに決まっているだろ。誰でも知っているよ。そんなこと」

「それを事実としよう。そうなら、談合の不当利得は誰が受けていたと思う」

「社員や社長や株主だろ」

「そう、少数の人間に犯罪をしてもらい、第三者としてその利益を受け取る。これが第三者方式。お前の言う国民全員、つまり、株主、取締役、社員、全部知っていたとする。もし、そうなら本当は善意の第三者ではない」

「でも、実際やった奴以外は犯罪じゃないんだろ」

「知っていたなら株主と取締役は犯罪だと専門家は言うと思うけど。契約は担当者でなく公と会社の間で結ぶものなのだから。社員は無罪という人がほとんどだと思うが」

「分かった。ありがとう。でも、日本中これだらけというのは大袈裟だろ」

「いや、東北で教師の不正採用って事件があっただろ。あっ駄目だ。田舎はコネがないと公務員になれないって話、本当だと思うか」

「本当だろ。教師のやつも三十年前からやっていて、みんな知っ

ていたって話だし」

「親自身はコネでいれたと子供に言わない人間の方が多いと思うが、田舎はコネがないと公務員になれないって話は誰でも知っているし、本人はテストで実力かコネかは知っているだろう。公務員でないのに公務員を装って給料を受け取る。仮に問題になったら、善意の第三者のふりをするとだろう。典型的な善意の第三者方式だと思うけど」

「なんで公務員じゃないんだよ」

「採用試験そのものが無効だからだよ。有効という人間も結構いると思うけど。ただ、受け取った給料自体が無効かどうかは有効という人の方が多いと思うが。あつ、俺、さっきの質問に答えてないな。質問は、「日本中これだらけというのは言い過ぎだろ」だよな」

「あつ、そうそう」

「言い過ぎではないだろう。日本は実質犯罪が容認されている、若しくはされていた。談合、価格カルテル、不正請求、偽装、裏金など。カルテルが結べる業界はほとんど結んでいたし、小学生の頃に見つかった県庁の裏金も一県を除いてすべてあった。他も似たようなもの。なつ、言い過ぎでないだろ」

「何で容認されていたと言い切れるんだよ」

「今は逮捕されるみたいだが、昔は確か価格カルテルでは中心人物ですら逮捕されなかった。罰金も微々たるもので、しない手はないような金額だったんだよ。談合もそう。公金系の犯罪でも組織ぐるみなら、逮捕されない方が圧倒的に多いし、逮捕されても刑罰も軽い。行政を監視するはずの国会議員も問題にしないし、国民も無反応、容認されていると言い切れると思うけど」

「ひょっとして、日本って犯罪だらけなのかよ」

「真面目に聞いているの」

「当たり前だろう」

「犯罪だらけというより、法治国家でないんだよ」

善意の第三者方式詐欺（後書き）

今回、読んで不快になられる方がおられると思いますが、たかが小説ということでご容赦下さい。私自身何の思想信条もなく、問題の箇所はただ単に盛り上げるためだけに書いたので、苦情がたくさんくれば書き直します。

すべて完全なフィクションです。

読んで頂き、ありがとうございました。

中国は法治国家？（前書き）

今回、読んで不快になられる方がおられると思いますが、たかがど素人の小説ということでご容赦下さい。私自身何の思想信条もなく、問題の箇所はただ単に盛り上げるためと伏線として書いたもので苦情がたくさんくれば書き直します。すべて完全なフィクションです。

中国は法治国家？

理屈ばいのが嫌いな方は一話飛ばして「日本は大人の国」、また一話飛ばして「21世紀も少年」の途中からお読み下さい。その後は普通の小説です。

「犯罪だらけというより、法治国家でないんだよ。国というより、村がたくさんあって、その村長さんクラスがまた村、そのまた村、そう解釈したら分かるだろ」

「全然。そんな説明なら、誰一人分かるわけがない」

「談合関連でいえば、建設会社という村、その村長さんや役所の人間が集まって村、これを繰り返して頂上の村がふたつ、立法や予算をつける国会議員村と犯罪者を捕まえ裁く司法村。裏金関係で……。日本人のほとんどが誠実な村人として生きている。村を潤すためには、よそから取ってくればいい。だから日本は犯罪だらけなんだよ。日本人のほとんどが日本全体を意識する時も、法治国家の一員でなく、日本村の一員としてだから、法治国家でないんだよ」

「法治国家の一員と日本村の一員、どう違うんだよ」

「数年前、国防省で三十年続いた談合が発覚したんだよ。談合総額が数年で二千億以上、国の推定被害額は数百億、起訴されたのは国防省の三人で全員求刑が二年。国防省主導だからという理由で、他の入札関係者は略式起訴で五十万位の罰金で終わり。担当者は全体に奉仕する代償を貰っておきながら、数百億の損害を国に与えたのに求刑は三人とも二年。現担当者が執行猶予付きの一年六ヶ月、他の人間は事故った後だから知らないが、求刑が同じだから同じ刑罰だろう。判決は検察の求刑の7, 8掛けがほとんどで、求刑二年というのは執行猶予を付けてやれというサインと言っているだけ。これを聞いてどう思う」

確かに競争入札妨害の最高刑は二年だ。しかし、隆は詐欺でもい

けると思っているし、背任でもいけると思っている。それにこの手の犯罪は報告などにより、必ず公文書偽造などの犯罪を他のところである必要がある。そのため、二年というのは検察の意思だという前提で話している。

「これは数百億の詐欺と一緒にだろ。何で求刑が二年で、しかも執行猶予が付くんだよ」

健太は軽く興奮しながら、言った。

「それを公の場で言える」

「いや、言えないと思う」

今度はためらいながら答えた。

「そうだろ。それはおまえが法治国家の一員でなく、日本村の一員として身分を弁えているから。こんな事が起これば普通の法治国家なら、もし日本国民の数%が法治国家の一員なら、こうなる。何故、数十億という信じられない被害額を与えた人間に執行猶予が付くんだ。そんな刑罰ならみんな犯罪に走って国が崩壊する。執行猶予を求めた検察官も付けた裁判官も背任だ。そんなふうで大揉めになる。だが、日本は法治国家でなく村社会だからこうなる。彼らはその中では身分が低いとはいえ、日本の村々の頂点の住人。村の住人、キャリア、公務員、東都大卒などの仲間意識で軽い刑罰となる」

「でも、数百億の損害を与えたんだ。それなら……………」

「だから言ってるんだろ。日本人は法でなく、村人の原則で動いているって。村が揉めたら丸く治めるのが最善、仲間か否かが重要、自分の直接の利得のためにやった行為でなければ寛容。日本人はこんな感じで、逆にこれに反する人間がいたら、寄って集って排除するだろ。こういう特性が強いから、村々の頂点の住人は形式だけで実質誰も問題にしない。まあ、この手の行為の恩恵を第三者として受けているのも理由にあるけど。他の国民の大多数は、身分を弁えている、自分の属する村と直接関係ない、自分の村も同様の利益を受けているからスルー、などの理由で問題にしない」

「この事件だけが特別じゃないのか」

「いや、なんならネットで調べてみて。公務員や公金の犯罪に対しては激甘だから。調べたことないから、どの位ネットに出てるか知らないけど。もし、出てなかったら新聞やテレビを毎日見てたら分かるよ。多分、刑法をちょっと知っていて意識してみれば驚くと思うが。これでも昔と比べれば激辛だよ」

「分かった。有難う」

「なんか声が暗いけど、どうでもいいことだ、気にするな。別にいいとか悪いとかいう問題じゃあない。この日本特有さが日本国そのもの。それだけのことだよ」

「日本特有、ひょっとして日本だけ法治国家じゃないのか」

「多分、外国に行ったことないから知らないけど。理屈を聞けば納得すると思うけど、どうする」

「聞く」

「自分自身が盗む、盗まない。他人の盗みを許容する、許さない。この組み合わせで大きく4種類の人間に分けられる。外人は盗む人間が多いけど、他人の盗みを許さないという人間が多いから、個人の犯罪は多いが法治国家になる。理由はどうあれ日本人の場合、自分自身は直接盗まないが、他人の盗みを許容する。そういう人間が多いので、個人の犯罪は少ないが法治国家にならない。法治国家とは他人の盗みを認めないってことだから」

「でも、独裁国家や中国なんて法治国家じゃないだろ」

「一見そう思えるが、理屈を詰めていけば、結構多くの人が独裁国家も法治国家だと判断すると思うよ」

「何でだよ」

「非民主国家イコール法治国家でない、または独裁者が自分の都合のいい様に法律を作るからそうでないと定義するなら、お前のいう通り。ただ普通は、法治国家か否かという読んで字の如く、国を統治する基本が法律か人かとなる。独裁者は、自分達は盗むが他の人たちは盗ませない、要は自分達以外には法を適用する。そうしないと国家が成立が危うくなるから当然のこと。たいていの場合優

遇層をつくるが、デモは違法などとして合法的につくるから、法治ではない。つまり、法の適用除外はあるとしても基本的には独裁者だけだ。ただ独裁者の盗みもほとんどの場合が民衆にばれないようにするから、決して社会全体として盗みを許しているわけでないと考えらるなら、適用除外とは言えない。盗んでいることがばれて、政権がひっくり返った国は多々ある。この場合、独裁者も適用除外でなかったと判断するのが適切だろう。だからほとんどの国は法の適用除外はあるとしても、基本的には独裁者だけだから法治国家と言えるだろう」

「何か、全体的に納得できない」

「法の反対は何か分かる」

「無法だろ」

「まあ、そう。法といえば、大多数は秩序を、その逆の無法は無法地帯のような使われ方から分かるように無秩序をイメージする。日本は多分世界有数の秩序だった国で、個人の犯罪は異常に少ない。だから法治国家の感じがする。それと非法治国家は非近代国家の感じがする。だから大多数の日本人は日本を法治国家だと思いたい。中国は役人の腐敗が異常ってことになっている、中国人は我が強いので犯罪も多い、無秩序という言葉がぴったりとくる。だから法治国家だと言われても納得できない。この説明でどう」

「ああ、そんな感じ」

「だから「日本って犯罪だらけなのかよ」という間抜けな質問をする。田舎のコネ採用はどの位だと思う」

「殆どそうだろう。黒崎市でもよく聞く話だし」

「そういうこと。これは日本の法律上、犯罪以外の何ものでもない。価格カルテル、裏金、談合、偽装、日本はそれだらけだと言いたいのは人は言う。つまり、たいていの人の中で現実から逃避しなければ、日本は犯罪だらけってことなんだよ。そして当局はそれに対し法的に適切な処理をしないし、国民もそれに全く反応しないから法治国家でないと言えるだろ」

「でも、中国も一緒なんじゃないの」

「中国は年間二万人の役人が捕まり、数万件の暴動が起こっている。犯罪をする公務員が異常に多い、暴動そのものが犯罪という意味では非法治を思わせる。だが、日本のように報道で誰でも知っている公金泥棒を捕まえない、またほとんどの人間が捕まえろと言わない、公務員の犯罪の場合は余程のことでも執行猶予が付く、そんなことは基本的には中国ではない。いや、世界中どこでもないだろう。他人の盗みを認めないという攻撃的性向の強い人間の暴動が怖いし、自分たちの支配者としての立場が危うくなるし、価値が下がるから。勿論、中央政府の失敗自体は明るみに出ないよう必死に隠すだろうが、根本的に犯罪者は逮捕した方が得なのでそうしようとする。その観点からの対比では遥かに中国の方が法治だ。たいていの暴動の目的は公務員の不正に対する不満、つまり、かなりのリスクを掛けても他人の盗みを認めないという行為。理由はどうであれ、日本人には稀にしかない、法治国家に必要な不可欠な他人の盗みを許さない攻撃的性向の強い人間が多々いることは事実だろ」

「でも、暴動なんて餓死しかけているからだろ」

「ひょっとして、そういうことがほとんどかもしれない。だが、日本人の攻撃的性向が異常に低いのは事実で、犯罪率や歴史などを見れば明らかだよ。日本語を主言語にすると、脳の処理パターンが他の言語を使うのと違うという説が十年以上前からある。中学の頃読んだ本で、反証データは全く出てきたことがないって書いてあったから、ひょっとしてそれが原因かもしれないよ」

「でも、でも中国が………」

「異常に中国が嫌いなんだな。別に中国が法治国家であろうとかろうと、どうでもいいだろ。俺の説としては日本だけが特殊な国ってこと、これもどうでもいいけど。これも受け入れなくてはならぬ、聞き流して」

中国は法治国家？（後書き）

今回、読んで不快になられる方がおられると思いますが、たかがど素人の小説ということでご容赦下さい。私自身何の思想信条もなく、問題の箇所はただ単に盛り上げるためと後の伏線のためだけに書いたもので、苦情がたくさんくれば書き直します。すべて完全なフィクションです。

ありがとうございました。

日本は大人の国（前書き）

全てフィクションです。

日本は大人の国

「本当に日本だけが法治国家でないのかよ」

「俺はどっちでもいいけど、理屈上、そうなるのではないかってこと。日本が村という結論が劣っている感じで嫌なら、こう考えればいい。というより、これが真実だろう」

「真実？」

「外人は二十歳を過ぎても大人になりきれない少年が沢山いるが、日本には皆無だと。それが特殊な国にしていると」

「二十歳を過ぎた少年？」

「ああ、そう。当たり前だが、人間は本能的に村を形成するようになっていて。日本人にとって国とは国土を基盤とした法律に基づく利益結合でなく、村の上の村の上のまた上か、日本自体が大きな村。子供が大人になるということは村人になるということ。つまり、村を第一に考える、身分を弁える、村民に迷惑を掛けない、争いをさける、村が揉めたら丸く治めようとする、我をなくすということ。子供の頃は特に精神年齢は男の方が低いだろ」

「確かにそうだな」

「少年は村の中心になろうとする、だから喧嘩をやたらにし勝ち負けにこだわる。だが、ほとんど失敗し、村人としてうまく生きようとすると。少女は初めから村人として生きようとする、だから小さい頃から男と比べれば遥かに大人。日本人は二十歳過ぎればほとんどの人間が大人、要は村人になる。談合系の犯罪もその業界村の大人としてやった行為で、国のルールを知らない守らない子供としてやった行為ではない。犯罪とは法に反することなんだけど、脳の基本原理からすれば、決定的な反村人的行為をそうみなす。だから、村の一員として行った犯罪に対しては寛容で、個人の犯罪と感じればその一万分の一でも嫌悪感を抱く。多くの人の脳の中では犯罪イコール反村人的行為なので、日本は違法だらけなのに犯罪が少ない

と感じる。小学生の時、銀行が潰れて泣きながら謝っていた社長の真似がはやっただろう」

「おう、おう、あった、あった」

「普通は責任逃れをするのに必死なのに「自分たちがすべて悪くて社員には一切の責任はない。だから社員を雇用して下さい」と大泣きしながら言ったという理由で、あの社長は一部のマスコミに賞賛されていた。ごく普通に処理すれば、社長なんだから会社として犯罪をしていた時期も取締役でそれに大きく関わったひとり、社会に与えたであろう被害額は数百億だろう。なぜ、こんな極悪人が非難されないかというと、犯罪は村長として村人である社員のことを思っただけの行為だから。なぜ賞賛されるかと言えば善良な村長さんだから、自分の村の村長さんもうこうであって欲しいと思うから。当時の役員報酬は多分二千万円台。普通の法治国家なら、被害額は数百億以上なので十年以上の実刑、損害賠償で数十億以上だろう。これなら役員報酬が刑罰に合わないさ過ぎて誰もしない。法治国家なら、こんな現象が起きる事自体奇跡に他ならない。だが、日本ではこの数十年間これが普通。それはこの国に大人しいないから」

「ああ」

「少年が沢山いて相手が異常に強くなければ、公に莫大な被害を与えた犯罪者に対し捕まえろの大合唱や暴力が起こる。捕まった方が精神的にも実利的にも得だから。少女や大人ばかりだとうちはならない。少年の攻撃的性向が法治国家を作り成立させる。法治国家とは他人に法律を守らせる利益結合なのだから」

「どうしたら、日本は法治国家になるんだ」

「多分、どうやってもならない。独裁者なら倒せば、また独裁者が出てくるか、民主化、つまりこの場合は法治国家になりうる。しかし、日本の場合、倒す対象は村人の本能の仲間意識で広範囲かつ強力かつ不明瞭。それにトータルで見れば、国民の多くはその恩恵を受けているし、本能としてそれを望んでない。特に日本の村々は上にいくほど犯罪が収入と大きく関係しているので、それを強く拒

絶するだろう。日本が法治国家になることを望んでいるのは、俺みたいに底辺かつ人間関係がほとんどなく、何処の村にも属していない中のほんのごく一部だよ」

「村々の上って」

「裁判官、検察官、弁護士、マスコミ、国会議員、官僚、これが法という観点から見れば、日本の一番上の村の構成メンバーだろ。前四つは説明するまでもない。残り二つ説明いる」

「なんとなく分かった。善意の第三者の仕掛け人みたいなもんだろ」

「そう。あつ、そうそう。日本人だけが特別である可能性として、こんなものがある。ある脳科学者の説なのだが「日本語を主言語にするものだけ、脳の処理パターンが違う」と言うもの。確か右脳と左脳の同調度合いが違うと書いてあったと思う。勿論、全く真偽は知らない」

日本は大人の国（後書き）

最後に出てくる説は、私が十年以上前にある本を読んだ記憶から書いたもので、その程度のもものと受け止めて下さい。ちなみにある本の著者は角田忠信教授だと思っています。
ありがとうございました。

底辺の味方（前書き）

理屈っぽいのが嫌いな方はこの話は飛ばしてください。今回の話は主人公たちに救いの手はないを印象つけるために書いたもので、他に何の意図もありません。苦情がたくさんあれば書き直します。全てフィクションです。

底辺の味方

「俺は失うものがない底辺なんだから、法治国家になった方が得なんだよな」

「そう、基本的にはものすごい得だよ」

「来年ぐらいに政権が変わるかもしれないだろ。犯罪が結構減ってぼろ儲けなんじゃないのか」

「政権が変われば変われば一見違法状態が減るのは確か。だが、俺たち都市部の底辺が得するかといえば話が別。多分、損するだろう」

「何でだよ。違法が減れば得するんだろ」

「あいつらの支持母体が労働組合で、天下り先を極端に減らし、子供のある世帯に年三十万円出し、確か農家に数兆円の所得保障をするが政策の柱なのは知っているよな」

「ああ、そのくらい知っているよ」

「天下り関連の金の行き先はほとんどが関東なんだから、それもなくせばそいつらの職がなくなり消費がなくなる。一見いい気味だと思うかもしれないが、結果として俺達都市部の労働条件は悪化する。農家の収入が増えてそれが消費に回っても、恩恵をうけるのは関東では経営者で俺達底辺には関係ないそうだろ」

「確かに」

「三十代前半の男の独身率が40%で女が25%位だったと思う。男の場合、結婚出来るか否かは大きく年収が関係しているのは分かりきったことだし、データーにも出ている。調査年齢の平均も年収区分も覚えてないけど高い方が70%台で低い方が30%台だったと思う。つまり、俺達底辺にとって子供手当では、自分らより遥かに収入が多い正社員や公務員がさらに富むのを羨望の目で見せさせられたうえ、自分達はその負担を背負わされる可能大だろ」

「そうだな、絶対に得するのは今子供がいる世帯なんだからな。」

ひよっとして少子化対策にもなってないの」

「多分なってない。産まない女が増えたのであって、産む女ひとりあたりの出生率は三十年前から、ほとんど変わってないってことになっている。全く興味がない俺がテレビで三回位専門家から聴いて知っているんだから、国会議員なら結構知っているだろ。実質結婚するか否かを決めるのは女で、子供一人当たり三十万貰えるから、結婚しようという人間は少ないだろ。子供のいる家庭も六割以上はもう新たに子供を生むって環境や年ではないだろ。公務員系以外は急激に年収が減る可能性は大いにあるのだから、百万円ならともかく三十万円で予定以上に産もうという家庭はほとんどないと思うよ」

「じゃあ、あれだろ。真の目的は子供のいる世帯は裕福な世帯、つまり間接的に自分らの支持者である労働組合員に金をプレゼントするのが目的じゃあないのか」

「いや、悪意はないという意味で違うと思うよ。多分、欧州のどこかの国でやって成功しているからだじゃないか。勿論、選挙対策もあると思うけど」

「だったら、日本でも成功するんじゃないのか」

「勿論可能性はあるが低いだろ。日本と欧州では収入分布が違う。欧州は日本より公務員がやたらに多く、労働者が保護され、非正規と正規の差も少ない。大げさに言うと皆均等に100貰っていて、子供を産み育てれば毎年いくらか上乘せしماشょうって話。日本の場合も大げさに言うと、子供を持っている3,40代の正社員の世帯収入600万が630万、660万になり、20代の非正規の200万が結婚できたら、貰える可能性があるって話。全然前提が違うだろ」

「どうしたら、子供は増えるんだ」

隆は声を出して笑ってしまった。実はだいぶ前からおかしかった。

「何がおかしいんだよ」

「お前も大人になったなあと思って。気分を害したらごめんな」

「誰でも年を取れば大人になるだろ。お前もさっき言ってただろ」

「そうだな、ごめん。真面目に答えるよ。現時点では少子化はどうでもいい問題なんだよ。サブプライムって知っている」

「ああ、よくは分からないけど、アメリカの住宅バブルが弾けたんだろ」

これは今年の話で、当然リーマンショックが起こる前で現在日経平均13000円台だ。

「正解。徐々にだろうけど世界の経済システムは変わり、短中期的に日本はばら撒かない限り、経済は縮小循環に入る。仮にこの問題がなくても、現在20代の40%以上が非正規で50代はほとんど正社員なんだから、毎年労働者全体の収入は減っていく。長期的に見ても人口が減っていくから縮小に向かう。つまり、日本の経済システムが根底から大きく変わっていかざる負えない。経済団体が移民を数百万人入れる案を提案したとか聞いたけど、それえお実行するなら少子化などどうでもいい話。アメリカ経済の関係で貿易収支が長期にわたり大赤字になる系の判断をするなら、少子化は最高の話。日本は対外純資産200兆円以上ある。過去の貯蓄で生きていこうとするなら人口は少なければ、少ないほうがいい。つまり、少子化問題はこの数年の経済状況やシステム構築の後の問題」

「難しいけど、何となく分かった」

「農家の所得保障の話もついでにしようか」

「ああ、頼む。農業も俺達にとって不利なのか」

「ああ、多分。俺の記憶が確かなら、農家の収入が十年前が九百万円台、農家における専業農家比率はたった10%以内、兼業農家の収入の内、農業によるものが15%、多分米農家がほとんどだろう。単純に考えれば、兼業農家はサラリーマンが副収入を持っているようなもの。農家の収入が900万円台だということを考えれば、少なくとも八百万円はあるだろう。そいつらの収入をどうして保証してやる必要があるんだって話だろ」

「でも、食糧自給率をあげないといけないだろ」

「世界食糧危機がくるかもしれないという前提なんだろうけど、

今の自給率は40%台で農家に金を配ったところで40%台だろ、意味ないだろ。日本の対外純資産が200兆以上、外貨準備が100兆以上の日本が食料を買えなくなるような状況なら、世界経済も日本経済も完全に破綻している。仮にそうなることを想定しての対処なら、数十%上げないと意味がないだろ」

「そうだけど」

「自給率を急激に上げたいなら、小麦で決まりだろう……………」

……………」

底辺の味方（後書き）

ありがとうございました

21世紀も少年（前書き）

はじめの方の話がおもしろくない方は、途中の行があげてあるところからお読み下さい。これからは普通の小説に戻ります

21世紀も少年

「分かった。ありがと。ところで何でいろんなことに詳しいんだよ。毎日欠かさずニュースとかを見て、勉強しているのか」

「いや、全く。この三年間、会社の昼食時の情報番組以外は全く見ていない。見ても全く何の得にもならないだろ」

「だったら何で、いろんな面で細かい数値をあげれるほど詳しいんだよ」

「独身率とか非正規40%とかは昼テレビで見たから。日頃刺激がないから覚えていて当然だろ。他の談合や監察医などの話は数年前とはいえ、見てれば覚えていて当然だと思うけど」

「そんなこと覚えている人間なんて、ほとんどいないだろ。本当はネットで調べているんじゃないのか」

「他の人間がどうかは知らないが、俺が覚えている理由は、国家が崩壊しかねない大事件だから。考えてみて、数百億損害を与えておいた人間が実質ノーペナルティなんだぞ。不当利得を受けた会社は見つかっても半分すら返してないんだよ」

「それ、おかしいだろ。経済犯は昔から余程のことがない限り実刑にならないし、そういう国だってこと、お前は小学生の頃から知っていたんだろ。それならいつものことで記憶に残らないだろ」

「まず、今までと被害の桁が違う。それと昔と経済システムが根本から変わったから、基本的には実刑以外ありえないんだよ」

「経済システムと刑罰どう関係があるんだよ」

「大雑把に例えて説明するよ。ある年経済規模が500兆円で公金泥棒が5兆円盗んでいたとする。次の年、物価が十倍になり規模が5000兆になり、泥棒が50兆盗んでいたとする。その次の年規模が5京円になり、500兆円を泥棒が盗んだとする。大げさだがこれが昭和30年からのシステム。毎年経済規模、物価、収入が上がっていくから、通貨を健全に機能させるという目的に対しては、

公金を少々盗まれても大丈夫。過去の盗みの被害や財政の悪化も物価の上昇が軽減する。何となくでいいんだけど理解できた？」

「分かるよ、そのくらい。規模ってGDPのことだろ」

「まあ、そうだけど、規模の方が分かりやすいと思って。今の経済は物価もほとんど変わらず規模も毎年500兆円で、公金泥棒が毎年5兆円盗むを続けている状態。これが経済システムが根底から変わった結果。これ以上借金は出来ないとか、赤字国債を発行して将来の子供につけを回すとか、税金の無駄遣いを止めるべき、小さな政府、資本主義が正しい、などは国民や政府などの総意だ。その判断が正しいなら日本は通貨危機で、さっきのシステムと違い毎年の5兆円の盗みが将来異常に利いてくる。つまり、円という通貨を機能させ続けるという目的に対して、泥棒を止めてもらう必要がある。だが、検察の求刑も裁判所の判決も安心して続けるというサインにしか見えない。大多数の前提を用いるなら、こいつ等は国ごとひっくり返そうとしているんじゃないかと思えない。強烈に記憶に残って当然だろ」

「凄いな。さすが天才だ」

「この程度では天才だとは思わないけど。それに残念ながら、この話の基本は織田が中学時代に教えてくれたんだよ」

「えっ、でも、それならもうすぐ日本はやばいってことい」

「いや、この面からは大丈夫だろう。多分、徐々にアメリカ経済が悪化し、日本に影響が及ぶ。政府は財政出動をする、識者は仕方がないが景気が回復したら、消費税を上げるべきと唱える。仕方ない、これを毎年繰り返すだけのこと」

「ひょっとして財政赤字は問題ないのか」

「なるわけがないが、政府の思い通りになったとしても、試算上、毎年赤字は20兆以上数十年間続くことになっている。それが毎年5兆プラスされても、何の問題もないと思うけど。財政再建をしようとするなら、困難だが昔の経済システムに戻し、名目GDPを上げ実質の借金を減す。若しくは遺産相続税系を上げるのどっちかだ

ろう。まあ、議論するのはマスコミ含め、金持ちばかりだから議題にもならないと思うけど」

「本当に日本は大丈夫なのか」

「十年は絶対に大丈夫。経済が悪化すれば政府がばら撒く、それだけ。これも織田が……」

「分かった。ありがとう。織田って全国模試一桁を取ったことがあるお前より、頭いいんだろ」

「ああ、比較の対象にならない位」

「だったら、ひょっとしてあの事件の報復をしに行くか」

「さあ、知らない。何でそんなこと聞くの」

「江口さんは頭いいけど、お前レベルでないだろ。だから報復しようと思っても多分出来ない。でも、織田なら変わりにやってくれるんじゃないかと思って。少年は社会の中心になろうとするが、なれないから大人になるって言っていただろ。でも、そんなに凄いのなら、逆に大人なれないんじゃないのかと」

「多分、その通りだろう。ただ、大人になれないんじゃないかって、大人になる必要がない。最初の数百万円は普通に働かなければ無理かもしれないけど、その後は簡単に頂点に駆け上がっていくだろう。確かに大人になる必要がない。いつまでも少年のままだろ」

「だったら報復しにいくよな。大人だったらあいつら強いから降伏するけど、少年だったら、何の罪も犯してないのを知りながら、刑務所に三年も入れた奴を許すはずがないよな」

「考えたことなかったけど、意識したらする可能性の方が高いな。」

ただ、相手が相手だけに大金を得てそれで社会的ポジションを作り、そこから報復を思うけど」

「具体的にどうするんだ」

「さあ、全く分かるわけがない。報復を隠れてしたら怪しまれた時点で指名手配になり、ばれた時は懲役数年を食らうだろ。だから、表舞台から合法的にするんじゃないかと思っただけ。あつ、そうそう、そんなことより、江口自身の方が問題だろ」

「認めたくないけど、江口さんは何も出来ないだろ。大丈夫だよ」

「いや、織田より異次元で危ない。多分、あいつは脳の一部が壊れていて、先天的におかしい。織田は大人になるかも知れないが、江口は先天的なものだから、いつまでも少年のまま。不撓不屈、天上天下唯我独尊、これは江口のためにあるような言葉だよ。危なすぎる、仲間で監視しろよ」

21世紀も少年（後書き）

ありがとうございました。

王 貴族 奴隸（前書き）

ここからは最後まで普通の小説です

王 貴族 奴隷

翌日から普通の労働に戻った。体は常に動かす必要があるのだが、ゴールデンウィーク程でないので頭に暇ができた。

昨日はゲームに夢中だったため全く意識しなかったが、三百万円のことが気になりだした。返す必要が発生することがあるのだろうか、意識してみたものの考える材料と知識が足りないので分からない。もし使う、つまり実家に金を送った後三百万円返すよう求められた時、残りの貯蓄百万を出すだけで済むのか、それとも二百万の負債を背負うのか、どっちだろう。明確に犯罪の金だと知っていて使ったのなら、法的には返済義務があることを隆は知っている。だがこの場合、どちらかさっぱり分からない。

まあ、半年捕まらなければ大丈夫だろう。とりあえず送らずに置いていこう。

でも、どうやって滝野はあんな大金を稼いだんだろうか。現金だけでも一億数千万円、芸能人、食事、ワイン、どう低く見積もっても二億円は掛かるだろう。これからも莫大な収入が入ってくるなら、五億円位の資産でもひよとしてやるかもしれない。でも、警察が捜査しマークしたら逮捕はされなくても、犯罪が出来なくなるのだからその可能性は低い。普通に考えれば数十億円以上を持っていて、これからは犯罪をしないつもりだろう。

どうやって稼いだのか。一番簡単なのは金融詐欺、うまくいけば数億は簡単にいく。だけど、二十一歳これが問題だ。この手の詐欺の場合、相手を信用させる必要がある。二十一歳を信用する人間なんていないだろう。まさか整形したとか。それにあいつ、頭良くなかっただろう。たった、三年でどうやって。まさか、滝野でないのかも。頭の中で白マスクの発言を再生してみるが、どう考えても滝野だ。初めは誰かわからぬようしゃべりを意識していたが、後の方のイントネーションは秋田近辺出身なのは確実だ。

あーあ、あいつが数十億で俺は時給1100円か。あいつに貰った三百万は二千七百時間分。千万の時、答えて逃げときゃ、よかった、くそ。

今の作業が終わる。目線の先には飲料水の箱が山積みになっている。それをカートに乗せるのが次の仕事だ。1個二十円か、いや、全然いかないな、十円、いやそれもない。

昼食は社員食堂でいつも通りにカレーを頼んだ。席に着きテレビを見ながら、一口入れると不味いと感じる。何故だろう、この前にいいカレーを食べたせいだろうか。確かに四日間うまい物を食べ続けたせいもある。でも、この食堂で初めて食べた時に不味いと感じた。他も大して変らないから、これにし続けただけだった。今まである意味、味覚が麻痺していたってことかと思った。

カレーが不味いといっても、好みの味ではない程度なので黙々と食べる。

テレビで生活省のたくさんの役人が、勤務時間中にネットで遊んでいたと特集をやっている。生活省はあくまでも調査のもので、処分は全く考えてないと発表した。完全に詐欺じゃねーか。そしてあることを思い出す。数ヶ月前、生活省の下部の年金庁で横領した職員が告発されていないことが話題になった。その時、生活省の大臣が「悪い事をしたやつは刑務所に入れてやる」、つまり刑事告発をすることをテレビでアピールしていた。隆はあほくさと思って見ていた。あの程度の犯罪では公務員でなくても、必ず執行猶予が付く。勿論、大臣は知らないはずがない。隆は徐々に腹が立ってきた。あれは一回盗んだだけじゃないか、これは毎日だろうが、完全な犯罪だろうが。こいつ等の自給は三千円か、俺は俺は。完全に奴隷だろう。隆は両手で机を思いっきり叩く。全員の視線が隆に向く。それを感じ食べるのをやめ、仕事場に戻っていった。

カートを広げ、その上に寝転ぶ。他人の視線が隆の怒りを多少静めたのは確かだった。しかし、また怒込み上げてくる。

自分、生活省の役人、白マスク、その三者の比較が何度も何度も

頭の中を回る。

労働は人間の限界、隠れてネットで遊ぶ、なし。時給千円、その三倍以上、犯罪で一攫千金。くそ真面目な労働、全体に奉仕する気などさらさらない、もろに犯罪。買い物は激安スーパーだけ、大多数より値段を気にすることはない、使い切れないほどの大金。他人の犯罪で莫大な借金、平均貯蓄千万円台、犯罪で数十億円の資産。

そのループは加速して脳を支配していき、怒りの感情は限界に達する。それはあり得ない大きな奇声となって現れた。

三名が何事かと駆けつける。隆が奇行などしたことは皆無なので、当然、痛みからきたものだと思い本気で心配する。隆も状況をとっさに理解し、頭を抑える。

「病院に行った方がいいじゃないのか」

「済みませんでした。もう大丈夫です。事故の後遺症で極まれに出るんです。申し訳ありません」

「本当に大丈夫なのか」

「ええ、大丈夫です。痛みもほとんどなくなってきましたし」

「ならいいけど。明日にでも、病院に行った方がいいぞ」

「ありがとうございます。そうします」

三名は持ち場に戻っていく。隆は一気に醒め、理性が感情を上回る。

くそ、まずいなあ、このままだと自滅していく。自分の生活が貧しいもの、悲しいもの、そう判断させる、これが滝野の狙いじゃないのか。そう、あんなだけの金を超短期で稼げる方法は金融と盗みしかない。本人が盗んだといっているんだから、帝のやつらもそうだと判断する。あの時は誰か分かってなく、目の前の金に眩んでいた。だからなんとも思わなかったが、大下だと思っている今は違うはず。自分より下だった人間が数十億持っていて、自分は時給千円位で働いているのだ。屈辱的、どうにかしたい、そう感じるはず。盗みはおいしい、それを実行すればあの生活が手に入る、そう判断

するはずだ。帝の奴らがイメージする、実行できる盗みは直接盗むようなもので一回平均数十万だろう。だが、働くことを考えればおかしすぎる、捕まる率も調べればたいしたことないのが分かる。だが、盗み出したら終わり、滝野自身が通報する。こんなところじゃないのか。

駄目だ、このままでは潰れる。とりあえず考えないようにしよう。そう、感覚が麻痺していけば、時間が経過していけば、自分が惨めで悲しい生活であることもあの夜の興奮もすべて忘れていくだろう。大切なのは頭に意識する暇を作らないことだ。

休み時間なので働く必要がないのだが、気を紛らわすために仕事を始める。

三時頃、隆は書類の作業をしている時に背後から呼ばれる。振り返ると時田と三田が立っていた。「約束通り、こっちに三田君に来るから。それとあの機械がちょっと向こうと違うので説明してあげて」「はい」、それを終え、戻ってくると時田がいた。

「会社としては中村君に正社員になって欲しいということに決まりました。とりあえず1ヶ月以内に結論をお願いします」

「分かりました。ありがとうございます」

そう言ったものの、金銭的にはそうおいしい話ではなかった。しかし、ラッキーだと思った。このことを考えていれば、あの夜のことは忘れていくだろう。便所に行き鏡を見る。どう見ても黒いあざは微かに分かる程度だ。転職に差し支えない、そう思った。

五時頃になると三田が近づいてきた。「中村は上がりだろ」「聞いていませんが」「うそ、時田さんに聞いてみて」。仕方なく聞きにいくが、結果は三田の言う通りだった。本気で正社員にしたいんだろうな、そう思った。

家に帰り、ネットで職を探す。だが、調べても今の会社で正社員になるよりも、たいしていい条件は見つからない。実家に帰ると家賃は浮くが、さすがに妹たちの顔を見るのは耐えられない。まあ、時田から正確な条件を聞いてからかと結論づけた。早く帰って暇だ

が、出掛ける金はないので、ゲームを始めた。

翌日も家に帰るなり、ネットで調べ始めた。時田に聞いたところ、先輩の言う通りの条件だった。残業がなくなったために、月に五万前後減る計算だ。しかし、頼めばまた出来るかもしれないので、今のままも有り得る。どうするべき、東京に行くか、それなら自給も上がるだろう。事故のための退学だから高卒と見なされ、結構いい就職先が見つかるかもしれない。だが、正社員だと当分手取りは減るだろう、それにサービス残業がたくさんあるかも。金と言えば、あっ、ホストだ。鏡の前に行き、冷静に判断してみる。交通事故による顔の変色の後もなく、その平均値は越えている。そのため次の段階に入るが、その途端に不安になる。この三年間、性の対象とほとんど話しすらしたことがないのだ。もっとも思い出したいくないことの一つを思い出す。一度だけ、性を買おうとした時のことだ。

就職して一年目だった。女がはじめて隆の顔を見た時の反応は笑い系か、嫌悪系か、見て申し訳ない系だった。そのため、女と付き合うという発想すらなかった。だが勿論、性の衝動はいつものことだ。ある日、隆にとっての大枚をはたいて、初めて性を買うことに決めた。会った時点で笑いを堪えているのが分かる。キスをしようと顔を近づけた時、女は堪えられなくなった。御免と謝られたが、とてもそんな気にならなかった。

その後は、連鎖で暗い過去が次々と蘇ってきた。次の日もそれを引きずっていたが、理性は普通に機能していた。必死に職を考えるが、結論はでない。金を送れなくなるかもしれないというリスクが判断を妨げた大きな要因だった。これが何日も繰り返され、転職するという意識も段々なくなっていく。残業もすぐに再開したため、あの日以前と同様な心と体になってくる。昼休憩のテレビで生活省だけでなく、大蔵省も同様だったと特集をしている。ほとんど、何も感じない。だが、そのことが生活省の話が放送された日を連想させる。自分の生活、いや人生が貧しいもの、悲しいもの、そう認識

した日のことである。今、自分の中にある感情を確かめる。別に何も
ない、怒りどころかあきらめという感情をさえ乗り越えたのだと
思った。

王 貴族 奴隸（後書き）

ありがとうございました

大転機

翌朝十時過ぎに起きてシャワーを浴びる。そして残ったご飯をチンして、卵と醤油を混ぜて食べる。この二年間、休日の朝はこれだ。生活自体も全てがほとんど変わらない、ずっと軽い鬱状態なのも、部屋の状態も。強いて変ったと言えば、ゲームがあることぐらいだ。ネットより、こちらの方が暇つぶしになるので、始めようとする。たまたま視界にワインが入った。どうしよう、酒屋に売るか、それともネットで。二十万がいくらになるのだろうか、一万位か。その時、呼び鈴が鳴った。管理人のおっさんだろう、誰か確認せずにドアを開けた。

「あっ、久しぶり。真剣な話があった」

健太だった。

「まあ、何にもないけど、上がって」

健太を部屋に上げ、座るところがないので、フローリングの床に座ってもらう。

「飲みのも、コーヒーか茶かスポーツドリンクどれがいい」

「お茶がいい」

隆はそれを冷蔵庫から持ってきて、同じ床に座る。

「仕事変えたの、土日が休みだっただろう」

「もう、辞めた」

「あっ、そうなんだ。えっ、もうって、働かないってこと」

「ああ、もうしない」

「あっ、そうなんだ、で、話って何」

「俺たちも盗もう」

「はあっ、意味が全くわからない。どういうこと、まさか白マス
ク」

「ああ、働くのが馬鹿らしくなった。俺たちも盗んで楽して大金
を稼ごう」

「お前はガキか。やりたかったら、自分だけでやったら」

「お前働くの馬鹿らしくないか」

「馬鹿らしいけど仕方ない。金を稼がないとしょうがないだろう」

「だったら、盗もう。どう考えたって馬鹿馬鹿しいだろ。生活省、大蔵省のネットの見たか」

「ああ、知っているけど」

「完全な泥棒だろ。俺たち、あいつらの奴隷じゃん」

「ああ、その通りだけど、前から分かっていたことだろう」

「だったら盗もう。こないだ教えてもらったんで、自分で勉強したけど、この国泥棒だらけじゃん。盗まなきゃ損だよ。ひよつとして捕まるのが怖いから嫌なのか」

「別に捕まるのはいいけど、妹や親父が可哀想だろ」

「単純な窃盗でも検挙率10%も全然ない。お前からみたら、救いようのない馬鹿がやっているのに。お前だったら完全犯罪を思いつく。何ならこないだ教えてくれた善意のすればいいだろ。俺は絶対に言わない、金も2対1でいい」

「2対1って何、取り分のこと」

「3対1でいい」

「はつきり言うけど、無理。あの事故で多額の借金が出来た。しかも、会社が倒産してから親父はアルバイト同然の給与だ。だから俺が妹たちの生活費もださなきゃいけない。毎月金を送るために真面目に働く必要があるんだよ」

「毎月、送っているっていても多くて十数万なんだろう」

「ああ、もっと送りたいけど。それ以上は無理」

「だったら、俺が百万円、つまり五ヵ月分出す」

隆の脳は覚醒をする。だが、それがばれない方がいいことに気づき、顔に出さずに醒めたトーンで聞き返す。

「百万出す、くれるってこと」

「ああ、そういうこと。だから、なっ」

隆は悩んでいるふりをする。

「だったら、二百万。それで頼む」

「ああ、分かった。やろう。ただ、俺たち見た目が年相応だろ。特にお前の声はガキっぽい」

「そうだけど、それがどうしたんだ」

「前に言ったように詐欺で儲ける方法はいくらでもあるんだけど、どれも相手を信用させなくてはならない。つまりその方法では無理で、他の方法を考えなくてはいけない。二ヶ月分は計画期間として当然だけど、そこから何もしない間、二十万ずつお前に返すっての
でどう」

「ああ、構わない。それでいい」

「なら契約を交わそう」

「ああ、そうしよう」

隆が文を作り、健太が納得して書く。勿論、それは犯罪とは無縁のように見えるものである。多少リスクはあるが、もう二百万円は頂きなので思い切って聞く。

「ところで何でそこまで俺のこと、高評価なの」

「江口さんの弟や他の港東の奴らにも聞いた、お前は天才だって。授業中、全く勉強せず漫画読んだり、寝ているのに、成績はトップクラス。俺も勉強している様子どころか、家に勉強道具すらほとんどないのを知っているから」

超ラッキー、隆は笑うのを必死に堪えた。隆の通っていた港東高校は県内指折りの進学校だ。全く勉強せずにトップクラスを取るの
は不可能に近い、当然裏がある。隆が行っていた高校はあくまでも県内で指折り、だが通っていた中学は国内で十数番目に入るラーサー高校が新設した中学なのだ。進学校の中学の授業は出来る人間にとっては自習の時間にすぎない、学校もそれを望んでいる。隆は中学卒業時にはもう大学理系なら大抵どこでも合格レベルだった。港東は全国模試の上位は張り出すが、学校の試験はそうしない。だから天才に見えたのである。

その後、多少話をして隆は祝いをしようと切り出す。そして、な

んのためらいもなく、あのワインを持ってきた。

大転機（後書き）

ありがとうございました

初体験（前書き）

初体験

隆は 酔いが醒めて、ひとりになった部屋で考え始めていた。そのうち段々深刻になっていく。盗むという案には賛成でローリスクのハイリターン思っていた。だが、計画自体の前提を揺るがす問題に気が付く。

隆自身、窃盗をしたことがないのだ。正確には小三の頃にあったが、それは自動販売機の下を探すというものだった。それが盗みだという意識は当時全くなかったが、貯めていた金が見つかり、事情を話す父親に軽くどつかれた。

白マスクの盗むの定義や健太との会話が強く記憶に残っているため、隆は盗むという行為を過去に多々したつもりでいたのだ。

万引きすらやったことないのに、その何十、何百倍の犯罪を計画実行出来るのだろうか。罪悪感、そうこれが問題だ。実行を邪魔するし、捕まる引き金になるかもしれない。そもそも計画自体がしょぼいものや馬鹿げたものになりかねない。それに犯罪の標的は俺俺詐欺に引つかかるような頭がよくなって、社会的に強者でない方がいい。そう、騙すことに罪悪感を感じて当然の人々を標的にした方がいいに決まっている。

はじめにすべきことは、盗むということへの罪悪感や抵抗感をなくすことだよな。計画もその後立てた方がいい、感情が計画を甘くしたら損だ。

そう思ったものの、暫くは葛藤状態に入る。だが、健太に言った言葉の数々を意識する。

これは千載一隅のチャンスなんだ。これを逃せば、多分、このまま一生が終わるだろう。そう、決断すべき、善は急げだ。

すぐに数少ない服の中からもっとも真面目そうなものを選び、鏡で見る。万引きをしそうに見えるかを意識するが、判断できない。

原付に乗り、来たことがない街に行く。薬品、雑貨、食品、本の

店が同じ敷地に集まった所を見つける。近くにあるレンタル屋に原付を止め、しばらく歩き、本屋に入った。そこを選んだのは、テレビでやる万引き特集がだいたいスーパーカー本屋だからである。視点を上げずに監視カメラを意識する、むき出しで固定されているものだった。一番成功しやすいのは何だろう、古い文庫本か。本が小さいし、人はいないし、人気がないので、ノーマークだろう。そのコーナーに行く、もろに監視カメラに映る位置だった。だが、どんな店にも大体縦横に置いてあるだろうから、簡単な死角はないと気が付く。

自分で死角をつくるか、いや、この場さえしので逃げれば、それでいいのだ。ここで決めるんだ。逃げればその恐怖が恐怖を肥大させる、やるんだ。

様子見のために本を取り出すと、この時点で軽く震え出す。読み始める、だが、それが止まらない。何となく視線を感じるので、横目で見える。どんな人間か分からないが男で顔はこちらを向いている。必死に止めようとするがどうしても震えが止まらない。緊張は頂点に達する。本が落ちる、それを無視し、男がいない方に駆けていった。

原付のところまで戻っても、心臓の音が聞こえた。顔から噴出している大量の汗を拭く。どうしよう、止めるか。いや、やっておくべきだ。万引きはほとんどの犯罪よりも捕まるリスクも少なく、これから健太と与えようとする被害額は万引きの数十万倍なのだ。この程度のリスクを恐れたり、罪悪を感じていたら、計画すら立てられなくなるかもしれない。目的は善良な人に被害を与えて平気な人間に戻ることに。ガキの頃は平気で人を苛めていたし、ほとんど誰もいない山道とはいえレースも迷惑極まりない行為だろ。その加害額はこれからする万引きの何万分の一だ。いまさら犯罪に罪悪を感じることは馬鹿げている。

冷静になるために、自販機でコーヒーを買い、飲みながら考える。ここに着く途中に、自分の近所にある激安スーパーのチェーン店が

あつたのを思い出す。慣れているので緊張も少なく、客も多く店員が忙しいので、この店に決める。計画を立て何度も頭の中のシミュレーションをする。

原付を近所のパチンコ屋に止め、スーパーに入る。かごを取り、商品を見て回る。流れの主流である大外を歩く。菓子コーナーの所で曲がる。幸いなことに誰もいない。小さい子が欲しがるような数十円の菓子を手に掴みポケットに手を入れる。心臓が存在を表わします。ほとんどのレジに数人が並んでいる。その間や後ろをすり抜ける。後ゴールまで10m、9、8、7、鼓動はますます激しくなる。5、4、3、その時、隆の背後に気配を感じる。入ってすぐの菜もの売り場の方に行く。気配の主は肩を叩いた。それを無視して青菜を2つかごに入れた。

「ちよっとお客さん、ポケットの中を調べさせて貰えないでしゅうか」

隆は振り返り、顔を見る。名札には店員と書かれてあつた。

「お断りします」

「いえ、お願いですから調べさせて下さい」

「いえ、お断りします。調べられる理由などありませんから」

「菓子コーナーでガムをポケットに入れましたよね」

「いいえ、入れてません。仮に入れていたとしても、客が数人いるところで万引きをしたことを公言したら名誉毀損です。訴えますよ」

店員は上と通信していて、答えるのに少し時間が掛かる。

「どうぞ、好きにして下さい。それよりポケットを調べさせてくれませんか。そうでないと警察を呼ぶことになりますけど」

「分かりました。警察が来るまで待つのが面倒なので見せましょう。ただ、もし何もないければ、名誉毀損であることを認めますか」

「ここでも上と通信し、答えを出す。」

「ええ、認めます」

「ならどうぞ」

かごを置き、両手を挙げる。店員はポケットを調べる。隆から離れ「何処に隠しました」

隆は胸ポケットの中からメモを取り出した。

「いい加減にしませんか。ほら、女に頼まれたんですよ。ガムなんか万引きしたら買えないでしょう」

店員は手渡されたメモを見る。女っぽい字で、青菜をはじめ数品目とその値段が書かれてあった。上と話をし

「どうも、すみませんでした。謝罪しますので、事務所の方の来て頂けますか」

ここまではいざと言う時のシュミレーションのひとつだった。だが、こうなる可能性は極めて低いし、ここからは有利なため、あまり想定はしていなかった。とっさに隆は携帯を取り出し見る。

「時間がないので構いません。慰謝料は一万円でいいですよ。買物してますので持って来て下さい」

事務所には行きたくないし、慰謝料を要求しないのも不自然と思えたので、これが一番自然だと思ったのである。

「分かりました。どうも、すみませんでした」

隆がドキドキしながら自分で書いたメモを参考に買い物をしていると、店長代理が約束通り一万円の入った白い封筒を持って来て謝罪した。「全然、気になさらないで下さい」と言い、買い物が続け店を出た。

暫くの間は助かったという安堵感だけだった。やがて、目的を達したのか疑問を抱く。一応、不当な慰謝料を受け取ったので目的を達したように思えるが、別に詐取する意図はなかったので詐欺が成立しないような気がするし、少なくとも本来の目的である積極的な盗みではないのは確かだ。

まあ、でも、一万を返さなければ詐欺が成立するだろう、罪悪感を消すのが目的なのだから取り合えずこれで成功だろうと思った。

絶対に捕まってはいけない、これがこの万引きの大前提だった。犯罪歴を作ってしまうと健太との犯罪で捕まった時、刑罰が重くなる。それに計画自体未定だが、それによって採られた指紋があると捕まる可能性を増大させるからである。

奇跡的に詐欺になっただけで、当然万引きを成功させるつもりだった。カメラにガムを取る瞬間は映っている、偶然生で見ている可能性はほとんどない思っていた。

テレビの万引き警備の特集では、犯人を店から出てから捕まえる。そうしないと買うつもりだったなどの言い訳をされるからという理由だ。だが若い男なら、走って逃げられたら終わりだ。隆が経営者なら絶対に店内で捕まえる。もし、力づくで逃げようとしたら、強盗扱いになり普通は実刑だ。だから慰謝料を大きく請求しても、刑減刑のために払うと思われるからだ。それに大多数の前でやると、店外より抑止効果が高いのは確実だ。万引きは窃盗であり、当然未遂罪がある。鞆やポケットの入れた時点で犯罪が成立するか、隆は当然すると考えた。そう法的に判断することのデメリットがほとんどないと思われたからである。それは正解で、現実に万引きは鞆やポケットに入れた時点で成立すると、司法で処理されている。

つまり隆は店内で捕まえに来る可能性を想定していた。だからポケットに入れる振りをして、手に包み込んでいた。レジの後ろを通るので、そこで店員が尋ねてきても、かごに落とせばいい。レジの行列の最後を通るとき、急いでいる足音が聞こえた、対象が自分なのか分からないがとりあえず進む。その辺で声をかければ、電池、もう少し先なら玄関前の果物、その先なら今回のように、青菜をかごに入れる予定だった。

もし、誰も声を掛けて来なければ青菜を見に行き、振り返ることによって店員がいるかないか判断し、自動ドアを開けて万引き成功の計画だった。距離があれば追いかけてこられても走って逃げ切れるし、前の道路が自動車が適当にくるので、横切るタイミングさえ気を付ければ余裕で引き離せられる。この店と住所の近くの

店のチラシが一緒なのは知っていた。だから普段の値段は知っていたし、青菜の置き場も想定通りだった。それによってあの信憑性のあるメモを作ったのだ。青菜をかごに取った時、ガムをその下にに
いれた。

尚、金を騙し取れたのは、たまたま相手が名誉毀損と判断されかねない行動をとってくれた偶然である。

初体験（後書き）

有難うございました

少年時代

原付を置いたパチンコ屋に戻ると凄まじい騒音が聞こえる。それを止めたときは緊張で全く気付かなかったものだった。

それが昔を思い出させる、ああ、四号機だったらなあと思った。

それは四回目の行政の規制基準で作られたギャンブル性が高いパチスロのことだ。だが、それは客が甘い地域で数学が出来る人間にとってはローリスクの金をくれる箱だった。隆も高校時代にこれで稼いでいて、時給は二千円台だった。これによって、働かない若者やギャンブル性の高さからの破産者が多く出た。そのため警察が規制をかけ、ギャンブル性が低く特定の人が勝ちにくい五号機になった。

パチスロで勝てるとは知らない人には荒唐無稽に聞こえるが事実だった。パチスロとは設定が1ー6まであり、6なら一日打てば平均五万以上出る機械が普通だった。1なら勿論マイナスである。設定を判断するのは割と簡単だ。何回目に出たかを表示する機械がパチスロ機の上であり、いじれば初当たりからの履歴が全部見える。ほとんどのパチスロの機種は十数回履歴を見れば高設定の可能性が高いか分かる。また、次回に何回打ったら当たるか、大体の機種は初めから決まっている。要は打ち始めまでに打たれた回数によって設定が同じでも平均収支が違ふのだ。客が甘い店だと一回千円台、無理やり時給にすると三千円以上の台がごろごろ開いていた。他にも目押しといった技術や機種の知識など、収支が変わってくる要素は多々あった。設定自体を理解していない、機種を理解していない、設定を見極められない、そんな客が多いので隆にとって楽勝であったのである。

また復活したのでは、そんな淡い期待を抱き三年ぶりに店に入る。店内には全く見た事のない機種が並んでいた。二、三万円分のコインを持っている客は結構いる。もしかしてと思い、休憩所に行く。期待通りパチスロ雑誌が置いてあった。設定ごとの平均収支と機種

の性質を見ると設定を判断するのは案外容易で、時給二千円越えは可能のように思えた。最悪でも千円は楽勝でないかと。

ああ、働かず、こっちで稼げばよかった。どうして気付かなかったんだ。

そうならなかったのはこういう理由だ。交通事故の後、顔を見られるたび、笑われたり、口を押さえられたり、奇異の目で見られた。そのため人前をできるだけ避けることが、隆の行動パターンの主になる。そのためパチンコ屋に行くという発想は全くなかった。それに病院を出た頃は完全なうつ状態であり、家族に金だけでも頭になかった。うつ状態になった人間の意識はかなり狭い範囲で固定される。

どうする、打ってみるか。隆自身はこれで儲けようという発想はあまりない。自分が計画を立てている間の健太の暇つぶし、または資金アップにと思ったのである。高設定台を探し、それらしき台の席に座り打ち始める。たびたび他の台を見て回る、むしろこれが目的だ。設定判別が容易かどうか判断するためである。多分時給千五百円は可能に思えた。ほぼ、設定通りと思われる九千円を手到家路に向かった。

朝、目覚める。罪悪感などない、とても清しい気分だった。その理由は昨日の犯罪のことよりもパチスロで時給千円以上が簡単であると思えることの方が心理的に遥かに大きかったからだ。健太との犯罪が無理だったとしても、どうにかすれば明るい未来があるのでは、そう感じられたからである。ちなみにパチスロで時給千五百円が可能なら、今の隆にとっては十分である。

どうする、最近の口癖を軽く声に出して言うてみる。いつもと違い深刻さなど皆無だ。

昨日のことで高校時代のパチスロを思い出した。その時は大人にとってそれは遊びであり、平均一時間マイナス数百円は痛くも痒くもないから甘いと思っていた。だが、自給千円で働いている今は違うと感じる。勝たないのでなく、勝てなかったのだと。

自分はひょっとして飛びぬけて優秀なのでは、という思いがわく。小学生時代は、単なるわがままなガキ大将みたいなものだった。

成績トップだったが遊びが全てで、勉強はどうでもいいことだった。ラーサ中学に行ったのは江口と同じ中学に間違っても行きたくなかっただけで、それ以外の理由は何ひとつない。そこでは授業を無視し、その時間だけは異常に勉強をした。理由は家で勉強をしなかったのと、将来楽したいのと、暇だったからである。試験範囲を意識して勉強したことはないので、成績は上位だが決してトップクラスでなかった。当時、すべてにおいて断トツのトップだったのは織田である。隆が中学で一流大学合格レベルまできたのは、織田に勉強の仕方を教えてもらったお陰だ。中三の頃の織田は断トツなので特例でいつもゲーム、読書、漫画などをしていた、当然来ない日も多々あった。隆の高校時代はバイクと女だった、パチスロは金を稼ぐ手段に過ぎない。学校の成績を意識したことなど一度もなく、中学時代の学力を維持することだけ気をつけていた。そのため、学校の試験は上の下、全国模試はトップクラスだった。

結局、小中高と他人との頭をほとんど比較するということもなく過ごしたのだ。その対象となったのは織田ぐらいで、圧倒的に劣る。

さっきの思いがあることを意識させる、それは株だ。トップデイルーでも最高年15%言われている。数年前、税金を百億納めた人がいたが利回りは20%だった。つまり、単純に考えれば倍に出来たら奇跡だ。そのため全く儲ける手段として考えていなかったのだ。今はサブプライム問題が表面化し18000あった日経平均株価が13,000位をつけている。まだ、リーマンショックはきてない。

サブプライム問題、あれを意識する。普通に考えれば小学生でも分かる話だ。所詮そのレベルでないか。港東卒の同級が何処の大学に行ったか、ほとんど知らない。だが過去の卒業生がどのレベルに行ったは知っているの、それを意識する。それを考えると、株で

大儲け出来る可能性は無いと思った。健太がいくら持っているか分からないが、額によっては株価をコントロール出きるかも知れない。それに盗みである程度儲けられたら、それを増やす方法は株、または金融商品しかないだろう。

そうだな、とりあえず、つてところか。

ネットで調べ、口座を開くための書類を請求した。初心者用の株関連のサイトを見る。簡単に理解出来たので、次々と違うページを開いていく。信用倍率、逆日歩、ゴールデンクロス、一応理解できるのだが、実際売買できるツールがないので今いち実感が無い。口座を開いてからだなと思い、寝転んだ。

所詮、株はもしかしてだ。大儲けするための犯罪を考え始めた。

少年時代（後書き）

ありがとうございました

犯罪計画

所詮、株はもしかしてだ。大儲けするための犯罪を考え始めた。

まずはメジャーな俺俺詐欺を意識する。必要なのは匿名性の電話と口座だ。騙す技術はとりあえず置いて置こう。口座は買えそうだが、電話は可能なのか。ホームレスに頼めば可能だな。問題は警察に通信記録から現在地がだいたい分かるだろうということと成功率だろう。

高利貸し、これは無理か。別に返す必要もないし、そのことを知っている奴に常に怯えなければいけないし。その逆か、借りて返さない、合法だから問題はない。後ろにヤクザがいて脅してくれたら好都合、その分感謝料が取れる。借りて返しを数回し、信用を得て額を上げ次に借りて返さない、そして払った利息を返してもらう。多々、問題があるが可能性はなくなっていくところか。

詐欺、方法はいくらでも思いつくが、二十一歳通りの見た目が問題だ。電話ならともかく、実際に会ったら誰も信用しない。それに信じ込ませるための資金がたくさんいる。誰かを雇うにしても金が掛かるし、そいつがミスれば自分は助かるだろうが健太は実刑だろう。でも、何か方法が。

そうだよな、可哀想だよな。健太も善意の第三者にする犯罪はなのか。あるといえはいくらでもあるけど、全部社会システムの中で可能なものばかり、そこに入るには莫大な金がいる。

とりあえず、ネットで知識か。まず、さっきの自分の認識が正し

いかどうか確認するところから始める。

匿名口座、これは何とかなるかも分からないが、金融機関が突然使用禁止にしたり、売主から金そのものを取られるたりすることがあるらしい。とりあえずの結論として匿名の携帯は取得困難だ。だが、両方ともホームレスに金を出して、住所を作って契約してもらえば一応得られる。

違法な高利貸しから借りたら元本すら返す必要がない、それで返せと脅しにきたら犯罪が成立する、この認識は基本的には正しいみたいだ。ただこの方法は効率が悪そうだ。数万円位しか貸さないみたいで、それで脅しに来てくれて傷害で慰謝料10―30万が相場。これならパチスロの方がいい。

でも相手が犯罪を犯してくれるというのはおいしいよな、犯罪でなく金が入るのだから。あのスーパ一の出来事を思い出す。そう、これが一番おいしいし、安全だ。とりあえず、この方法を考えるべきだよな。

交通違反をしている車にぶつかる。原付でか、危険すぎる。健太が免許を持っているなら、ありだな。ありだけど何度も使えないし、最後の手段って感じか。

他に罪を犯してもらう方法は。傷害なら割と簡単に起こさすことは可能っぽい、ありだな。他に犯罪といえば、万引きか。高校密集地に万引きをしやすい店を開き、そうしてもらってワザと店内で捕まえようとして暴れてもらい強盗傷害に変える。これなら実刑が絡んでくるから、多額の慰謝料が得られる。一見馬鹿げているが、発想自体はありだな。だが、調べる人が多いからとりあえずパスか。犯罪、犯罪、犯罪といえば。

答えが見つかる、隆の脳内に大量の快感物質が溢れ出した。

犯罪計画（後書き）

ありがとうございました

退職（前書き）

行間を開けているところから、面倒に感じた人は流して読んで下さい。

退職

計画実行は自分一人でも出来そうだが、健太のお陰だ。裏切る気は全くない。

犯罪をするのだから、完全な匿名性が必要だ。そのために引越して、一緒に暮らすことは決定事項で、場所は隆に一任されていた。計画が出来たので引越し先をネットで埼玉中心に探す。理由は神奈川県と東京は知り合いに会う可能性が高く、賃料も高いからである。求めている物件はたくさんあったのでネットを切った。健太は暴走族らしく地元と祭りが好きだった。その祭りが済んでから一緒に暮らすので、急ぐ必要がなかったのである。

もうひとつ大事なことを思い出す、退職の問題だ。もう、迷うという気持ちは一切なく明日にも辞めたいが、職場が困ることを危惧する。それに円満に辞めといったほうが、今からやろうとすることを考えれば無難だ。理由は考えはじめるとすぐに見つかった。事故の後遺症の再発絡みを理由にするのである。これなら将来、二度奇声をあげたことが怪しまれる要素にならないと思ったからである。

捜査対象になる得ることを考え、病院に行った。身体はある程度悪いのは事実だが、特別な検査を望まなかったので病気は見つからなかった。

翌日、会社に退職願いを出す。二週間後に辞めるということではまとまった。

退職後、株式市場に夢中だった。この日から、朝は株で三時以降にパチスロの日々となる。

トップディラーがたった年20%しか儲けられない、それからイメージするものとは全く違った。年三倍になっても全くおかしくないし、その逆でもおかしくないのは明らかだった。信用口座を開けば資金の三倍の運用が可能になり、空売りも出来るからである。空売りとは先に持ってない株を売って、その後にその株を買う行為だ。

つまり、株価が下降局面でも儲けることが出来る。

株価は平均対前日1%位上下し、前日の取引終了後に月一程度の大きな出来事があれば2・5%以上の上下をする。その日の値動きの激しい株は検索すれば、誰でもすぐ分かる。それが分かってからすぐなら、2%の上下は普通だし、5%以上の銘柄もたまにある。会社ごと年四度ある短期決算では4%の増減などざらだ。これらと信用の三倍を組み合わせると、二日で資産が5%増減するのが普通にかかることだ認識できる。

隆は自分は失敗しまくっても年1・5倍は絶対を取れると判断している。

尚、トップが二十パー程度しか儲けられないのは、運用資金が莫大なため値動きの少ない大型株が運用の柱になる、空売りが制限される、等の理由である。

信用取引口座は一年以上経験がないと開けない。母親が自分の名義で株をやっていたのを思い出し、虚偽の申請をして違う証券会社に口座を開くことにした。

今は買いしか出来ないの、株価が上がるパターンを探した。長期的にはなかなか見つからない。株価が激安でも、その銘柄を上げていく金持ち達が出てこない、株は上がらないからだ。だが、短期的には多々見つかった。一番おいしいのはある銘柄の株価が急激に下落した時だった。その取引のほとんどが数百単位だったとする。そこに不釣り合いなその何十倍もの大きな買いが現れる、勿論そこから上がることも多々あるのだが、その逆も多い。するとたいていの場合、また大きな買いが出てくる。ここからまた下がることも多々ある。こういうケースがチャンスだ。場に不釣り合いな株の量を買ったと、売る時に買い手がない。十単位上がったとしても、十倍も買ったら全部売り切ろうとすると五単位以上下がるのが普通だ。不利なのを承知で買う理由は、この金持ちは銘柄を上げる資金と意思を持っているからである。要は買い進め値を大きく上げてから売りに回るともりなのである。つまり、この手の株は瞬間的にどつと

上がるのである。この上げタイミングを見極めるのが隆には簡単だった、正確に言えばたいいていの人が分かりそうな簡単なものである。異常な量の買いが出る、または並ぶからである。瞬間に上がるのは平均五単位程度と思われるが、それが止まると下げになるニュースが大きければそこで売り、たいしたことなければ待つ。そうするとたいいてい上がっていき二%以上取れることも珍しくない。そして、その見極めは人間の性がでる。利害関係者であるその株の保有者には難しく、そうでない短期利ざや目的の者にとっては易しい。

隆が儲けられるパターンはだいたいこれと同じで、何者か達が株価をその銘柄の取引量に対して大量の資金で上げようとするケースだった。慣れてきてその場が上がるか下がるか、その何割かだいた分かるようになった。それは特殊能力でなく、基本的にはデイトレのプロレベルなら売り買いの希望額を示す板や今日の値動き、取引の量、チャート、日経平均、などを見れば分かる。コントロールしようとした値から上がることも多々あるのだが、下がる時も多々ある。この時がおいしい。特段下げる要素もなく、多くの人間が上げようとし始めた値段を知っているので、そこに戻るまで売る人は少ないし、買う人は多い。この買う人の最初の方になれば儲けられるわけだ。

退職（後書き）

ありがとうございました

織田の異常性

十数日後、信用口座が開ける。とても嬉しかった。三倍取引が出来るのもおいしいし、信用の方が短期売買なら手数料が圧倒的に安い。それともうひとつ空売りが出来るのが大変魅力だった。簡単に説明すると空売りとは株を持っていないのに株を売って、その半年後までに同数の株を買い戻す行為だ。例えば100円で空売りをして90円で買い戻せば10円の儲けである。その逆で90円で空売りをし100円で買い戻せば10円の損である。聞いただけでは難しそうだが、数回やってみれば理解できる。

隆にはどうみても空売りの方が勝ちやすく見えた。仮にその認識がおかしくても、ないよりあった方が絶対に有利だ。

だが、それが間違いであるかのことが、早くも二週間後に起こる。何も上げる要素がない銘柄が爆上げする。ネットでもニュースがないことを確認し、取引ボードも有利なため空売りした。暫くして新しいニュースが入ったことを示す画面左上のNが点灯した。買い戻そうと思ったが、大きな損失は初めてだったので認めたくなく、すぐに一日の値幅制限の上限、天井まで持っていかれた。大損と明日も爆上げかものという思いがパニック状態にさせ、すぐに買い戻し損失を確定させた。しばらくの安堵感の後、自分がミスした事に気が付く。それは頭の中で何度もシュミレーションしたことだった。

天井で、損失を確定せずに数の株を買い戻すべきだった。

株価が急に天井にいった次の日に空売りが禁止になることがある。この銘柄もそれに当たる可能性が高い。そうなった時、隆の感覚では五割位で、空売りする存在がいなくなった、逆日歩の過大評価、などの要素により株価は急激に適正以上に上がり、急激に適正まで下がる。適正以上に上がる可能性は半々であてにならないが、上がってしまった下がる方はほとんどだ。何処から下がるかも見究めるのは見やすい。雪だるま式に下がるからである。空売りの株数と保

有数が同数なら株価がいくらになっても逆日歩と貸し出し料という少ない損失しか生じない。つまり、明日の爆上げの後、下げ始めに売ってしまえば、カラ売りだけが残りぼろ儲け出来たのである。

勿論、損する可能性もある。だが、隆の中ではローリスク、ハイリターンで、天井で買う一手だった。実際に空売りが禁止となる。次の日、朝から相場全体が大きな下げのため、その銘柄も大して上がらなかったが、そうしておけば損失は半分以下に抑えられたように見えた。

その後は好調な日々が続く。信用を始めて日給一万後半だった、大損の日を除けば日給二万円台で、数ヶ月前と比べれば、夢のような日々だ。ただ、隆は不満だった。犯罪の方が遥かに儲かりそうだからでなく、もっと勝てそうな感じがするからである。自分が小学生の頃に描いていた頭のいい人間なら、一年で十倍に出来ても不思議でないほど、甘く感じるからである。

大人になった隆の中では、そんな存在はたったひとりしか思いつかない、織田だ。賭けて見るか。

普通に考えれば織田は金を持っていない。片親で乗っているバイクも中古で性能も劣っていた。いくら頭がよくても資金があるか盗みに行かなければ、大金は入らない。盗みにいって捕まれば、前科があるから実刑、いくら織田でも躊躇するだろう。普通に働けば、高校退学なら月三十万などいかない。絶対に乗ってくると思った。

この時、隆はあることを思い出し軽く笑った。織田は童顔すぎるため、どこのパチスロ屋でもすぐに退去させられたからである。

儲けのうちの半分が報酬という条件で織田にトレードして貰う。これで乗ってくるだろう。自分でも倍はいけるだろし、織田なら確実にそれ以上いく。織田が儲けた金で自分のだけ運用すると言い出して、それまでのノウハウが得られる。

それが正しい判断か確認するため織田という人物を意識をする。漫画の影響で中学時代囲碁が流行った。たまたま、プロの養成機関にいた人間がいた。織田はルールを知っている程度で九目置かせ

てもらったが、当然負けた。「織田が負けた」、一人が大げさに何度も言った。それが癪にきたのか、次の日からノートパソコンを持ってきた。囲碁の棋譜の再現を高速で次々と繰り返す。それを隆は後ろの席から見ていた。初めて見た教員は当然注意するが織田は全く無視をする。だが、昔と違い少し落ち目になったラーサには最高学府に絶対通るであろう存在は有り難いらしく、次の時間に来た別の教師が織田君だけ特別ですと言い切った。二週間ひたすらそれが続いた後、勝ったら三万円をやるという条件でプロの卵と対戦する。いくら織田でもという意見は少なく大半が勝つだろうと予測していた。それほど異次元な人物だと認識されていた。結果は織田が大差の中押し勝ちをした。数ヵ月後、体育の時間にソフトボールが行われ、投手は大げさに言った人物だった。織田の一打席目、打球は投手の腹に当たった。織田は御免とすぐに謝った。投手も割りとクラスを中心人物だったため、見栄で痛いのを我慢し続ける。隆は気付いたが、織田が自分にはよくしてくれるので言えなかった。予想通り、二打目は慌てて出したグローブにかすり肩に当たった。

自分よりはるかに優秀であることはいくらでも思い出せる。だが、危ない人間であることも同様である。大人になったのか、後者を過大に意識する。

その内にあることに気が付く。犯罪との兼ね合いだ。一週間後に祭りで、引越し先はすでに決まっていて、今日にでも入れる。織田が予想通りの利益を出してくれるなら、犯罪計画は捕まる割合を含めれば割りに合わない。三倍程度なら、先に犯罪をやって元金を増やした方がおいしい、ただ、その間に織田が何かしはじめていたら駄目になるかもしれない。迷ったが、織田という結論を出した。

織田の異常性（後書き）

ありがとうございました

警察に通報

「織田がいつ刑務所から出てくるか、知っている」

「もう、とっくに出てきてるよ」

「いつ」

「二週間前ぐらいじゃないか。大体、江口さんと一緒に刑期だし」

「織田の家の電話番号知っている奴の番号を教えて」

「無駄だよ。江口さんと一緒に失踪したよ」

「えっ、失踪。江口が失踪したのか」

隆は慌てて聞く。

「一緒に失踪したんじゃないかと、別々だよ」

「それはどうでもいいけど、江口は失踪したんだよな」

「ああ、そうだよ」

「どうする」

「どうするって。探すわけないだろ」

「そうでなく、江口は多分復讐しに行く。つまり、殺しに行くってこと。そのことを警察に通報するかどうかってこと」

「江口さんでも、そこまでしないだろう」

「する可能性が高い。他に失踪する理由がない。それに江口の今までを思い出してみろ」

健太は黙り込む。

「あいつはまるっきりガキなんだよ」

「そんなこと今は関係ないだろう」

「小学生の頃を思い出してみろ。プロ野球選手になりたいとか、バロンドールをとるとか、総理になるとか、絶対に有り得ないことを言っている奴がたくさんいただろう。それらは自分が社会の中心になりたいという欲求からきているんだよ。江口は高校まで社会そのものだっただろう。多分、負けかけたのは小六の時、俺と喧嘩した時だけだろう。違うか」

「その通りだけど」

「あの時、傍から見たら負けたんだろうけど、本人はこれっぽちもそんなことは思っていない。実際、俺は死にかけたわけだし。前にも言ったと思うけど、少年というのは社会そのもの、中心になるうとするんだよ。だが、社会に負けて、若しくは社会の方が強いと分かって社会の中で生きていく。つまり、大人になるんだよ。今回江口が負けたとか検察警察の方が強いと認識したらしない。だが、失踪したんだろ。天上天下唯我独尊の江口様はそんな認識をしなかったと思うのが普通の判断だろう」

「でもでも」

「昔、鬼塚暴走族って人気があるスロットでビッグの時、天下無敵って出てただろ」

「ああ」

「昔、暴走族が全盛期の時、旗にはそれに似た言葉がたくさん書いてあっただろう。たいていの少年は皆そう思いたいんだよ。普通の人間は思いたいレベルだが、江口は思って当然の環境にいたんだよ。小学校の時ですら教員は江口に関わるまいと必死だっただろ、警察も帝を逮捕する気など皆無だっただろ」

「ああ、そうだけど」

「天下無敵と思っている人間が全然関係ない事で、しかもそれを知っている奴等に二年以上檻に入れられたらどう思うと思う。普通の人間でも殺してやりたいと思うだろう。あの江口様なら殺してやると思わないはずがない。後は逮捕されることをどの程度恐れるかと、相手が強いのに立ち向かっていけるかって問題だろ」

「ああ」

「殺人の逮捕率はそんなに高くないが、確かにこれを恐れてしない可能性があるのは事実だ。もうひとつの方、相手が強い時、立ち向かっていけるかは江口の場合愚問。小学の時から自分に逆らう人間に対しては、相手が自分より大きかろうが立ち向かっていつてるだろう。動物の一番大事な本能、自分より強いものとは戦わないが

機能してないとは思えない」

「でも、本当は江口さんも普通の人間じゃあ。一卵性の双子の弟は普通なんだし」

「普通なわけがない。それに和也は普通でなく馬鹿丁寧だろう。もし、和也が兄と同じタイプの人間でもあなる。あんなのに逆らったら、毎日死を意識しないといけない。服従しきって幼児期から善人を絵に描いたような人間になるのが普通だよ。でどうする、警察に掛けるか」

「俺たちが言わなくても、誰かが」

これを言われた時、隆は気が付く。当時何故か、自分は誰かが「織田が復讐をしにいく」と言うのではなく、誰もがそう言うが無意識に処理をしていたことに。つまり、自分は必死に説得するし、黒崎署は神奈川県警に上げ、警察全体で江口をマークするということだ。だが、ちよつと考えればその逆であるのは分かる。

「最高裁は事実認定しないから正しい判決だろう。それ以外の警察、検察、裁判官は江口が有罪だと思ってると思うか」

「無実だと知ってるに決まっているだろう」

「この処理全体を指示した人間以外は全員大人として当然のことをしたまで。この事件は結構多くの国民が知っていると思うけど、全く反応しない。法治国家だとするなら幼児の集まりだが、実際は大人として正しい反応をしているだけ。要はこの国は子供はほとんどいない。大人は警察と戦うなどという発想はないし、もし気付いたとしても君子だから警察に通報しない。あつ、それに江口の本当の恐ろしさを知っているのは多くみても百人程度だろ。他の奴はその辺の極悪とか言われている人間の遙か延長線上にいる位の認識だろ。また、その百人のほとんど全てが江口の意に反する事するという発想などない。どうする」

「でも、あいつら、殺されて当然だろ」

この時、隆は気が付く。自分は通報しなくて殺された時の罪悪感から逃れたいのだと。妹に「お兄ちゃんが殺した」と言われた、そ

のことから生まれた苦痛を二度と味わいたくないから、こんな会話をしているのだと。今回は母親の時と違い、自分の意思で人の死が回避できる。だが、言われて気が付いたが、殺された方が社会的にはいいと思うのは事実だ。隆の中で天秤が働く。

織田なら全員殺せるかもしれない。それなら公益と自分の罪悪感と天秤に乗る。だが、江口ならよくて二人だろう、その後は元の警察に戻る。それなら、その殺される二人の家族が可哀想なだけだし、和也も悲惨。それに俺自身が不快だ。

「そうかもしれないが、もし殺されたら凄い罪悪感が残るぞ。それに江口は一人殺した時点で死刑の可能性が高い。親分が死んでも構わないのか。ガードがたくさんついていたら江口も人を殺さなくても済む。どうする。お前自身は出来ないだろうから、お前がしても構わないのなら俺がするし」

暫くの沈黙が続く。

「頼む」

「分かった。このことは忘れろ」

隆は通信記録から怪しまれるのを恐れ地元付近に戻り、公衆電話から警察に通報した。

警察に通報（後書き）

ありがとうございました

多分殺人

ビールを一口飲む。いつもより爽快感が違う。前とは比較にならない新しい部屋を自然と見渡す。上機嫌なのはそれがよくなったからだけではない。あることに気がついたからである。

昨日の通報するという判断が異常に正しかったことだ。

もし、江口が関係者を殺したら、どうなるであろうか。普通に考えれば警察一丸となって逮捕に望むだろう。そうしたら、自分は関係ないが、健太にはたびたびマークがつくだろう。犯罪なんて出来ない。あの事件の関係者にガードが付き続けたら、さすがの江口も諦めてくれるだろう。

織田の実家に電話をしたところ本当に失踪したみたいだった。そうなると犯罪計画がおいしすぎる。

この計画自体は捕まる率は低く、標的はいくらでもいるので、軌道に乗ればひとり当たり月に百万以上は楽にいくと思われる。だが、ある種の恐喝のため、相手側の生活に支障をきたさない程度しか取れない。だからひとり月三百万位の儲けが限界だと思われる。株は多分年二倍は楽にいく。だがそれは資産が数百万円だからである。仕手株や値動きが激しい株だからであり、その規模は小さい。運用が二千万円なら倍に何とかと思えなくもないが、一億なら今の実力では到底無理だ。要は株より犯罪の方が、一億位までは圧倒的においしいのだ。このことは自分が言わなければ、健太は知るはずもない。犯罪がばれた時、気持ち的には、健太が自分と無関係を装ってくれるとは信じている。犯罪的には被害者が名乗りにくいいため、被害額が少なく執行猶予が付く可能性が高い。しかし、被害の金の流れを言わないと実刑だと脅されたら、すぐに健太は言ってしまうそうである。言いさえしなければ、健太の資産は株で毎年倍に増えていくと思わせておいて、刑罰とよく比較させておけば、その可能性

は極端に薄まる。

江口が殺すか否かで二千万円以上楽に違いそうだな。そう思った後、ビールを一気に飲み干した。

次の日も株は好調だった。そうはいっても資金が少ないためサラリーマンの平均日給程度だが、それが健太を信用さすための材料になると気付いた直後なので異常にうれしい。これが連日続く。

そして、健太がここに来る日に衝撃的な事が起きる。

一昨日、マンション建設関連の指数が発表された。悪化しているのだが、それは予想値よりはるかにいいらしく、関連銘柄がほとんど上がる。次の日もそれらが続伸する。この手の銘柄は今年に大手建設会社が潰れた関係で暴落し、空売りが出来ない銘柄が多いため、値の上げ下げが激しい。空売り出来る銘柄もそれにつられ激しく動くことがある。その中に異常に空売りされ、通常の三十倍という異常な逆日歩がついたマンション銘柄があった。何故、異常な空売りがされているかというと、その株が過大評価されていて、じきに下がらると思っている人が多いからだ。逆日歩とは空売りをしたものが、信用買いをしているものに対し払うものである。信用買いとは空売りの反対で、空売りとは通称で正式には信用売りだ。逆日歩が一株百円なら信用買いをすると百円貰え、空売りしている方は百円支払うのである。

逆日歩が高いということは、空売りした人間は早く買い戻さないと持っているだけで金を沢山取られるということである。空売りの数が異常ということは、将来株が多数買われるということである。つまり、株価が上がっても短期で買い戻される株が多数あるということである。そういう理由で、株はどんどん買い進められることが多い。

今回は株価が急激に上がり天井張り付き、東証が空売り禁止にする可能性が高いと思っている。出れば、それに空売りをする人が出てくる、買う方は空売りが増えたため、安心して買う。それが繰り返され、チキンゲームが始まる。これを防ぐためであろう天井で張

り付いて、空売りがまたは、東証がそれを防ぐなどのため、空売りを禁止する。

この時に確実に大損するのは、最初の逆日歩が異常な時点で空売りし、翌日に持ち越した人である。

つまり、明日も爆上げする可能性が結構高いということだ。事実そうなり、朝から10%位上昇する。今日が天井なら空売り禁止になり、それがまた爆上げ呼ぶ可能性が高い。今回はカラ売り数と逆日歩が異常なため、なかなか株が急上昇後、落ちてこない可能性が高い。

どうする。

天井が近いため、とりあえず買いを入れる。天井に張り付かれたらもう買えなくなるかもしれないからだ。その後も順調に上がり、天井に張り付きぱなしになる。どうする。たいていは一度は天井から落ちる。つまり、今空売りをしておけば儲かる可能性は高い。しかし、取れる値幅は少ない可能性が高く、あっという間に張り付かれたら買えなくなる。つまり、売り買いが同数になり、明日爆上げした時、利ぎやが取れない。天井の買いが異常な数のため、今すぐ決めなくてもよいのだが、昨日飲み過ぎたため、トイレが近い。どうする、そう自分に問いかけた時、異常な数量の売りで異常な買いが減っていく。視界を広げる、左上の銘柄名の横に新しいニュースを示すnという字が赤く点灯していた。見ている時間などないし、いいニュースの可能性は低いので、すかさず空売りをする。急激に減っていき、天井を離れる。すかさず、保有株を売る。その後雪達磨式に下がって行く。板を注視しながら、ニュースを開く。それは倒産の可能性を見出せるものだった。株価はさらに急激に下がり11%辺りをうろちよろする。便意を我慢しそれを見続ける。数十分後、昼休みになったのでトイレに行く。その後、その銘柄について分析するため、ネットで検索する。どちらに動くにしても値幅が大きいのは確実だ。自分自身は長期的には買いだと思うが、日経平均がボックス圏の上方なので放置かと思いつながら調べ続ける。ちょ

っと前、自分が反応すべき文字を見た気がするので、ページを戻す。北御殿市で火事、一家三人が死亡。

ページの右端のニュース欄にあった。当然、これに反応して押す。記事は簡単なもので、一番知りたい出火原因については書かれてなかった。次に知りたい世帯主山本慶一の職業は公務員とだけ書かれてあった。おそらく絶望すべきなんだろうなと思った。当然、あの事件と関連する公務員か調べたが、何も分からなかった。健太に電話するが繋がらない。絶望から逃避するため、銘柄情報を必死に探し始めた。

取引の終わりである三時が過ぎる。株はだいぶ前から大量の売りを残し、底に張り付いていた。これは明日の大暴落、つまり、隆の大儲けを意味する。だが、気分は鬱、一昨日江口が殺人を犯さなければ二千万円以上と計算したばかりなので当然だ。だが、本当はこう解釈するのが正しいのかもしれない。二人で犯罪をした後、江口が人を殺すと、警察は身内意識から全力をつくし、暴走族仲間の健太を調べる。つまり、早く殺してくれてラッキーだと。

ないに等しい可能性に掛け、静かに健太の到着を待った。

多分殺人（後書き）

有難うございました

来客は警察官（前書き）

全てフィクションです。

来客は警察官

時計を見ると、もうすぐニュースが始まる時間だった。大量殺人が起きたため、多分放送されないと思うが、一応見ることにする。新宿で五人連続で刺されたニュースが長く続く。早く終わってくれという気すら起きない。次のニュースに移る時、呼び鈴がなったので急いで玄関に走った。

「よっ、ひさしぶり。祭り最高だったぞ。おまえも来ればよかったのに」

微笑みながら健太は言ったが、すぐに隆の深刻な表情に気が付く。

「何か。あったのか」

「北御殿で山本慶一という公務員が火事で死んだ。電話で何者か調べてくれ」

「えっ、分かった」

健太が電話を掛けまくる。そして五人目で判明する、被害者は検察事務官だった。それは検察官を補佐する仕事である。

「ほぼ、決定だな」

「なんでだよ。本当に火事かも分からないじゃないか」

「そういう意味でなく、実行の延期が決定。帝の役つきだったんだろう」

「ああ」

「なら江口が出てくるまで、多分警察はお前をマークし続ける。だから、犯罪などできない。多分、お前のいう通り火事だろう、気にするな」

「そうだよな、本当にそう思うよなあ」

「ああ、マスコミ報道でも犯罪の可能性に触れてなかった。多分、本当に火事なんだろう」

「ああ、そうだよ。江口さんが人を殺すはずなんかないよな」

「ああ、これから飯を食べに行こう。俺のおごりだ」
早く捕まって、江口様。隆はそう思った。

翌朝、隆はネットカフェにいた。健太にたまたまぼろ儲けしたのがばれたくないのだ。自分には株の才能があり、捕まるなら自分一人でと思ってもらうためだ。

取引ボードでその銘柄を見る、空売り禁止になっていて、不安になる。だが、取引の気配値は昨日に比べー10パー辺りだ。初値決定前はあてにならないが、ー10だし売り買い量が半端でないので安心する。願い通り順調に下がっていき、底にいく。いつもなら、底で買いをいれて小幅反発を得る可能性を考えるのだが、とてもそんな気にはならない。残りの資金も同様で運用する気が起きなかった。今日、仮に奇跡的に急上昇するニュースが出てても板が分厚いので簡単に対応できるため、することがない。動かない株価をずっと見続けることはできない、当然暇になる。すると考えることはただひとつだ。

健太に対する警察の対応である。

ここに健太がいることを警察は簡単に突き止めるのだろうか。そして健太にずっと張り付くのだろうか、それともすこしの間だけ。無職の男二人が暮らすのは不自然で、俺と健太に人間関係があることは、今後のためにばれない方がいいに決まっている。とりあえず、この一ヶ月間は健太には別々に暮らしてもらおう。

電話を掛けようとするが、通信記録のことが気になる。そうだ、通信記録を警察が調べられるのなら、今まで何度も掛けているのだからどっちみちばれるんだ、気にすることはない。

「もしもし、今どこ」「家」「今から帰るから、話があるの
で外に出ないで」、家に帰って事情を説明した。一ヶ月間は警察の様子を見るといふことになり、隆が家賃を出すという条件で話がまとまった。健太の暇つぶしとして、パチスロ屋に連れて行き説明を

した。電話することは有り、会うなら暗いパチスロ屋ということを決まった。

月曜の朝、注目の株は－10%で始まる。もう、この時点で緊張はない、急激に上がるにしても売り板が厚いので1%も損しないからである。残りの株と資金をどうするかを考えはじめ。明後日アメリカで大きなイベントがあるので、今日は市場は様子見だ。隆はそれが大きな上げをもたらすと思うので、それを参考に買いを中心に売買をする。次の日も市場は穏やか、利益が拡大する。あの株はまた－10%を中心に上下していた。そして、その夜アメリカは大幅な上げを記録する。だいたいアメリカが上がれば、日本も上がる。当然、隆も期待した。

朝、昨日と違いいつも通り、自宅で株の取引ボードを見ていた。期待に反し、日経初値が1%位しか伸びてない。隆の感では2%強はいく感じがするので、当然放置する。もう、1台のパソコンで関連情報を見ていたところ、呼び鈴になる。隆は無視をするが、鳴り続ける。仕方なしにレンズを覗くと、見知らぬ男が立っていた。警察位しか思いつかないのでチェーンを掛け、ドアを開ける。

「何か用ですか」

「警察のものです、江口さんのことでお聞きしたいことがあります」

「江口さんと言われましても、どの江口さんでしょうか」

「江口達也、中村さんのいた黒崎市の暴走族帝のリーダーです」

「江口さんは存じておりますが、一緒だったのは小学生の時だけで、しかも同じクラスになったことはありません。お話しすることは何もないと思いますが」

「すいませんが、署まで来て頂けませんか」

「私が呼ばれる趣旨を多少でも話して頂かないと」

「江口が刑務所に服役していたのは、ご存知ですよ」

「はい。人から聞きました」

「彼が出所後、失踪したんです。それで行方を捜しているのです」

が」

「さっきも話した通り、江口さんとはほとんど関係ありません。彼は確か暴走族のリーダーだったと思うので、その仲間に聞いてください」

「いい加減にしろ。テメーが江口が人を殺すって電話してきたんだろうが」

今までと別の男が怒鳴った。健太君、堪忍してよ。せっかく地元付近まで帰って電話したのに、そう思った。

「何のことだか、さっぱり分かりませんが」

「ふざけんな、人が殺されるかもしれねえんだぞ。協力しろ」

「分かりました。協力させていただきます。十分ほどお待ち頂けますか」

「はい、分かりました。すみません」

隆は株を見る。問題の株以外は何のためらいもなく処分する。現在それは一八％、ニュースを見るが何も書かれてないのでそのままにする。服を着替へはじめると、玄関を強く蹴る音が聞こえた。馬鹿相手か、そう思った。

来客は警察官（後書き）

ありがとうございました

隆が容疑者（前書き）

全くのフィクションです。私自身何の思想信条はありませんので、
ご不満があれば書き換えます

隆が容疑者

警察に向かう車中では誰も一言もしゃべらなかつた。署に着き、テレビで見るのと同じ取調室に通された。捜査側はメンバーがひとり加わった四人だった。隆とリーダーと思える男が机をはさんで座り、その両隣に部下らしき男が一人ずついた。もうひとりは別の机で書記係の様だった。

「江口さんをご存知ですよね」

リーダーと思える男が切り出した。

「はい。さっき言った通り、小学が一緒だっただけです。しかもクラスは一緒になったことはありません」

「嘘をつくな。たったそれだけの人間が殺すなど通報してくるか」
さっき怒鳴った小太りの男だ。多分演技でなく、こういう男なんだろうなと隆は思った。

「何をおっしゃられているのか、分からないですけど」

「中林が言ったんだよ。お前が通報したって」

「面倒臭いので正直に言いましょう。私があなた方に報告しました。大騒ぎしているところをみると、それらしき事件が起きたのですか」

「北殿の少女強姦事件をご存知ですよね」

「はい。中林さんに聞きました」

「こちらも正直に言いましょう。あなた方gggがあ的事件の恨みを晴らすため、江口の仕業に見せかけて殺そうとしているのではないかと思っていますが」

「はい。あああ、gggはただ単に公道でレースをするだけです。一応名前もありますが、江口さんのグループみたいに特別な仲間意識などありません。あの事件の時にgggのメンバーは結構逮捕されたのですか」

「岡村さん、こいつやっぱ怪しいでしょう。通報したことを隠

したり、あの強姦事件は聞いただけと言って、ほとんど知らないふりをしたり」

「そうですよ。仲間があれだけ逮捕されているんです。知らないはずがない。絶対に怪しいですよ」

「織田をはじめ、お前の仲間がたくさん逮捕されたよな」

「岡林さんに聞いたメンバーによると知り合いは結構いますが、私の友達は織田ともうひとりだけです」

言った後、隆はまずいと思った。さっきの設定では捕まったメンバーを知らないという設定になっているからである。

「さっきから聞いた聞いたって、さも知らない振りしやがって。知らないわけないだろ。お前の仲間はどこに消えたんだ、言えよ、早く」

「私の質問に答えて頂けたら、全てお話しますが、どうしますか」
「いいだろ。言ってみろ」

「あの事件のメンバーが殺人を犯したと思われる事件が起きたのか。それと誰が失踪しているのかです」

「殺人とは断定出来ないが、北殿で火事で関係者がなくなった。

失踪したのは菅野、……………」

隆は自分が疑われた理由に納得した。失踪者に帝のメンバーもいるが、江口以外はg g gに全員属していた。

「ありがとうございます。とりあえず、私は北殿の事件と全くの無関係だということを証明すればいいわけですよね」

「ええ、そうです」

「その当時、私は交通事故にあったのですが、警察は過去の事件を調べられますか。被疑者は死亡しましたが、一人死んでいるので起訴されているらしいのですが」

「ええ、調べられます」

隆は事故を説明する。リーダーの指示に従い、部下は事実確認をするため部屋を出て行った。

隆が容疑者（後書き）

ありがとうございました

江口は殺人者（前書き）

全くのフィクションです。私自身何の思想信条はありませんので、ご不満があれば書き換えます

江口は殺人者

「今のが事実で中村さんは事件と無関係だということで、話を進めます。どうして我々に江口さんが殺人を犯すかもと連絡して下さったのですか」

「一国民として当然の義務だと思います。ただ、それだけのことで」

「警察に逆恨みする人間は多々いますが、誰一人と言っていないほど、復讐をしようとした人間はいません。それなのに何故江口はすると思ったのか、その部分を説明して下さい」

「警察に復讐しないのは強いからでしょう。人間の本能として、対象が強ければ服従するというのがあると思います。江口さんはそれが機能していない特殊な人間で、攻撃的性向も異常なので報復殺人もありえると思い、事件を未然に防ぐために電話しました」

「江口がそんな人間だと思える例を挙げて頂けませんか」

「私の直接の経験は一度だけです。新学年の始めに「間違っても江口達也君には逆らわないように」と担任がクラス全体に言いました。江口さんは双子で達也さんとは同じクラスになった事はなく、喧嘩が強いとか危ないとかいう話を聞いたことがあるかな程度でした。一卵双生児の弟の和也さんとは3、4年同じクラスでしたが、大人しく気弱でした。だから、親がやくざ系だからそんな注意をするのかなという認識でした。ああ、親がやくざというのとは噂のレベルですが、街に相応しくない大豪邸に住んでいたのは事実です。小六の春です。廊下で私が友達との会話で笑うと、後ろから奇声を挙げて江口さんが私のひざ裏を蹴りました。とても痛かったので、とっさにやり返しました。当時は私の方が体が大きかったので、一回蹴ったらよろめいていました。でも、すぐに奇声をあげて掛かってきます。やくざの息子というのが頭にあったもので、普通なら泣かせて終わりなのですが、手加減して自分の方が強いんですよ位に留

めていたんです。でも、何度でも奇声を挙げて掛かってくるので、おもいっきり腹を蹴りました」

「お前の自慢話はどうでもいい。核心だけ言え」

「江口さんの人間性をよく分かるよう、丁寧説明した方がいいと思います」

「すみません。丁寧な方をお願いします。続けて下さい」

「うずくまったので終わったと思います、その場を去ろうかと思いましたが、また奇声をあげて掛かってきます。完全に頭がおかしいのだと思い、走って教室に逃げました。当分、本気の鬼ごっこをした後、江口さんが去ったので、自分をクラスに戻って話をしていたところ、江口さんが警防というか不良が使う鉄の武器らしきものを持って追いかけてきました」

「だから、そんなの何処にでもある話しだろ」

「うるさい。すみません。続けて下さい」

隆の感覚では「そんな小学生が他にもいるのか」だが、警察だから特殊な奴を結構を知っているのかと思った。しかし、江口の次元が違うのは確実なので話を続ける。

「いくら逃げて、追いかけてくるので、私は職員室に走って逃げました。ここからが滅多にないお話です。その時、教員はたくさんいました。当然、誰かが止めてくれると思いますが、ほとんど見て見ぬふりでした。若い女の先生が江口君、江口君と声を震わせて言っていたぐらいです。どうしようもないので、そこから逃げ学校を出て、一応逃げ切りました。それからもう一度学校に戻り、教員室に行きました。多分、さっきはいなかった私の担任がいたので、事情を説明しました。何って言ったと思いますか」

「土下座して謝れ。そうしたら許してもらえらるだろう」

「さすが刑事さん、惜しい。正解は土下座して謝れ。命の危険を感じたら走って逃げろ。その間、私が時間を稼ぐからです」

「嘘をつくな。そんな教師いるか」

「いい先生ですよ。その先生が教えてくれたのですが、江口さん

は小学生なのに、今まで二人の教師をやったそうです。一人目が男性教師、何かの理由で江口さんは軽く怒られたそうです。勿論まともにもやり合えば、勝てるはずはないですが、私の時と同じようにいきなり急所をやってきました。前からだったので金的です。小学生が大の大人に戦いを挑むという発想がないからでしょう、当たってしまい、うずくまった所を脳天に肘を落としたそうです。即病院行きました。二人目は女教師です。それを知っていたので、その場は逃げたそうです。勤務が終わりに家に帰ってみると、二人の娘さんがぼこぼこにされ倒れていて、その横に江口さんが立っていました。逃げようとするライターで火をつけると脅したそうです。その後、ぼこぼこです。男性教師は親がヤクザでしかも大金持ち、つまりその世界の大家だろうということを恐れ、何も請求しなかったそうです。しかし、女性教師はおそろるおそろる損害を親に請求したそうです。すんなり頭を下げて要求額にかなり上乘せし払ってくれたそうです。ただ、損害を賠償したことを言わないという条件です。それは賠償をするイコール負けと捉えたら、何をしでかすか分からないからだと思いますよ。そんな馬鹿なという問いに、幼稚園の時にすでに人を殺したことがあるのを教えてくれたそうです。学校が届けたら特殊施設に行く可能性があるみたいですが、その話を聞いて調べたところ事実だと分かり、復讐が怖くやめたそうです」

「本当ですか」

「ええ、私の範囲内は本当です。先生が嘘を言ったかどうかは知りません。確か小五だったと思いますが、女教師が顔に包帯をまいていたことがあるのは事実です。当時の教員に連絡すれば、真実だと分かることだと思います」

「中村さん自身はどうなりましたか」

「土下座して謝り、主な怪我は頭部にひび、指二本と肋骨二本からです。大変いい先生なのか、事件化するのをおそれたのか、先生も一緒に謝ってくれました。そうそう、その次の日から江口さんは授業中、後ろでスクワットや腕立てなどを始めたそうです」

「何故、警察に連絡しないのですか」

「十一歳なのだから、警察は何もしないでしょう。報復が怖いし、殺人をしてもノーペナルティーですしね。みんなが報復の対象になるのを恐れて、無敵であり続けたってことでしょうね」

「馬鹿じゃないのか。警察に言えば、捕まえるに決まってるだろ」

「いえいえ、警察に逮捕する気など皆無です。多分、署に私たちの同級の子供が結構いたからでしょう。帝の奴らですら、江口がらみでは一度も逮捕されないって自慢してましたから。埼玉の人にはわからないでしょうけど、今回逮捕したのは隣の市の警察です。江口の存在を知っていたでしょうけど、ごく普通の悪の延長線だと思っていたんじゃないですか」

「そんな馬鹿な話は絶対にない。悪い奴らは絶対に捕まえる。それが俺たちの仕事だ」

「新潟県で強姦犯が冤罪だとわかりましたよね。あれは全国民の九割以上知ってますよね。つまり、あの警察官は罪を犯しているわけですよ。逮捕しましたか。それ以前に誰か逮捕しろといいましたか。たしか検察官は一人一人が独立した捜査機関ですよ」

二人とも黙る。

「江口さんは自分が強姦をしたのを忘れていて、自分が無実なのを知りながら警察、検察は自分を二、三年間檻にいられたと思ってるわけです。普通の人間なら二年もわけの分からない理由で檻に入れられたら、いれた人間を殺したい、逆に入れてやりたいと思います。でも警察相手だと精神が服従し、国に損害賠償を求め、警察にはせいぜい謝罪をもとめるくらいです。要は相手が強いかどうかのポイントです。江口さんの場合は、人間にとって一番大事な本能のひとつ、対象が強ければ服従するという機能が崩壊している、若しくは自分が一番強いと処理をしている、このどっちかだと思われる、そのため警察の皆さんを殺害しにいくと思い、電話しました。ついでに付け足しますと、多分皆さんも江口伝説を帝らの取調べ等で聞いていると思います。ただ警察に対する復讐という犯罪が起こりえ

る要素、警察が強くても関係ない、という本当の江口伝説を知っているのは、私と小学教師など数十人だけだと思いましたので、もしものことを思い警察にお話しました」

「ありがとうございます」

その時、扉が開く。

「岡村さん、こいつの言っていることは嘘です。それらしき事件がなかったのです、その年自体を詳しく調べましたが、それらしき事件はありません」

「えっ、えっ。だったら電話しますのです」

健太に電話を掛ける。

「警察の人の質問に正直に答えて」

岡村に携帯を渡す。そこでは納得したみたいだ。隆は携帯を返して貰い、数人の電話番号を教えて貰う。それに電話を掛け、岡村に電話を渡すを繰り返す。

「納得して頂けたでしょうか」

「ええ、一応病院で裏は取りますが」

「でも悪い事をしましたよね」

「何がですか」

「あの強姦事件、皆様も本当は冤罪というより、検察、警察の犯罪だと思っているでしょ」

江口は殺人者（後書き）

ありがとうございました

挑発（前書き）

全てフィクションです。

挑発

「あの強姦事件、皆様も本当は冤罪というより、検察、警察の犯罪だと思っているでしょ」

皆黙り込む。

「私が通報しなければ、犯罪者どもが殺されていたはずです。あなた方もそれを願っているでしょう」

「テメー」

ふたりが凄いい形相で睨み、岡村も険しい表情になっている。

「なにか、勘違いしていませんか。あんな奴らがいるから、皆さんみたいに大半が真面目に働いておられるにも関わらず、税金泥棒と言われるわけです。私は正義感のかけらもない人間ですから、どうでもいいですけど、皆さんも本当は御殿の奴らを逮捕したくて仕方ないでしょ。とくに其の割腹のよい」

「テメー」で隆につっかかり、椅子ごと倒す。隆は肩を地面に打ち付ける。「浜村、やめろ。浜村」で興奮男の行動は止まる。その後、隆は指を押さえていた。

「こいつのやったことは傷害だろう。捕まえろよ」

「どうも、すみませんでした」

「捕まえないなら、マスコミに言うからな」

「言いたいなら、いえ。証拠が」

「どうもすみませんでした」

声を荒げてリーダーは言った。

「岡村さん、こいつの携帯、多分レコーダーが付いている奴です」しばらくしても、隆が右手をポケットにいれていたためか、木村が気が付く。

「済みませんが、それを貸していただけませんか」

「断る。もう用が済んだだろ。送れよ」

「貸して頂けませんか」

「しつこい。断る」

「仕方ない。奪い取れ」

小声で岡村が言った。ふたりの男が近づく。

「強盗じゃねーか」

其の声もむなしく、力づくで取られる。

岡村たちがそれを弄るが消し方がどうか分からないためか、人を呼んでくる。簡単に解決した後、すぐに帰って行った。

「すみませんが、少々お待ちください」

そう言って岡村は部屋を出て行く。

「このくそガキ、警察を舐めるのも大概にしくされ」

それに隆は笑って返す。また、浜村は隆に突っかかっていく。もう一人が必死に抑える。

「お前ごとき、本気になれば、いつでも檻にいれられるじゃ」

そう言いつつも、行動を抑える。

「そう言いながら、後退ですか」

それにはキレ、隆の胸倉を掴み押していく。木村が必死に止める。机にいた人間も参加し、収まる。するとすぐに岡村が帰ってきた。

「また、暴力をおこされたんですが」に対し「いえ」の三連が返ってくる。

「そういうことです。先ほどの携帯の情報を消した詫び代です。どうぞ」

隆が袋の中を見る。五万円だ。

「少ないにもほどがありませんか。犯罪なんですよ」

「あなたなら言うと思いました」

もう、ひとつ白いふくろを渡す。隆は中を見る。五万円だ。

「まあ、いいでしょう。でこいつの慰謝料は」

「それは日を改めて伺います」

「だったら傷害をしたことを認める証拠を作れよ」

「それは出来ません。それに中村さんいい加減にしろいた方がいいですよ。こいつが馬鹿なのを利用し、不法行為をさせ賠償を取る。」

一般ならともかくここは警察ですよ。ところによつては一生嫌がらせを受けると思いますが」

隆は黙る。

「確かに浜村がやったことは暴行ですが、あの程度なら不起訴です。其の程度のことです。で浜村の払う慰謝料いくらにしますか。今日、決めとかなないとややこしくなりそうなんです」

「三十万」

「浜村、いいか」

「何故、出さなくてはいけないんですか、取調べ中でしょ」

「お前のやったことは捜査とは全く関係なく、暴行。警察官なら積極的に出して当然。出さなくていいと思うか。木村と伊藤」

二人は反応しない。

「二人とも出すべきだそうだ。額はともかく出さなくてはいいけないとか小学生みたいなことを言うなよ」

「分かりました。十万円で勘弁してください。中村さん」

「今すぐ持って来てもらえらると思ひ、最低の三十万なんですけど。本来なら百万は欲しいところなんです」

「堪忍してください」

「もう、十分で四十万にしますが」

「払いたくても、お金がないんです。堪忍してください」

「払いたいんですよ」

「えっ、ええ」

「サラ金で借りてきてください。警察官なら必ず借りれるでしょ。利息分以上負けて二十五万で結構です。これでごねれば本来の百万要求します」

「ええ、分かりました」

「今から取って来てください。いいですよ、岡村さん」

「ええ」 浜村は部屋を出て行った。

「部下に恨まれても構わないんですか」

「全然、構いません。私はここの人間ではありませんから」

「タクシー呼んでもらえますか」

「あいつが帰ってきてからでいいですか」

「ええ」

二十五万を受け取り、タクシーに乗る。そして、健太に電話する。

「お前、犯罪の計画のこと話してないだろうな」

「勿論。江口さんの仕業に見せかけて、お前たちgggが復讐しようとしているのだからと警察が言ったから、それを晴らそうと思っ
て正直に言ったんだよ」

挑発（後書き）

ありがとうございました

復讐対象を探せ（前書き）

全てフィクションです。

復讐対象を探せ

その夜、隆は新築に近い庭付きの民家の呼び鈴を押す。小学低学年の少女が出てきた。

「お父さんに、お金を貰いにきたよって言うてくれる」

少女は父親を呼びに行った。来た男は隆を睨んだが、近くに少女がいるため声を出さない。

「損害賠償を頂きに参りました。家の中でお話しますか」

「何のことですか。さっぱり分かりませんが」

「あのね、舞ちゃん」

小指に包帯を巻いてある手を上げる。

「分かった。外で話そう」

「中がいいのですが」

「お願いですから、外で」

隆はポケットから機械を取り出す。そこから声が出てくる。「江口さんをご存知ですよね」 「はい。さっき言った通り、小学が一緒だっただけです」

「中に決定ですよね」

隆は客間に通される。和風のそれなりの部屋だった。

「三十万払えないなんて大嘘ですよ。こんな立派な家に住んで浜村の視線が下を向く。」

「これが診断書です。三箇所も回りましたから間違いないです。」

でどうします、他の二件。強盗と傷害の損害賠償、私は最低1千万位だと思っうんですけどね」

黙ったまま反応しない。

「私は素人なのでよくわかりませんが、これを同時の犯罪だと見るのは不可能じゃあないですか。警察官がいて二度とも犯罪が一旦止まったんですから。つまり三件別々の犯罪で実刑三年以上確定だと思えますが、違いますか。強盗だけで実刑は確定ですよ。浜村

さん教えてください」

「脅す気か」

「別に脅しなどしません。あなたが私の被害を回復しようとしま
いと告発するつもりですから。ただ、あなたに警察官を辞めさせる
のは社会に申し訳ない気がします。黒崎署を見すぎたせいかもしれ
ませんが、あなたの犯罪を憎む姿に大変心打れました。たまたま、
私にしたことはそのパワーが間違った方向に出ただけではないかと。
ですからあなたをテストしてみようと思います。もし、あなたが社
会にとって必要不可欠な警察官なら、わたしはあなたの刑事事件に
あえて目を瞑ります」

当然、浜村の態度は変わる。

「何をしたら、よろしいのでしょうか」

「私が交通事故にあったのは事実です。多分、何かの手違いで資
料から抜けているだけだと思うのです。私の事故の担当者とその時
の責任者を端末だけで捜査してください。黒崎署は江口さんの事件
関連で知っていると思いますが、出鱈目なところなので、くれぐれ
も直接聞くなどしないでください」

「分かりました。全力を尽くさせていただきます」

「それともうひとつ、捜査情報を教えてください。ちょっとこれ
を見て頂けますか」

携帯を見せながら、話をする。

「これが今朝買った株です。それでこれが捜査に協力するために
仕方なく売った値です。その後、急激に上がっています。もし、モ
ニターの前に続けたなら八万の儲けでした」

そう言って画面を次々に変えた。

「それとこれ、見てください。これがあなた方が来た時をゼロと
すると、そしてこれが話をしている時、一六万です。そして、捜査
協力をしているとき一十二万ですよ。で最後が一十六万です。株
のこと、あまり知られませんよね」

「はい、全く」

「だったら説明しませんけど、あなた方が来たことで、大きく損をしたことはお分かりいただけますよね」

「はい。勿論わかります」

「江口さんが大量殺人を犯し、なかなか逮捕されなければ、私たち関係者を全員を不当逮捕してでも、江口を捕まえようとするでしょう。そのこと自体は公益上、すべきことだと思います。しかし、株を持っている時、これをやられて数日間も拘束されたら大変困るわけです。お分かり頂きますよね」

「はい、分かります。ただ江口関連以外は知ることはないので、無理だと思うのですが、それでいいですか」

「はい。私は底辺の人間ですが最低限は超えていません。不当逮捕以外の情報は一切教えて頂かなくても結構です」

隆は玄関を出る。ここからが勝負なんだろうなと思った。

まあ、俺とぶつかったのは多分警察官の息子で、多分生きているだろう。俺が死ぬだろうと思ったから、自分の息子の犯罪を全部俺に押し付けた。過失がこちらにないことが判明した時のことを考え、架空の人物を作った。間違いないだろう。

でも、本当に警察官の息子なのか。事故の記憶は全くないが、普通に考えれば向こうも大怪我をしているだろう。バイクに乗っている人間は繋がりが多いため、地元付近の人間なら噂から判ると判断し、架空の人物など作らないのではないか。でも、この地元付近の警察官の息子しか考えられないよな。奇跡的にほとんど怪我をしてないのだろう。国会議員系の息子のために、ばれれば実刑みたいなことしないだろう。

事故を必死に思い出そうとするが全く思い出せない。そのかわり思い出したくない事故後の記憶が少しずつ掘り起こされ感情移入していく。次第に事故ではなく、事故後を思い出すことが目的になっていた。母親の死、妹に言われた言葉、顔を笑われ続けたこと。この三年間の苦痛の日々がはっきり山のように蘇ってくる。その怒りを自分が歩いている民家のコンクリートにぶつける。包帯から血が

滲み、指に激痛が走る。

絶対に地べたを這いずりまわしてやる。そう思ったが、痛みは暫く止まなかった。

復讐対象を探せ（後書き）

ありがとうございました

江口の殺害計画（前書き）

江口の殺害計画

家に帰ると健太がいた。当然、隆は謝ることを予期している。テレビを見ている健太がこちらを振り向くと意外な言葉を発する。

「これ江口さんかなあ。違うよなあ」

目には涙がたまっていた。

「違うと思うよ」

画面には冷凍食品偽装のニュースが流れていた。

「違う」そう言ってチャンネルを次々変える。そこには最高裁判事宅が火災になり、現在意識不明の重体のニュースが流れていた。

「放火の疑いが強いのか」

「いや、そんなことは言っていなかったと思う」

「この判事は江口を担当したのか」

「分からない」

隆は江口の裁判を検索すると、テレビで見た苗字の人物がいた。最高裁は事実認定をしない、つまり社会正義に合致する判決だ。だが、江口なら殺意を抱いて当然だ。

「諦めろ、担当のひとりだよ」

それに反応し鼻をすすった後に、涙声で

「絶対か、絶対か」

「勿論、可能性はくはない。だが、関係者がふたりだ、完全にくはない程度だ」

健太の鼻音が、嗚咽に変わりかける。実は隆はおかしかった。事故を装ったつもりだろうが、二件とも火事では絶対にばれるに決まっているからである。それを抑え、慰めを必死に考える。

「江口は冤罪だと思っているだろう」

「当然だよ、どの誰があれで有罪だと思うんだよ」

「そう、絶対に無罪だ。だが、民事でも絶対にそれは証明できない。もう、刑事では確定している、つまり自分たちの村の頂点を否

定するような判決を出せる訳がない」

「だから、なんなんだよ」

「江口の天下無敵に憧れたんだろ。相手がどんなに強くても屈しないどころか、全くそれを気にせず戦い勝つ。これが江口だろう」

「そうだよ、そう」

「今回もそれだ。巨大な力に千人いたら、千人とも屈する。だが、江口達也は違う。男の中の男、いや、奴だけが男だ。何者にも屈しない、カッコよすぎるだろう。奴なら勝てる、今まででも勝ち続けた、今回もきつと。もし、万が一負けたとしても戦わない江口よりいいだろう。いや、江口なら必ず勝つ」

健太は奇声をあげ、部屋を出て、家を飛び出す。

復讐という行為そのものを肯定するために言ったのだが、コントみたいになり失敗だった。だが、どうすればよかったのか、分からない。そもそも健太は江口が人を殺したことが嫌なのか、捕まり死刑になるのがいやなのか、分からない。

しばらくして思った。江口は漫画や映画のヒーローみたいな奴だと。

小学生時代から知っている自分から見れば、悪魔の化身か、誰にも負けたくない、何にでも勝ちたいという純粹すぎる少年だ。

だが、冤罪事件の時点から見ると、犯罪集団に法治国家を乗っ取らそうなところを、たったひとりで殺されるのを覚悟で戦いを挑む、そんな感じか。

まあ、最初から法治国家でなく、村なんだけどな、そう思い笑った。

事実認定をしない最高裁判事を殺そうとしたのだから、殺したいのは最低十数人だろうけど、まあ、江口ならよく頑張って後2人だろう。織田なら全クリアする可能性がないことはないが。

そうそう、織田だ。バイク事故の件で俺に数千万円の金が入る可能性は大有り。それなら犯罪より株だろう。自分でやるより、絶対に織田に頼んだ方がいいに決まっている。織田が引き受けるか、多

分そうする。それなら事故の件でも手伝ってもらうかとうかだな、健太は頼りなさすぎる、いや、役に立たない。織田に頼るべき否、どちらが正しいのか。織田の居所を探すのは簡単だろう。失踪したメンバーに含まれていないということは、家族は本当に知らないのかもしれないが、警察は把握しているということだ。浜村は知らないかもしれないが、岡村は多分知っている。

でも何故、検察事務官と裁判官なんだ。この2人に対して恨みがあるとしても比較上大したことないはずだ。検察事務官はせいぜい嫌味を言うぐらいだし、最終決定をしたとはいえ最高裁判事は主任でなく書面だけで会ってすらいらない。えっ、はじめに江口でなく、ggg側を疑ったのはgggに失踪したメンバーが多いからだと思っていたが、そうなのか。最初に殺された検察事務官と江口とは無関係でgggの誰かを担当したからでないか。だから俺を疑ったのでないか。江口がgggのメンバーに見せかけるためやったのか。えっ、でもおかしい。こんな遠回りしていたら、あと二、三人殺された時点で関係者にガードがつくのは、誰でも分かる。殺したいであろうベスト10は誰も殺せないという状況になるのが必然だ。事務官はたまたま火事になっただけで江口ではないのか。

江口が事務官の犯人か否か別にして、ひとりやった以上絶対に報復は止めないだろう。江口の立場に立って考えてみよう。

あの判事を殺したかったんなら、殺害したい人間は、残りの判事で八名、検察官が三名以上、刑事が多分五名以上か、被告二名、刑務所関係で十名以下だろう。仮に自分を刑務所に入れることに関わった全員が対象なら、ひょっとして百数十人かもしれない。国民が冤罪だと騒がなかったことに腹を立てれば標的は日本国全体だ。それはないか、唯我独尊の人間は他人に規範は求めないだろう。今回も単純に自分に危害を与えた者は死ねだ。

どう低く見積もっても、殺したい人間は十数名、警察官以外はまとめて殺せない。まともにやれば二件起こっただけで、完全警備で不可能になる。そのうち一件以上を今回のあまり関係のないと思わ

れる裁判官で使うのはもったいないだろう。あつ、そうか、自分は関係者が死んだ時点で、それが誰であろうと九分九厘江口と思っっているから分らなかったんだ。原因不明の火事や放火はまああることで、事務官判事が焼死しても、誰も江口の仕業だとは思わない。多分犯人は江口だが、原因不明の火事に見せかける放火の実験台が、たまたま検察事務官だったんだろ。それか犯人を他の失踪者に見せかけるためだ。当然すぎるが、江口が事務官と関係なければ疑わない。江口を詳しく知っている人間でなければ、判事の焼死だけでは、これまた誰も江口の仕業だとは全く思わない。つまり、江口から見れば、今現在自分が疑われているとは思ってないし、それが正常な判断だ。そう、自分が通報してなければ、続けて関係者が死んだ時、初めて警察は江口を疑うんだ。

そう、十数人を全員殺そうと思えば、自分がマークされずに、標的がガードされないことが大切だ。そう、絶対にそうだ。

そのためにはどうすればいい。最高裁判事は間違いなく殺されただろう。検察事務官は分からない。江口から見ても関係者が二名ならともかく三名続けて殺したら、自分が疑われるのは分かりきったこと。最高裁判事の原因不明の焼死は国家的意味を持つが、事務官は全く意味を成さない。

暫く考えある可能性を見出す。

「日本国に対するテロにみせかけ、狙いを気付かせずに標的をやる」、江口が捜査対象にならないための方法はこれしかないだろう。

江口の殺害計画（後書き）

ありがとうございました。

殺人で利益を

そうか、株取引ボードを開く。アメリカ市場は＋150の上げだった。原因を探すと簡単に見つかる。あるアメリカの金融会社をアラブが救済したのだ。これで日本も上げだろう、四日連続の上げでボックス圏の上の方、江口が国家に対するテロに見せかける可能性がある、間違いなく売りだな。

週明けの朝、予想通り日経平均は＋140から始まる。日経平均先物売るつもりだったので、それだけを注視する。順調に伸びていき、＋270になる。売りだな、せいぜい上がっても330だろう。予想通り＋310を天井に＋250が終値だった。先物売った時点で倒産株はストップ安で放置のため、ほとんどすることがない。気が抜けると健太のことが心配になり、電話を掛けるが繋がらなかった。暇つぶしにパチスロ屋に行く。千円で大当たりすると出続けるのだが、倒産株で百数十万の勝ちが確定した直後で別になんともない。これからの日経平均と事故の賠償を考えれば微々たるギャンブルで、本当の暇つぶしだった。

日経平均先物とは225銘柄の平均価格の予想を売買するものである。簡単に説明すると、はじめに証券会社にお金を預ける。最高百万円弱に対して1単位が売買出来て、売り買いどちらからでも入れる。日経先物は10円単位で動き、1単位価格が動くことで1万円の損得が発生する。つまり、二日で二割損得をするのは当たり前のことだ。株のように所有権を売買しているわけではなく、単に株価の予想を売買しているだけなので、月に一度清算される。先物価格と実際の価格は連動して動くことがほとんどで、朝のはじめ以外はあまり変わらない。

夜十時を過ぎる。健太に電話をするがまだ繋がらない。今度は浜村に電話する。

「もしもし、お願いがあるのでですけど」

「はい。何でしょうか」

「あの事件で逮捕された人物は全員、居所を調べたんですよ」

「はい、そうです」

「その中に織田という男がいるのですが、どこで何をしているか。教えて頂けませんか。私は織田の親を知っているのですが、行方不明になったと心配してましたので」

「ggggのリーダー格の方ですよ。たしかパチンコって書いてあったと思いますよ。失踪してない中では一番上に書いてあり、とても異質だったので覚えています。住所は確か神奈川です。神奈川以外の住所は書いてなかったので間違いないと思います」

「詳しく分かりますか」

「いえ、申し訳ないですけど無理です。これは神奈川県警の件で、そこから岡村さんが中村さんと岡林さんの聴取に来られました。一応、お二人に聞くことは無いということになり、帰っていかれたので資料は全くないです」

「岡村さんの名前を教えてくださいますか」

「岡村友則、神奈川県警本部の方です」

「ありがとうございます」

「いえ、あのう、依頼を受けた件なんですけど、少し分かったのですが、今、話しましょうか」

「さすがですね。お願いします」

「交通課の係長磯本健一、この方が関わっているのは間違いないと思います。ちなみに課長は沖田弘さんです。事故処理の方の名前も調べておきましょうか」

「とりあえず結構です。どうもありがとうございます。さすが、浜村さんですね」

「あのう、これであの件のことは」

「基本的には今のところ求めないつもりになりました」

「有難うございました」

磯本、ひょっとして、あの女の父親かな。磯本、よくある苗字でないから、そうだろう。

健太に電話を掛ける。まだ、繋がらない。メールを打つかと思っただが、健太が何を望んでいるか全く分からないため止める。家に帰ると玄関の鍵が開いていた。どうする、まあ出たとこ勝負か。中に入ると、パソコンの前で大泣きをしていた。テレビが付いていて、ニュース番組が流れている。

昨日の分を今大泣きすることはないだろうな。

「俺よそで泊まるから、好きにして」

「ありがとう」

聞き取りにくい、涙声でそう答えた。

殺人で利益を（後書き）

ありがとうございました

江口の顔

ネットカフェに泊まることにする。店に入り受付を済ますと、店内で数人見かける。ネット難民、この言葉を思い出させる寂しさと孤独さを感じた。自分も傍からみれば、そうなんだろうと思った。漫画とコーヒーを部屋に持ち込む。パソコンを起動させ、まずは株を見る。アメリカは市場が開いて一時間半だが、高値で取引されている。あーあ。

今度は日本が下げるかもしれない要因を見る。株の先物を買ったのは、誰かが殺されて株価が下がることを期待したのではなく、あくまでも殺されることを予想して売ったものである。しかし、健太が悲しんでいることも含め、何か嫌な感じがあるのも事実だ。複雑な心境の中、右クリックをする。

今回火事によって焼死したのは元建設大臣太田正一だった。どこにも放火殺人の可能性も出火原因も書いてない。

警察は自分の話を聞き、教員から裏を取っているに違いない。この人は全然関係ないが、前の二件と同じ火事のため、全部江口の犯行だと判断しているだろう。でも、まだ殆どの人間がテロとは認識しないだろうから、株価には関係ないだろうな。

漫画を数冊読むと眠たくなる。それ用のソファのある部屋に移動するが、寝付かれない。ネットで泊まるのとぼろやに住むのは値段的に変わらないように思える。この寝心地の悪さも慣れれば平気なんだろう、生活難民でなくネット難民の方がよかったかなと思った。

朝起きて、すぐに株価ボードを開く。ボックス圏のほぼ頂点なので、ひょっとして大丈夫かなと思ったが甘かった、初値＋230。もう一方の倒産株は朝一からストップ安だった。まあ、五日連続の上げ、普通は明日はさげだよなあ。そう、その通りだ、それにこの含み損は大した金額ではない、ないわけがないか。

いまのところ先物の含み損は、莫大でショックだ。しかし、先物

の決算が三週間後なので、まだ精神的には余裕がある。

現実逃避か、賢いのか、別の事を考え始める。

俺と事故った奴からいくら取れるか、これが大事だ。ほぼ、間違はなく俺を引いたのは公務員の息子だ。懲戒免職になれば退職金二千五百万以上、年金六千万以上失なう。検察は多分しないと思うが、まともに処理をすれば実刑確実だ。そのことを意識させれば、最低の最低でも三千万円は取れる。

どうする、やっぱり織田か。そう、だよな。磯本たちが誰をかばっているのか分らないし、あいつらは絶対に事故はなかったと言い張る。自分の頭ではどうするのが最適なのか、分らない。織田なら損害賠償の一割で乗ってくれるだろう。パチンコ屋で稼いでも一日二万台が限界だ。今すぐ探しに行くか、いや俺の無実を証明してくれた人たちの証言ビデオが家にあるはずだ。実家に帰りたくないから、それを送ってもらってからだな。

それなら、今すべきことは健太をどう慰めるかだな。もう、金絡みでは用はないから友達としてだけだな。でも、慰めようがないもんな。そもそも俺からみたら江口の確立99パーだが、江口信者から見ると偉大すぎる教祖可能性は半々なのかも。ひよっとして江口が捕まって死刑が確定するまで、程度は軽いにせよ、あのまんまなのかな。ほっとくか、そう、どうしようもないもんな。

株価が気になるので、漫画を読みながら、たまに見る。やはりボックス圈の上という認識が皆にあったのか、徐々に下げ+130で前場を終え、昼休みを迎える。昼飯を健太と食べる、そんな発想が頭に浮かぶが、やっぱり慰め方が思いつかないので止めにする。十二時になると込むので、手前のラーメン屋で早めの昼食をとることにした。旨いかといえば旨い程度なので、頭には余裕がある。やっぱり健太と飯を食べるべきだったかなと意識しているうちにあることに気が付く。

江口はひよっとしてなかなか捕まらず、十数件犯行が続くかもしれないということだ。

その最大の理由は、顔が凶悪さどころか攻撃的性向もほとんど感じさせない、どこにでもいる顔だからだ。

隆は江口自身ばれてないつもりでも、警察は江口の犯行だと知っていて、全力で捜しているのだから、もう二、三件で捕まると思っていた。

しかし、それは大間違いだ。指名手配犯の場合、写真や情報を警察全体とホテルや銭湯などにばら撒く、親族や恋人の線が期待できないなら、それが捜査のすべてと言っている。隆は江口が整形しない限り、街ですれ違っただけでも絶対にすぐに分かるつもりだが、警察官は覚えてすらないのだ。警察は出所前に写真を数枚取っているかもしれないが、3年間の写真はないと思われたため、証明写真のような写真数枚から江口を捜すことになる。身長170前半、体は鍛え上げられているだろうが、他はなんの特徴もない。

もう、二、三人殺されたら、ぶらぶらしている健太にマークがつくかも。そしてその連れの俺にも。いや、俺自身にも単独でマークがつくかも。そうしたら、バイク事故の警察関係者から賠償金を取りにくくなるかも。

絶対に急いで賠償を取りに行くべき。織田だ、織田を捜すべき。ラーメンを食べると急いで家に帰った。まだ、放心状態っぽい健太が何もついてないテレビの前で座っていた。

「健太、健太、俺、数日間帰ってこないかもしれないから。紙にメモしておいてあることをよく読んでな」

「ああ」

聞き取れないような声で返した。

江口の顔（後書き）

ありがとうございました

織田の居場所

埼玉県警に電話を掛ける。

「中村隆と申します。そちらに刑事さんの岡村友則さんはいらっしやらないでしょうか。江口達也の件でお話したいことがあると言つて頂ければ、分かると思いますが」

「すみませんが、岡村が存在するかどうかもお答えできないことになっております」

「わかりました。失礼します」

埼玉県警に電話しても岡村がいないことは分かっていた。もしものための通信記録を作るために掛けたのだ。目的の神奈川県警に掛ける。

「中村隆と申します。北殿の失踪メンバーについての情報提供がしたいのですが、刑事の岡村友則さんはおられますでしょうか」

「北殿の件ですか。少々、お待ちください」

「ありがとうございます。捜査三課の持田と申します。どのような情報ですか」

「大変申し訳ないんですけど、私を信用して頂けるという前提がなければ、全く無意味だと思えるものです。ですから私の電話番号をお教えしますので、もしよろしければ、岡村さんに掛けて頂くといいことにして貰えませんか」

「はい、分かりました。では、お電話番号を」

十分後、電話が掛かってくる。

「もしもし、岡村です。先日は有難うございました。情報とは」

「火災三件とも放火の可能性がありますよね」

「すみませんが、そういうことはお答えできません」

「なら一方的に私の話を聞いてください。多分三件とも江口さんの仕業だと思います。本人は自分が怪しまれていると思っておらず、

ある種のテロに見せかけて、本命の北殿の関係者をどさくさに殺そうとしているのだと思います。江口さんの容姿に特別な特徴もなく、当分逮捕されることはないかと思います。それで少しとはいえ私の知っている江口の情報がその役に立てるのではないかと思ひまして」

「有難うございます。是非、教えてください」

「大した情報ではないのですが、構いませんか」

「勿論です。正直、手がかりが全くなく、困っていますから」

「私は今からそちらに帰る用事がございますので、岡村さんが暇な時に会って頂ければ、その時にお話します」

「ええ、分かりました。この捜査が私の仕事ですので、いつでも会えるのですが、いつにしましょうか」

「それなら、駅に着いて改めてお電話致します」

隆は電車に乗り、横浜に向かった。そして、警察のすぐ近くにある喫茶店で会うことになった。

「お久しぶりです。喫茶店で本当にいいですか」

「警察が嫌だと言われれば、仕方ないでしょう。それに別に聞かれてもそう不味くはないですから」

「帝の誰か、江口さんの情報をしゃべりましたか」

「いいえ、仲間意識なんでしょうね。全く」

「たばこはエクステです。それがなければ、セブンハイです。こんな小さい情報ばかりですけど、役に立ちますか」

「ええ、潜伏しているのを探すという作業になってきたので、役に立ちますけど、その手の情報なら電話でもよかったのでは」

「いいえ、もう少ししたら分かります。とにかくカレーとラーメンが大好きです。インスタントラーメンは函館一町とんこつ味ばかりだそうです。缶ビールはドライアル以外ほとんど飲まなず、アイスが異常に好きでクールアイスばかり食べているそうです」

「伝聞ですか」

「はい。中林が中高時代に言っていたことなので、間違いないと思います。それと江口さんは頭はいいという認識ですか」

「ええ、一卵双生児の弟が私立トップの早田大の文系災難関学部ですし、本人も小中時代はほとんど100ばかりですからね」

「本人は知りませんが、双子の弟は学歴ほどの頭はないです。私がラーサなのはご存知ですよね」

「はい。捜査線上に上がりましたから」

「その中学だったので、その時にもう高校の勉強も一応済ませていました。そのため高校時代に教えることが多かったのですが、弟は並でした。数学に関してはレベルは低いほうでした。その観点からいくと難解な方法で殺害されたときは江口さんでない可能性があると考えた方がいいと思います」

「それは江口が国全体に対するテロに見せかける可能性があるため、江口の犯行に見せかけ、自分の利害関係者を殺す奴が出てくる可能性もあるかもしれないということですか」

「はい、私の情報提供はこれだけです。この間、携帯の情報記録を消した代金を頂きましたよね」

「はい、それが何か」

「今度は奪い取るという行為の時の傷害についての金を頂きにきました。携帯を力ずくで奪われた精神的苦痛は高額なのでまた改めて請求します」

「ほう、証拠は。というのは愚かなことですか」

「ええ、その通りです。三十万でどうですか」

ICを取り出しそう答えた。

「ついでに全部請求して頂けませんか」

「無理です。それとgggのメンバーの八橋と織田の住所を教えてもらいませんか」

「それは別に捜査対象ではないので構いません。その見返りに、その録音を売ってもらえませんか。百万円ぐらいで」

「それも無理です。江口に検察、警察関係者が殺されたら不当逮捕や報復をするでしょう。違いますか」

「しないと言い切れません。だったら、江口が逮捕されれば売

っていただけるんですね」

「只でいいですよ。犯罪の証拠を売るのは犯罪に近いですから。それとは別に不当な逮捕や拘束をされそうになったら教えて頂きたいのですが」

「それは犯罪ですから出来ません、そんな選択はできないですよ
ね」

「はい。不当なんだから、教える方が全体の奉仕者の義務でしょう。それとこの前、あなた方が来られたので株で五万円以上得するところが数千円になりましたから。その保障をあなたがして頂けるなら、お断りして結構ですよ」

「拘束が数日間にあたれば、それが数百万円になることもあるんですよね」

「ええ、その通りです」

「分かりました。報告しましょう。八橋さんと織田さんの住所は二時間以内にお知らせします」

本当は織田の住所以外はどうでもいい。それに気付かれない感じで済み、隆はうまくいったと思った。

織田の居場所（後書き）

ありがとうございました

再会 1

黒崎市の駅で降りる。妹二人には出来るだけ会いたくないため、父親の仕事が済むであろう時間まで待つことにする。だがここで迷いが生じる。

無罪である証拠を確保しておいた方がいいに決まっている。しかし、下手をしたら黒崎署全体を敵に回すことになるかもしれないのだ。自分は直接は被害を受けないが、家族三人はここで生きていくのだ。証拠を取りにいくことは、そのリスクをはっきり意識することになる。それに証拠DVDを探すということは、損害賠償を父親が期待することになってしまふ。それが得られれば父に渡すつもりだが、もし失敗したらをイメージする。警察の組織ぐるみなのだ、その可能性はなくてはならない。

織田だ。先に織田にしよう。奴ならなんとかしてくれるだろう。奴が必要だと言え、その時に取りに行くことにしよう。

電車に乗り、目的の駅に着く。タクシーに乗り目的地に向かう。途中にパチンコ店が六軒立ち並ぶ道路を通る。ここなんだろうと思って、暫くすると目的地に到着した。二階建てのぼろアパートの1階の隅の部屋のベルを押す。何度も押すが全く反応はない。5時にもなっていないので、当然だとも言える。待ってもらっているタクシィに乗り、パチンコ店密集地に行く。

二軒目は歩くにしては距離があるので、ここにいてくださいと願いつつ、一軒目を回る。パチンコよりパチスロの方が時給が遥かに高いと思うので、そちらから探す。激戦区でこの店月に一度のイベントらしく満席に近い。ドル箱も普通に積まれている。顔を確認するためなので、ゆっくり進むことになる。そのため、何度も客に顔を振り返られる。

そのうちに気が付く、織田がいたとして自分は分かるのだろうか。健太の場合は顔があんまり変わっていないので、すぐに分かった。だ

が、あの会場にいた多くが、言われれば分かる程度が多かった。織田の顔の方があいつらよりはっきり覚えている。しかし、無敵だった男が、社会の本当の一番底辺である刑務所で三年近く過ごしたのだ。顔が変わってしまつて、分からなくて当然なのではないか。

そう思ったが探すしかない。列が変わったところで、今一番儲けやすい機種のコーナーになった。ここにいてと願いつつ、ひとりひとり顔を見ていく。すると前方の通路から人が声を出した。なんとなく織田に似ている。男は急ぎめに近づいてきた。

「タカ、タカだろ」「将だよな」自分もうれしいはずだが、相手のハイテンションにおされ少し引いている。「どれだけ探したことか」隆は想定外の言葉に戸惑う。外に行こう、外に」織田の勢いに素直に従った。

再会1（後書き）

ありがとうございました

再会2

「もう、どこも悪くないのか」

「ああ、ありがと。ほとんど完治したよ」

「俺、刑務所から出てきて探しまくったんだよ。でも、誰も知らなくて。いま何処にいる」

「大宮」

「頼みがあるんだけど、いいかな」

それは聞かなくても分かっているが、上からの態度を取ると自分が頼む時に気まずいので

「こっちも頼みがあって探しにきたんだ」

「おう、ラッキー。それなら今、連チャン中なんでそれが済んでからでいい。199xの連で長いと思うけど」

「ああ、全然気にしなくていいよ」

二人は織田の席に行く。そこには隆の感では三万円分のコインが積まれていた。一気に五万円でもおかしくない機種なので当分続きそうだ。隣の台が空く。すかさず織田はコインを入れた。

「設定6だけど打つ」、「ああ、打つ」多分平均時給四千円台だ。織田がパチスロの画面に反応し、無邪気に声を掛けてくる。それは時折みせた病的攻撃性以外時の中高時代と同じだった。それにひかれ同じように子供の様になる。結局、止め所を失い四時間が経過したのち、二人は大量のコインを流し換金をした。

「話は今日にするか。それとも」

「明日、パチンコ屋にいかなくてもいいなら、明日の方がいいけど」

「それは構わないけど、何処で会う」

「将の家はどう。人に聞かれたら不味い話なんで」

「それなら今日にしよう。実家に帰ってくるの面倒くさいだろ。泊まれよ」

「ああ、将がいいなら、そちらに方がいいけど」

「足は」

「ない」

「なら二ケツするか」

「ああ」

二輪場に行く、当然バイクだと思っていた。しかし、出てきたのはぼろい自転車だった。だが、織田は気にする様子はない。隆は後ろに乗せ、帰路に向かう。

「警察に聞いたんだろ。俺の住所」

「ああ、どうして分かったの」

「警察以外、知らないと思うから。警察に知り合いがいるの」

「ああ、いま中林と住んでいるんだけど、江口の関係で警察が来て知り合った」

「へえー、そうなんだ」

コンビの前にで自転車を止める。

「俺んち本当に何もないから、買っていこう。悪いけど、朝の分まで買って」

隆はにぎりと菓子パンとお茶を買った。また、自転車に乗る。

「毎日、パチンコ屋に行ってるの」

「ほとんどそう。まともに働いたら金貯まんないだろ。この地域ではここが一番出ているから、ここにわざわざ引っ越したんだよ」

「日給三万いく」

「全然、二万台前半じゃないかな」

「俺を探した最大の理由はそれだろ」

「ああ、そう。金を貸してくれてこと。バイク系の方は金を全然持っていないし、喜多高の奴らも大学生で持っていない。一番話が分かって金を持っていそうなのがタカってこと」

「貸すってことは株か、為替ってことだろ」

「ああ、そう。流石話が分かる。試しに株の口座を開いてみて、シュミレーションをしてみたんだけど、信用がなければ三百万円な

いと、パチンコ屋の方が遥かにおいしそうだった。虚偽の報告をして信用を取ったら、江口がいるから危ないだろ。意味通じるよな」

虚偽の申請を元に信用口座を開く、これは刑法の文書偽造に当たる。さらにそれによって利益を上げた時、それが不当利得に当たると見なされる可能性もなくはない。

「ああ。警察も俺たち不良グループと同じで仲間がやられたら徹底的にやり返すってことだろ。何故か県警はgggと江口と仲間だと思ってる」

「それは仕方ない。gggは中学生の江口がバイクレースをはじめて、その残りが始めたのがきっかけらしい。だから帝の奴が結構いるだろ。それとタカはやり返さないだろ」

「そうだね。それで金を貸すって話は基本的にはオッケーなんだけど、それよりもっとおいしいかもしれない話がある」

「えっ、ひょっとして、交通事故が偽装だったのか」

「ああ、そう」

さすが、織田だと思った。

「それで相手が分からないから、どうしようって話だな」

「ここで家に着く。「本当に何もなし」、その言葉通り室内には本当に何もなかった。そこではガスコンロが贅沢極まりないように思える。部屋の壁なども、それに相応しいものだった。」

さすが天才、目的に対し最短をいく。隆はそう思った。

再会2（後書き）

ありがとうございました

再会3

「それで成功報酬は」

「5パー」

「ということは一割だな。三千万超えたら、その内二割でどう」

「ああ、それでいい」

超えてもたかがしれているので気軽に返事をする。

「それでどこまで分かっているんだよ」

「俺の事件の担当係長がひとり分かっている。それとその時の上司と、それだけ」

「そいつで間違いないの」

「関与していることは間違いない」

「どうする。だいたい私が計画を立てていいのだろ」

「ああ、そのために頼んでいるんだし、それで成功確率はどんなもの」

「さあ、問題は江口だな。もし、大人しくしていてくれたらほぼ100%。江口は失踪したんだろ。もう、誰かを殺したの」

「多分、検察事務官、最高裁判事、元大臣」

「多分というのは」

「全部火事で三つとも放火の可能性が高いとさえ、報道されていない。全部一週間以内の出来事」

「まあ、普通に考えれば全部江口が殺したんだろうな。警察は江口が怪しいと知っていると思う」

「絶対に知っている。俺が教えたから」

「どういうこと」

「殺人が一件も起こっていない時に江口が失踪したと聞いて、警察に電話したから」

「だったら、一日でも早くした方がいいな。今から情報を集めますか」

「どういうこと」

「相手が警察なんだから、いっぱい調べることがあるだろう」

「今から、ネットの繋がるところにいくってこと」

「ああ、そう。江口が捕まる前より、捕まった後の方が安全だが、売りというどでかいチャンスは逃げる。当然、前者だろう」

流石、天才だ、自分とは次元が違う。

「ああ、その通りだね。江口が警察の仲間を殺す前に片をつけるべきだね」

「身分証明がいらない、近場でない所、どこか知っているか」

「エーピーってチェーン店が身分証明がいらない。携帯でどこにあるか調べるよ」

携帯を出し探す。

「近衛市、横浜市、淀江市。こんなところかな。近衛が県外だからこれで決まりだろう」

「ああ」

「今から行くんだろ」

「ああ、勿論。少しでも早くだろ」

「ああ、これ。連絡はこれでして。いざとなったら、捨てて構わないから」

隆はポケットから、携帯を取り出し渡す。犯罪計画用のため、もう一社と契約していた。織田と自分との連絡記録を残さない方がいいと思ったのだ。

「OK」

二人はタクシーを呼び、直接店に向かう。お互いの思い出したくない三年間には触れず、少年の頃の馬鹿話に終始していた。

再会3（後書き）

ありがとうございました

新たな殺人

目的地に着き、ネットカフェの店内に入る。

「本当に私がほとんど計画を立てていいんだよな」

「勿論、俺には将ほどの記憶力も思考力もない。だから、頼んだし」

「だったら、好きにしよう。別に寝てもいいよ」

「あっ、ありがとう」

隆は部屋に入り、自然とネットを開くためにパソコンを起動させる。その時、織田の何もない部屋を思い出す。それは貧しさでなく、金を貯めるためという目的のために最短最善を尽くことを隆にはイメージさせた。過去の織田がいつもそうだったからである。

そう、数千万の金が掛かっているのだ。計画は決まっていなくても、今の最善は分かりきっている。それをしないのは馬鹿すぎる。隆は部屋を見て回り、一番寝やすそうな部屋を選んだ。

早朝、目覚める。織田が作業していた部屋を覗くと、戸が開いていた。つまり、違う部屋で寝ているということだ。お茶を飲み、毎日の習慣である今日の株価変動の要素を分析しようとする。

日経平均＋20だった。昨日のアメリカが爆上げで日本も朝方は＋230だったので、あれから210も下げているのだ。これで朝一以降、爆下げの要因が出なくて下げたのなら、大多数が間接的に今の値段を上限と判断していることになる。

江口が誰も殺していませんように。

祈りをながら、昨日の株価変動を分析するサイトを見る。上がらなかったのは最近の急激な上げに対する警戒感と割高感からだろうと書いてある。いつもはこの手のサイトは2つしか見ないのだが、いくつも調べる。だいたい、同じようなものだった。

勝った、そう感じた。普通に考えれば、当分は下げる要素は結構あるが、上げ要素はあんまりない。

アメリカの株価と外国市場の日本先物の終値を見る。両方、大きく下げていた。これで当分株価の上げを気にする必要がないと思った。

ふと、健太のことが気になり、携帯を見る。メールも電話もない。何かを打とうかと思った。しかし、返答がきたら、これからすることの邪魔になりそうなので止めた。

数十分後、わざと戸を開けて漫画を読んでいる隆は、背後に気配を感じて振り返る。

「多分楽勝だぞ」

「ホント。あつ、ありがと」

ここから小声になる。

「報復もほとんど恐れる必要がないみたい。逆なら多々あるが、日本全国県警が署の代理報復をしたケースは一度もない。警察のシステム上も心理学も大丈夫な可能性しか見出せない」

「分かった。それでいつにするの」

「準備が出来次第。そう頼みがあるんだけど」

「何」

「五十万出すから、本木電機をカラ売って」

「別にいいけど、今日がいいなら、とりあえず俺が出しとくがどうする」

「そうして。基本的には朝一で構わない」

「それはいいけど、何で本木なの。直接はないにしても竹輪かケダンだろ」

「本木は完全な天井だし、前々なんだ」

「あつ、そういうこと」

隆は織田が言うんだから、警察に電話しないという思いが沸く。だが、これからすることを考慮すれば、この前の様に警察に関わられたら困るので、有り得ない選択だと思った。江口が危険ということとを告発したのは隆だけなのだから、また隆だと推測できるからである。

織田が部屋にあるメモ用紙に計画の第一段階の大枠を書き渡した。

「それなら帰るということで、タクシー。いや、携帯だと株板が大して見れないから、もう暫くここでいい」

「勿論」

八時四十分、市場が開くまで後二十分だった。

「本木の情報だけ教えて」

そう言って、織田は隣の部屋に入った。株取引ボードには資金が表示されるからである。

昨日の初値から1210の終値が意味するもの、つまり多くの人が今の株価が割高だと思っていること、それと昨夜のアメリカの爆下げと円高、それらから爆下げが予想できるのだ。隆はボードを開き、期待を込めて日経先物の気配をクツリクする。その数値は異常な-530で均衡していた。朝-1300台でさえ、月に2回前後見かける程度の気がする。喜びよりもまさかの気持ちの方が、はるかに大きい。あくまでも取引前の数値なので、すぐに他の株の気配値を見ると、同様に爆下げを予想させるものだった。その中に本木電機があるだが、18%辺りに値があった。他が平均-4%台なので、それは異常な数値であった。

隆が考えられる要因はひとつだ。検索サイトで火事を引く、ある意味予想通りの検索結果が並んだ。ただ、殺されたのは経済団体の前々会長本木潔でなく、現在の副会長兼美津株式会社社長田植守正だった。

隆はショックを受けた。加害者から損害賠償を回収してから、その大金を日経先物で売り、そしてこの暴落で大儲けを期待していたのだ。

自分の株先物の売りは様子見が決定なので、織田に本木電機のことを伝える。すると当然の答えが帰って来た。当然、今日は株価が乱高下するのは、決定だ。そんな日に隆は新しくポジションを取るつもりはない。タクシーを呼んだ。

新たな殺人（後書き）

ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4935f/>

21世紀も少年

2010年10月11日00時32分発行